

SigmaSystemCenter 3.5

**リファレンスガイド
注意事項、トラブルシューティング編**

－第 2 版－

免責事項

本書の内容はすべて日本電気株式会社が所有する著作権に保護されています。

本書の内容の一部または全部を無断で転載および複製することは禁止されています。

本書の内容は将来予告なしに変更することがあります。

日本電気株式会社は、本書の技術的もしくは編集上の間違い、欠落について、一切責任を負いません。

日本電気株式会社は、本書の内容に関し、その正確性、有用性、確実性その他いかなる保証もいたしません。

商標

▪ SigmaSystemCenter、WebSAM、Netvisor、InterSecVM、iStorage、ESMPRO、EXPRESSBUILDER、EXPRESSSCOPE、CLUSTERPRO、CLUSTERPRO X、SIGMABLADE、および ProgrammableFlow は日本電気株式会社の登録商標です。

▪ Microsoft、Windows、Windows Server、Windows Vista、Internet Explorer、SQL Server および Hyper-V は米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

▪ Linux は Linus Torvalds 氏の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

▪ Red Hat は、Red Hat, Inc.の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

▪ Intel、Itanium は、Intel 社の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

▪ Apache、Apache Tomcat、Tomcat は、Apache Software Foundation の登録商標または商標です。

▪ NetApp、Data ONTAP、FilerView、MultiStore、vFiler、Snapshot および FlexVol は、米国およびその他の国における NetApp, Inc.の登録商標または商標です。

その他、本書に記載のシステム名、会社名、製品名は、各社の登録商標もしくは商標です。

なお、® マーク、TM マークは本書に明記しておりません。

目次

はじめに	vii
対象読者と目的	vii
本書の構成	vii
SigmaSystemCenterマニュアル体系	viii
本書の表記規則	x
1. 注意事項	13
1.1. ソフトウェア配布 / 更新機能	14
1.1.1. ディスク複製OSインストールを行う場合の環境構築の注意	14
1.1.2. DPMサーバの設置	15
1.1.3. シナリオの作成	15
1.1.4. シナリオの配布	15
1.1.5. ディスクイメージの作成	15
1.1.6. DeploymentManagerの詳細設定について	16
1.1.7. SystemProvisioningでリストアシナリオを実行する場合について	16
1.1.8. SystemProvisioningにより実行したシナリオの中断操作について	17
1.1.9. DeploymentManager以外のサブシステム削除後のマシン名について	17
1.1.10. WebコンソールからDeploymentManagerを利用する場合の注意点	18
1.1.11. イメージ展開で使用するリストアシナリオについて	18
1.1.12. マスタマシンセットアップシナリオの利用範囲	18
1.1.13. ssc deploy softwareによるBuilt-inシナリオの配布について	18
1.2. 仮想環境管理機能	19
1.2.1. システム構成について	19
1.2.2. 仮想環境構築について (関連製品の設定)	23
1.2.3. 仮想環境構築について (関連製品のSigmaSystemCenterへの登録・設定)	29
1.2.4. 仮想マシンの設定について	35
1.2.5. 仮想マシンサーバの操作について	39
1.2.6. テンプレートについて	44
1.2.7. 仮想マシンの操作について	46
1.2.8. 仮想マシンの拡張ディスクについて	61
1.2.9. Raw Device Mapping (RDM) について	62
1.2.10. 仮想マシンのインポートとエクスポートについて	63
1.2.11. テンプレートのインポートとエクスポートについて	66
1.2.12. 仮想ネットワークの操作について	68
1.2.13. 仮想マシンサーバの障害復旧後の切り戻しについて	69
1.2.14. エラーについて	72
1.2.15. ポリシーについて	73
1.2.16. その他の注意事項	74
1.3. NetvisorProを使用する場合の注意事項	80
1.3.1. スイッチ装置に対する操作について	80
1.3.2. VLANとポートの関連付け、またはVLANとポートの関連付け解除に失敗した場合の復旧手順	80
1.3.3. ロードバランサの追加、または削除に失敗した場合の注意事項	85
1.3.4. トランク、リンクアグリゲーション、ポートチャネル設定された物理ポートについて	86
1.3.5. DeploymentManagerの設定について	86
1.4. ESMPRO/ServerManagerを使用する場合の注意事項	87
1.4.1. 仮想マシンサーバのESXi 5.0以降へのアップグレードについて	87
1.4.2. SNMP Trap受信ポートの競合について	88
1.4.3. ESMPRO/ServerManagerの管理対象マシンの自動登録機能について	88
1.5. ストレージ管理機能を利用する場合の注意事項	89
1.5.1. ディスクボリューム名について	89

1.5.2.ストレージのサイズ上限について	89
1.6. iStorageを使用する場合の注意・制限事項	90
1.6.1.Integration Baseのバージョンアップについて	90
1.6.2.二次キャッシュ機能を利用する場合の制限事項	90
1.6.3.データ最適配置 (LD移動) 機能を利用する場合	90
1.6.4.パーティショニング機能を利用する場合	90
1.6.5.Virtual Volumes機能を利用する場合	91
1.6.6.I/O流量制御機能を利用する場合	91
1.7. NetAppストレージを使用する場合の注意事項	92
1.7.1.利用可能なプロトコルについて	92
1.7.2.利用可能なディスクボリュームの種類について	92
1.7.3.ディスクボリュームを公開できるホスト台数の上限について	92
1.7.4.ディスクボリュームのexports設定について	93
1.7.5.ホストへのディスクボリューム公開について	94
1.7.6.オフラインのAggregate、Volume	94
1.7.7.NetAppボリュームをホスト名でデータストア登録した際のトポロジ出力について	95
1.8. SMI-Sを利用してストレージ装置を管理する場合の注意・制限事項	96
1.8.1.ディスクボリューム番号を指定したディスクボリュームの作成について	96
1.8.2.既存のストレージとの共存について	96
1.8.3.ストレージ設定におけるLUN番号の指定について	97
1.8.4.二次キャッシュプール、二次キャッシュボリュームの扱いについて	97
1.8.5.EMC CLARiX (VNX) の利用について	97
1.8.6.iStorageのポートの情報について	98
1.9. EMC CLARiX (VNX) を使用する場合の注意事項	99
1.9.1.Navisphere CLIのインストールオプションについて	99
1.10. ユーザ管理についての注意事項	100
1.11. マシン情報についての注意事項	101
1.11.1.NIC情報について	101
1.12. Rescue VMIについての注意事項	102
1.12.1.構成について	102
1.12.2.Rescue VMIについて	102
1.12.3.監視について	102
1.12.4.復旧処理について	102
1.13. N+1リカバリについて	103
1.13.1.本番マシンと予備マシンで利用できるマシンの制限について	103
1.14. システム構成のトポロジについての注意・制限事項	104
1.14.1.依存関係設定について	104
1.14.2.仮想マシン、および仮想マシンサーバのポップアップ表示について	104
1.15. Windowsのセキュリティ強化に伴う注意事項	106
1.15.1.SSL / TLS通信における弱い暗号方式の制限について	106
1.16. InterSecVM/LBを使用する場合の注意・制限事項	107
1.16.1.ロードバランサグループの追加について	107
2. トラブルシューティング	109
2.1. エラーへの対処方法	110
2.2. SystemProvisioningのトラブルシューティング	111
2.2.1.SigmaSystemCenter 3.0以降にアップデートするとDifferential Clone用のテンプレートが使用できない	111
2.2.2.SigmaSystemCenter 2.1 update 3以降にアップデートするとDisk Clone用のテンプレートが使用できない	111
2.2.3.複数のブラウザ画面からの操作により、画面が不一致となる	112
2.2.4.マシンの移動処理、もしくは待機処理の実行中に、処理をキャンセル、処理が途中で失敗すると、マシンの状態が処理実行前に戻らない	112
2.2.5. 1つのマシンのNICやUUIDが収集で別々のマシンに登録されてしまった	113
2.2.6.マシン種別が正しく表示されない / マシン種別に依存する固有機能が正しく動作しない	114
2.2.7.PVMServiceサービスを停止できない	114

2.2.8.操作中にウィンドウが自動的にログインウィンドウに変わる	115
2.2.9.マシンの誤認識による制御異常 / 管理対象マシンのネットワーク利用不可	116
2.2.10.データストアが正しく表示されない	123
2.2.11.Windowsの管理対象マシンをシャットダウンできない	123
2.2.12.仮想マシン作成がタイムアウトする	124
2.2.13.テンプレート作成がタイムアウトする	125
2.2.14.VM移動がタイムアウトする	126
2.2.15.仮想マシン作成後のソフトウェア配布が失敗する	127
2.2.16.シャットダウン、再構成が失敗する	128
2.2.17.XenServerの起動をXenServer Pool Masterが認識しない	128
2.2.18.Xen環境でSigmaSystemCenterと実際のXenServer Pool Masterに不整合が発生した	129
2.2.19.復旧操作後に仮想マシンサーバが切断状態になる	129
2.2.20.移動可能な仮想マシンサーバが見つからない	130
2.2.21.ESXが破損し、関連付けられたテンプレートが使用できない	130
2.2.22.スタンドアロンESXi環境にてFailoverした後、仮想マシンサーバから仮想マシンが移動されていないように見える	131
2.2.23.運用ログウィンドウに「SNMP Trapを受信できません」というメッセージが出力され、Out-of-Band Management管理のイベントが検出されない	131
2.2.24.運用ログウィンドウに「SNMP Trap サービスが停止しました。」というメッセージが出力され、以降Out-of-Band Management管理のイベントが検出されなくなる	132
2.2.25.Out-of-Band Managementの操作が失敗する	132
2.2.26.XenServer Pool Masterの切り替え操作が実行された後、仮想マシンサーバがメンテナンスモードに遷移したまま解除されない	133
2.2.27.スタンドアロンESXiで新規リソース割り当てが失敗する	133
2.2.28.Differential Clone / Disk Clone用のテンプレートで作成されたレプリカVMが使用できない	134
2.2.29.仮想画面で仮想マシンの情報を表示すると、仮想マシンサーバ (ESX / ESXi) の接続状態が接続不可と表示される	134
2.2.30.ESXプロビジョニング実行時にDataCenterへの追加に失敗する	135
2.2.31.カテゴリ / グループの編集や移動を実行後、運用ログに警告が表示される	135
2.2.32.マシン置換後にESMPRO/ServerManagerの登録情報が更新されない	136
2.2.33.LDAP認証しようとするとログインできない	137
2.2.34.DeploymentManagerを経由したLinuxマシンへの固有情報反映が遅くなる	139
2.2.35.管理サーバのセキュリティイベントログに「Anonymous Logon」が大量に出力される	140
2.2.36.大規模環境でssc show machineを実行するとエラーが発生してマシン情報が表示されない	142
2.2.37.ストレージ制御でエラー、または警告を示す運用ログが出力される	143
2.2.38.iStorageへの操作が失敗する	144
2.2.39.統合サービスを更新すると新規割り当てに失敗する	145
2.2.40.[監視] ビューの「運用ログ」ウィンドウの表示が文字化けする	145
2.2.41.LDAPサーバとの同期が正しく行われない	146
2.2.42.スタンドアロンのHyper-Vホストの収集がスキップされる	147
2.2.43.使用済みのRDMディスクが認識されなくなる	148
2.2.44.ポリシーによるHyper-Vホストのシャットダウンが失敗する	148
2.3. 構成情報管理のトラブルシューティング	150
2.3.1.データベースに接続できない	150
2.3.2.管理サーバを起動した際に、構成情報の収集処理がWarningで終了する	150
2.3.3.SQL Serverのトランザクションログのサイズが大きくなる	151
2.3.4.Webコンソールの画面表示が遅くなり性能が劣化する	155
2.3.5.sqlcmdを実行するとアクセス権不足によるエラーが発生する	156
付録 A 改版履歴	161
付録 B ライセンス情報	163

はじめに

対象読者と目的

「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編」は、SigmaSystemCenter の管理者を対象に、SigmaSystemCenter の構築時、運用時に理解しておくべき製品の注意事項、およびトラブルシューティング情報について記載しています。「SigmaSystemCenter インストールガイド」、および「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」を補完する役割を持ちます。SigmaSystemCenter の構築時、運用時に必要な情報を参照してください。

本書の構成

セクション 1 注意事項、およびトラブルシューティング情報

- 1 「注意事項」: SigmaSystemCenter の注意事項を列挙します。
- 2 「トラブルシューティング」: SigmaSystemCenter のトラブルシューティングを記載します。

付録 A 「改版履歴」

付録 B 「ライセンス情報」

SigmaSystemCenter マニュアル体系

SigmaSystemCenter のマニュアルは、各製品、およびコンポーネントごとに以下のように構成されています。

また、本書内では、各マニュアルは「本書での呼び方」の名称で記載します。

製品 / コンポーネント名	マニュアル名	本書での呼び方
SigmaSystemCenter 3.5	SigmaSystemCenter 3.5 ファーストステップガイド	SigmaSystemCenter ファーストステップガイド
	SigmaSystemCenter 3.5 インストレーションガイド	SigmaSystemCenter インストレーションガイド
	SigmaSystemCenter 3.5 コンフィグレーションガイド	SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド
	SigmaSystemCenter 3.5 リファレンスガイド	SigmaSystemCenter リファレンスガイド
ESMPRO/ServerManager 6.14	ESMPRO/ServerManager Ver.6 インストレーションガイド	ESMPRO/ServerManager インストレーションガイド
WebSAM DeploymentManager 6.51	WebSAM DeploymentManager Ver6.5 ファーストステップガイド	DeploymentManager ファーストステップガイド
	WebSAM DeploymentManager Ver6.5 インストレーションガイド	DeploymentManager インストレーションガイド
	WebSAM DeploymentManager Ver6.5 オペレーションガイド	DeploymentManager オペレーションガイド
	WebSAM DeploymentManager Ver6.5 リファレンスガイド Webコンソール編	DeploymentManager リファレンスガイド Webコンソール編
	WebSAM DeploymentManager Ver6.5 リファレンスガイド ツール編	DeploymentManager リファレンスガイド ツール編
	WebSAM DeploymentManager Ver6.5 リファレンスガイド 注意事項、 トラブルシューティング編	DeploymentManager リファレンスガイド 注意事項、 トラブルシューティング編
SystemMonitor性能監視 5.8	SystemMonitor性能監視 5.8 ユーザーズガイド	SystemMonitor性能監視 ユーザーズガイド
	SigmaSystemCenter 3.5 仮想マシンサーバ (ESX) プロビジョニングソリューションガイド	SigmaSystemCenter 仮想マシンサーバプロビジョニング ソリューションガイド
	SigmaSystemCenter sscコマンドリファレンス	sscコマンドリファレンス
	SigmaSystemCenter クラスタ構築手順	SigmaSystemCenterクラスタ構築 手順
	SigmaSystemCenter ネットワークアダプタ 冗長化構築資料	SigmaSystemCenterネットワーク アダプタ冗長化構築資料
	SigmaSystemCenter ブートコンフィグ運用 ガイド	SigmaSystemCenterブートコンフィグ 運用ガイド

関連情報: SigmaSystemCenter のすべての最新のマニュアルは、以下の URL から入手できます。

<http://jpn.nec.com/websam/sigmasystemcenter/>

SigmaSystemCenter の製品概要、インストール、設定、運用、保守に関する情報は、以下の 4 つのマニュアルに含みます。各マニュアルの役割を以下に示します。

「SigmaSystemCenter ファーストステップガイド」

SigmaSystemCenter を使用するユーザを対象読者とし、製品概要、システム設計方法、動作環境などについて記載します。

「SigmaSystemCenter インストレーションガイド」

SigmaSystemCenter のインストール、アップグレードインストール、およびアンインストールを行うシステム管理者を対象読者とし、それぞれの方法について説明します。

「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」

インストール後の設定全般を行うシステム管理者と、その後の運用・保守を行うシステム管理者を対象読者とし、インストール後の設定から運用に関する操作手順を実際の流れに則して説明します。また、保守の操作についても説明します。

「SigmaSystemCenter リファレンスガイド」

SigmaSystemCenter の管理者を対象読者とし、「SigmaSystemCenter インストレーションガイド」、および「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」を補完する役割を持ちます。
SigmaSystemCenter リファレンスガイドは、以下の 4 冊で構成されています。

「SigmaSystemCenter リファレンスガイド データ編」

SigmaSystemCenter のメンテナンス関連情報などを記載します。

「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編」

SigmaSystemCenter の注意事項、およびトラブルシューティング情報などを記載します。

「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 概要編」

SigmaSystemCenter の機能説明などを記載します。

「SigmaSystemCenter リファレンスガイド Web コンソール編」

SigmaSystemCenter の操作画面一覧、および操作方法などを記載します。

本書の表記規則

本書では、注意すべき事項、重要な事項、および関連情報を以下のように表記します。

注: は、機能、操作、および設定に関する注意事項、警告事項、および補足事項です。

関連情報: は、参照先の情報の場所を表します。

また、本書では以下の表記法を使用します。

表記	使用方法	例
[] 角かっこ	画面に表示される項目 (テキストボックス、チェックボックス、タブなど) の前後	[マシン名] テキストボックスにマシン名を入力します。 [すべて] チェックボックス
「 」 かぎかっこ	画面名 (ダイアログボックス、ウィンドウなど)、他のマニュアル名の前後	「設定」ウィンドウ 「インストールガイド」
コマンドライン中の [] 角かっこ	かっこ内の値の指定が省略可能であることを示します。	add [/a] Gr1
モノスペースフォント (courier New)	コマンドライン、システムからの出力 (メッセージ、プロンプトなど)	以下のコマンドを実行してください。 replace Gr1
モノスペースフォント斜体 (courier New)	ユーザが有効な値に置き換えて入力する項目 値の中にスペースが含まれる場合は " " (二重引用符) で値を囲ってください。	add <i>GroupName</i> InstallPath=" <i>Install Path</i> "

セクションⅠ 注意事項、およびトラブルシューティング情報

このセクションでは、SigmaSystemCenter、および関連製品に関する注意事項、およびトラブルシューティングについて説明します。

- 1 注意事項
- 2 トラブルシューティング

1. 注意事項

本章では、注意事項を列挙します。

本章で説明する項目は以下の通りです。

• 1.1	ソフトウェア配布 / 更新機能	14
• 1.2	仮想環境管理機能	19
• 1.3	NetvisorPro を使用する際の注意事項	80
• 1.4	ESMPRO/ServerManager を使用する際の注意事項	87
• 1.5	ストレージ管理機能を利用する際の注意事項	89
• 1.6	iStorage を使用する際の注意・制限事項	90
• 1.7	NetApp ストレージを使用する際の注意事項	92
• 1.8	SMI-S を利用してストレージ装置を管理する際の注意・制限事項	96
• 1.9	EMC CLARiX (VNX) を使用する際の注意事項	99
• 1.10	ユーザ管理についての注意事項	100
• 1.11	マシン情報についての注意事項	101
• 1.12	Rescue VM についての注意事項	102
• 1.13	N+1 リカバリについて	103
• 1.14	システム構成のトポロジについての注意・制限事項	104
• 1.15	Windows のセキュリティ強化に伴う注意事項	106
• 1.16	InterSecVM/LB を使用する際の注意・制限事項	107

1.1. ソフトウェア配布 / 更新機能

1.1.1. ディスク複製 OS インストールを行う場合の環境構築の注意

Windows OS をインストールした環境でディスク複製 OS インストールを行う場合は、以下の点に注意してください。

- ◆ Windows 起動ドライブが C ドライブとなるように構築してください。
その他のドライブについても、ドライブの追加 / 変更を行った場合は、ディスク複製後にドライブ文字が変更となる可能性があります。
- ◆ ディスク複製を使用してマスタイメージを配布する場合、OS の再セットアップの際にドライブ文字の再割り当てが行われます。Microsoft 社の仕様により、ベーシックディスクでの運用を行っている場合はインストール時に認識される順で再割り当てが行われます。
詳細情報、およびその他の注意点については、「DeploymentManager オペレーションガイド」の「3.3.4 注意事項、その他」を参照してください。
- ◆ 管理対象マシンの OS が Windows Vista 以降、Windows Server 2008 以降の場合、DPM クライアントのインストール時に使用されているネットワークの状況により、Windows ファイアウォールのパブリックプロファイル、プライベートプロファイル、ドメインプロファイルのいずれかのプロファイルのポート / プログラムが開放されます。
管理対象マシンがドメインに参加する場合、プロファイルはドメインプロファイルに変更されます。インストール時のプロファイルがドメインプロファイルでない場合、DeploymentManager が使用するポート / プログラムがブロックされ通信できなくなります。
ドメインに参加する管理対象マシンやディスク複製 OS インストールでマスタとするマシンには、あらかじめ DeploymentManager が使用するポート / プログラムをドメインプロファイルで開放しておいてください。
以下の手順により管理対象マシンのドメインプロファイルのポート / プログラムを開放することができます。

<ドメインのポリシーで設定する方法>

Windows Vista 以降、Windows Server 2008 以降のドメインコントローラのドメインポリシーで設定してください。

<管理対象マシンのローカルで設定する方法>

1. 管理対象マシンの [管理ツール] - [セキュリティが強化された Windows ファイアウォール] から「セキュリティが強化された Windows ファイアウォール」画面を起動します。
2. 左ペインの [受信の規則] をクリックします。
3. [受信の規則] のリストで以下を選択して、右クリックで [プロパティ] を選択します。「プロパティ」画面の [詳細設定] タブを選択します。プロファイルの [ドメイン] チェックボックスをオンに設定し、[OK] をクリックします。

SigmaSystemCenter 3.5 リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編

- 共通
DeploymentManager (DepAgent.exe)
DeploymentManager (rupdsvc.exe)
- Windows Vista、Windows 7 の場合
ネットワーク - エコー要求 (ICMPv4 受信)
- Windows Server 2008 以降、Windows 8 以降の場合
ファイルとプリンターの共有 (エコー要求 - ICMPv4 受信)

1.1.2. DPM サーバの設置

DeploymentManagerで管理する予定のネットワーク内に、DPM サーバを導入したマシンが複数存在しないことを確認してください。

1.1.3. シナリオの作成

DeploymentManager のリストア、パッケージのインストールを指定したシナリオを作成する際は、必ず [バックアップ/リストア] タブ、[パッケージ] タブの [配布条件設定] グループボックスの [ユニキャストでデータを送信する] を選択してください。

1.1.4. シナリオの配布

再起動前の管理対象マシンには、以下の設定をしたシナリオを合計 100 個まで実行することができます。

- ◆ 「シナリオ追加」ウィンドウの [パッケージ] タブの [実行タイミング設定] グループボックスで [次回起動時にパッケージを実行] を設定

101 個以上のシナリオを実行する場合は、管理対象マシンを再起動してください。再起動することにより新たに 100 個のシナリオを実行することができます。

1.1.5. ディスクイメージの作成

オペレーティングシステムを含んだディスクイメージは、必ず、以下のような形式で作成してください。

以下の形式で作成されていない場合、マシンをグループで稼働する構成変更が正常に動作しません。

- ◆ ESMPRO/ServerAgentService、または ESMPRO/ServerAgent をインストールする

- ◆ ESMPRO/ServerAgentService、または ESMPRO/ServerAgent の通報設定を行う

通報設定の詳細については、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「3.9. 管理対象マシンから障害イベントを送信するための設定を行う」を参照してください。

1.1.6. DeploymentManager の詳細設定について

DPM サーバの詳細設定で、[シナリオの完了を DPM クライアントからの通信で判断する] チェックボックスを必ずオンにしてください (このオプションは、既定値でチェックが入っています。既定値のまま設定を変更しないでください)。このオプションをオフにすると、SystemProvisioning と DeploymentManager は正しく連携できません。

[DPM クライアントを自動アップグレードする] チェックボックスを必ずオフにしてください。(このオプションは、既定値でチェックはオフになっています。既定値のまま設定は変更しないでください。) このオプションをオンにすると、SystemProvisioning と DeploymentManager は正しく連携できません。

DPM サーバのインストール時、もしくは、DeploymentManager の Web コンソールから設定できます。

DPM サーバの詳細設定 ([シナリオの完了を DPM クライアントからの通信で判断する]、および [DPM クライアントを自動アップグレードする]) の確認方法は、以下の通りです。

1. DeploymentManager の Web コンソールを起動します。
2. タイトルバーの [管理] をクリックし、[管理] ビューに切り替えます。
3. [管理] ツリーから [DPM サーバ] をクリックします。
4. メインウィンドウに DPM サーバの基本情報が表示されます。
5. [設定] メニューから [詳細設定] をクリックします。
6. 「詳細設定」ウィンドウが表示されます。
7. [全般] タブを選択して、[サーバ設定] グループボックスの [シナリオの完了を DPM クライアントからの通信で判断する]、および [DPM クライアントを自動アップグレードする] の設定を確認します。

1.1.7. SystemProvisioning でリストアシナリオを実行する場合について

ネットワークで接続している他のマシンのイメージファイルパスをリストアシナリオのイメージファイル名に指定している場合、「DeploymentManager リファレンスガイド Web コンソール編」の「3.13.4 「バックアップ/リストア」タブ」の注釈説明 (※2) に記載されている操作を行ってください。

SystemProvisioning で Backup イメージを指定してリストアを行う場合、Backup イメージのイメージ種別が [ディスク複製 OS インストールイメージ] を選択する場合、リストアのシナリオのイメージ種別が [ディスク複製 OS インストールイメージ] のシナリオを使用してください。

SystemProvisioning で Backup イメージを指定してリストアシナリオを実行する場合、DPM サーバに Backup イメージが存在していない状況ではシナリオに設定されているイメージでリストアされます。Backup イメージを指定する場合は、事前に収集にて Backup イメージの情報を更新してください。詳細については、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「4.9.5 Backup イメージを確認するには」を参照してください。

1.1.8. SystemProvisioning により実行したシナリオの中断操作について

SystemProvisioning の Job によりソフトウェア配布（シナリオ）を実行すると、DeploymentManager の Web コンソール上では自動的にシナリオが割り当たった状態となります。

この場合、DeploymentManager の Web コンソール上では、以下の「◆シナリオ実行中断操作について」に記載のシナリオ操作以外（シナリオ割り当て解除など）は、行わないでください。SystemProvisioning でシナリオの完了を誤検知するなどの現象が発生する場合があります。

◆ シナリオ実行中断操作について

SystemProvisioning の Job により実行したソフトウェア配布（シナリオ）を中断する場合は、Job のキャンセルを行ってください。

SystemProvisioning の Job のキャンセルによりシナリオを中断した場合、DeploymentManager の Web コンソール上の管理対象マシンの状態がシナリオ実行中断となる場合やシナリオ割り当てが解除されていない場合があります。

このとき、同じマシンに対して、新たに SystemProvisioning の Job を実行すると処理が失敗する場合があります。

その場合は、DeploymentManager の Web コンソール上から中断解除、およびシナリオ割り当て解除を行ってください。

SystemProvisioning の Job により実行したシナリオを DeploymentManager の Web コンソールからシナリオ実行中断した場合、DeploymentManager の Web コンソール上では正常終了となり、該当の Job も正常終了となります。

DeploymentManager の Web コンソール上で中断解除まで行った場合は、SystemProvisioning の Job はタイムアウトするまで完了しません（既定値: 6 時間）。

その場合は、SystemProvisioning 上でも Job のキャンセルが必要になります。

1.1.9. DeploymentManager 以外のサブシステム削除後のマシン名について

DeploymentManager 以外のサブシステムを削除して、管理対象マシン（物理マシン）が DeploymentManager のサブシステムのみにより管理されている状態にし、SystemProvisioning の再起動や収集を行った場合、マシン名は、DeploymentManager のマシン名で更新されます。

1.1.10. Web コンソールから DeploymentManager を利用する場合の注意点

LAN ケーブルが抜けている、DeploymentManager のサービスが停止しているなど、何らかの原因で SystemProvisioning が DeploymentManager と通信できない場合、DeploymentManager との通信が必要な処理 (DeploymentManager 情報の設定、シナリオ情報取得など) で最大 2 分間待たされ失敗する場合があります。この場合、内部で DeploymentManager に対する通信のリトライ処理を行っているため、リトライの途中で通信状態が回復すれば処理は継続されます。

1.1.11. イメージ展開で使用するリストアシナリオについて

以下の設定を行ったシナリオをイメージ展開で使した場合、固有情報の設定が正しく行われません。イメージ展開では、使用しないでください。なお、固有情報を削除せずに取得したバックアップイメージを展開する場合は該当しません。

- ◆ イメージファイルに付加情報を設定
DeploymentManager のシナリオ作成にて、[バックアップ/リストア] タブのイメージファイルの設定において、以下のいずれかのチェックボックスをオンにする。
 - マシン名
 - MAC アドレス
 - UUID

1.1.12. マスタマシンセットアップシナリオの利用範囲

マスタマシンセットアップシナリオは、Differential Clone、Disk Clone のイメージ作成時に自動的に配布されるものです。マスタマシンセットアップシナリオは、以下の 3 つの Built-in シナリオを指します。

- ◆ System_WindowsMasterSetup
- ◆ System_WindowsMasterSetupVM
- ◆ System_LinuxMasterSetup

1.1.13. ssc deploy software による Built-in シナリオの配布について

DeploymentManager の Built-in シナリオのうち、以下のパスワード変更のシナリオについては、ssc deploy software によるシナリオ配布時にパスワードに記号 (^ * > () _ + & | = ` ; , 半角スペース) の入力できません。

- ◆ System_WindowsChgPassword
- ◆ System_LinuxChgPassword

1.2. 仮想環境管理機能

仮想環境管理機能を利用する場合、以下の点に注意してください。

なお、VMware、Xen、Hyper-V、KVM 製品の詳細については、VMware 社、Citrix 社、Microsoft 社、または Red Hat 社の各製品マニュアルを参照してください。

注: Windows OS は、ご使用の環境が x64 OS と x86 OS でレジストリのパスが異なります。レジストリは x64 OS の表記ですので、適宜読み替えてください。

- x64 OS : HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node
- x86 OS : HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE

1.2.1. システム構成について

関連情報:

- ・ 動作環境については、「SigmaSystemCenter ファーストステップガイド」の「3.4. 管理対象仮想マシン基盤」を参照してください。
- ・ システム構成については、「SigmaSystemCenter ファーストステップガイド」の「2.1.5 システム構成例と注意事項」を参照してください。

仮想環境全般

- ◆ 新規に仮想マシンを作成する場合、Windows 系の OS では、固定 IP アドレスを設定する前に、IP アドレスの自動的な取得を試みます。DHCP サーバからの IP アドレス取得ができない場合、IP アドレスの設定処理に、更に数十秒から数分程度の時間がかかります。
- ◆ 仮想マシンをドメインに参加させる場合は、DNS 設定が必要です。既にドメイン参加している仮想マシンに対してリソース割り当てを実行してドメイン参加をさせる場合は、一度仮想マシンをドメインから抜けた状態にしてから実行してください。上記を行わずに実行した場合は、仮想マシンが正常に動作しなくなる可能性があります。
- ◆ 管理対象マシンの OS が Windows Vista 以降、Windows Server 2008 以降の場合、DPM クライアントのインストール時に使用されているネットワークの状況により、Windows ファイアウォールのパブリックプロファイル、プライベートプロファイル、ドメインプロファイルのいずれかのプロファイルのポート / プログラムが開放されます。
管理対象マシンがドメインに参加する場合、プロファイルはドメインプロファイルに変更されます。インストール時のプロファイルがドメインプロファイルでない場合、DeploymentManager が使用するポート / プログラムがブロックされて通信できなくなります。
また、テンプレートを元に仮想マシンを作成する場合にドメインに参加させる場合は、テンプレートの作成元になるマスタ VM に、あらかじめ DeploymentManager が使用するポート / プログラムをドメインプロファイルで開放しておいてください。開放していない場

合は、ファイアウォールが閉じられた状態で仮想マシンが作成され、ソフトウェア配布が失敗します。

以下の手順により管理対象マシンのドメインプロファイルのポート / プログラムを開放することができます。

<ドメインのポリシーで設定する方法>

Windows Vista 以降、Windows Server 2008 以降のドメインコントローラのドメインポリシーで設定してください。

<管理対象マシンのローカルで設定する方法>

1. 管理対象マシンの [管理ツール] - [セキュリティが強化された Windows ファイアウォール] から「セキュリティが強化された Windows ファイアウォール」画面を起動します。
2. 左ペインの [受信の規則] をクリックします。
3. [受信の規則] のリストで以下を選択して、右クリックで [プロパティ] を選択します。「プロパティ」画面の [詳細設定] タブを選択します。プロファイルの [ドメイン] チェックボックスをオンに設定し、[OK] をクリックします。

- 共通

DeploymentManager (DepAgent.exe)

DeploymentManager (rupdsvc.exe)

- Windows Vista、Windows 7 の場合

ネットワーク-エコー要求 (ICMPv4 受信)

- Windows Server 2008 以降、Windows 8 以降の場合

ファイルとプリンターの共有 (エコー要求-ICMPv4 受信)

VMware の場合

- ◆ vCenter Server は TCP / IP の既定のポート "80" と "443" を使用します。
vCenter Server のインストールにあたり、ご利用の環境によってはポートの競合が発生する場合がありますので、競合しないようにポートの既定値を変更する必要があります。
- SigmaSystemCenter 管理サーバ、または DPM サーバと共存する場合
IIS (インターネットインフォメーションサービス) が利用するポート ("80") ポートと競合する可能性があります。
vCenter Server の http ポートを "80" → "20080" などに変更してください。

◆ DataCenter の設定について

vCenter Server には、DataCenter を少なくとも 1 つは作成してください。

◆ フォルダの使用について

vCenter Server のフォルダを SystemProvisioning では使用しないでください。

◆ VMware HA の使用について

VMware HA 機能が有効な場合は、vCenter Server 側が障害検知を行い、仮想マシンの電源制御や VM 移動が行われます。そのため、vCenter Server の操作と SigmaSystemCenter の操作が同時に行われた場合は、一方が失敗する可能性があります。VMware HA と SigmaSystemCenter でポリシーによる仮想マシンの復旧アクションを同時に有効にしないでください。

VMware HA による VM 移動は、SigmaSystemCenter による仮想マシンの配置制約に関係なく行なわれます。

VMware HA のアドミSSIONコントロールを有効にする場合は、仮想マシンが正常に稼働できるリソースを確保してください。リソースが不足している場合は、仮想マシンの操作ができません。また、フェイルオーバーホストを使用している場合に SigmaSystemCenter の最適起動を有効にするか、事前に仮想マシンを別の ESXi に移動して仮想マシンを起動する必要があります。

VMware HA が有効な仮想マシンサーバがシャットダウンの状態で、vCenter Server のサービスを再起動すると、仮想マシンサーバが接続状態と認識する場合があります。

しばらく時間をおいてから仮想マシンサーバを操作してください。

◆ VMware FT の使用について

VMware FT 機能が有効な場合は、仮想マシンにセカンダリ仮想マシンが作成されます。セカンダリ仮想マシンは、UUID や MAC アドレス、仮想ディスクを持っていない仮想マシンとして扱われます。また、仮想マシン名は、"仮想マシン(Secondary)" となり、VM 移動以外の操作はできません。

仮想マシンとセカンダリ仮想マシンは、同じ仮想マシンサーバで起動できません。どちらかの仮想マシンを移動後に起動するか、最適起動を有効にしてください。

また、VMware FT が有効な仮想マシンは、配置制約やポリシーのフェイルオーバー、省電力、ロードバランスはサポートしていません。

SigmaSystemCenter からは、仮想マシンに対して VMware FT 機能の有効 / 無効を制御しません。そのため、障害発生などで機能が無効になった場合は、vCenter Server から有効に変更してください。

また、セカンダリ仮想マシンのイベントは SigmaSystemCenter のイベント履歴、管理サーバ OS のイベントログに通知されません。

◆ VMware DRS の使用について

VMware DRS 機能を利用する場合、SigmaSystemCenter の VM 最適配置機能が動作しないように設定してください。

VMware DRS 機能が有効な場合は、vCenter Server 側で負荷を監視し、ロードバランスが行われます。

VMware DRS による VM 移動は、SigmaSystemCenter による仮想マシンの配置制約に関係なく行われます。

また、同様の機能を提供する VM 最適配置機能の負荷分散、省電力機能と同時に有効にすると正常に動作しない可能性があります。

SigmaSystemCenter では、VMware DPM 機能を利用した ESXi、および仮想マシンの起動処理を行うことができません。VMware DPM 機能とアドミッションコントロールを併用するとき、アドミッションコントロールの設定によって仮想マシンのためのリソースを確保するため、ESXi を起動する必要がある場合に SigmaSystemCenter から仮想マシンを起動すると失敗します。

Xen の場合

- ◆ SystemProvisioning は、XenServer Pool Master と直接接続します。XenCenter とは接続しません。
- ◆ XenServer Pool Master は TCP / IP の既定のポート "80" と "443" を使用します。
- ◆ SystemProvisioning は、Xen HA との共存はサポートしていません。
- ◆ 仮想ネットワークの設定について
仮想ネットワークにおける VLAN は、SystemProvisioning から作成や変更ができません。

Hyper-V の場合

- ◆ iSCSI 接続の共有ストレージで構成された Hyper-V クラスタ環境は、サポート対象外です。
- ◆ Hyper-V クラスタ環境で、共有ストレージを用いて CSV を構築する場合、各ホストでストレージの属性 (LUN や Bus 番号など) を揃える必要があります。揃えていない場合、ストレージトポロジを正確に表示できない場合があります。
- ◆ Windows Server 2008 R2 SP なしのクラスタ環境では、各ノードに KB974930、KB2563210、KB2580360 を適用してください。
- ◆ Windows Server 2008 R2 SP1 のクラスタ環境では、各ノードに KB2563210、KB2580360 を適用してください。
- ◆ 1 つの LUN を複数のパーティションで区切って、ドライブレターを与える場合、ストレージトポロジ関係の機能は使用できません。
- ◆ Windows Server 2012 で、ファイルサーバを使用して仮想マシンを構成する場合、Hyper-V の役割を持つサーバをファイルサーバとして使用しないでください。

KVM の場合

- ◆ KVM の仮想マシンサーバとして移動する Red Hat Enterprise Linux の異なるバージョンが混在する環境は、サポートしていません。

1.2.2. 仮想環境構築について (関連製品の設定)

仮想環境全般

- ◆ DataCenter の名称について
DataCenter の名称は、システムで一意となるよう設定してください。DataCenter 名にスペースは使用しないでください。
DataCenter 名の変更を行った場合、必ず [収集] を行ってください。
- ◆ 仮想マシンの名称について
仮想マシンの名称は、システムで一意となるよう設定してください。
仮想マシン名は、80 文字以下の英数字、および "-"、"_" が使用可能です。
また、仮想マシン名にスペース、および 2 バイト文字は使用しないでください。
- ◆ 仮想マシンサーバの名称について
仮想マシンサーバの名称は、システムで一意となるよう設定してください。
- ◆ データストアとフォルダ名について
データストアとデータストア上のフォルダ名には、以下の文字を使用しないでください。
"、および '
使用している場合は、データストア詳細画面が正常に機能しません。
- ◆ 非共有データストアの名前について
非共有データストアの名前は、仮想マネージャに対して一意になるように設定してください。同じ名前の非共有データストアがある場合は、"新規リソース割り当て"、"テンプレート作成" が正常に動作しない場合があります。また、データストアのサイズや使用量も正しく表示されない場合があります。

VMware の場合

- ◆ vCenter Server に登録する仮想マシンサーバ名について
仮想マシンサーバを vCenter Server に登録する場合、登録名にはその仮想マシンサーバのホスト名または、IP アドレスを使用してください。
ホスト名を使用する場合、ホスト名が名前解決されるように設定してください。名前解決できない場合、SystemProvisioning による該当仮想マシンサーバのグループへの追加、グループからの削除、および電源操作処理などが使用できないことがあります。
また、スクリプトインストールを実行する DeploymentManager のリストアシナリオを用いて物理マシンにリソース割り当てを実行すると、自動で ESX が vCenter Server にホストとして追加されます。その際、既定ではホスト名で登録されます。ホスト名での登録

には、ホスト名が名前解決されている必要があります。また、グループプロパティ設定の OS 設定、もしくはホスト設定にパスワードを設定する必要があります。

IP アドレスで登録するよう設定を変更する場合には、以下のレジストリを作成し、値を設定してください。

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥

Provider¥VM¥VMware

値名 (型): EnableIPSetting(REG_DWORD)

デフォルト値: 1 ※

※値が 0、または存在しない場合、ホスト名で登録されます。0 以外の場合は、IP アドレスで登録されます。

◆ vCenter Server のアラームの設定について

SigmaSystemCenter では、vCenter Server に既定で登録されているアラームを監視しているため、それらのアラームを削除したり、アラーム名を変更したりしないでください。

◆ 物理 NIC の搭載について

ESX の管理用 NIC と、仮想マシンが物理的なネットワークへ接続するための仮想マシン接続用 NIC を、少なくとも各 1 枚は搭載してください。必要に応じて仮想マシン接続用 NIC は追加可能ですが、その場合、ネットワーク名 (仮想スイッチ名) は、同一 ESX 内で重複しないように設定してください。また、分散仮想スイッチを使用する場合は、VMware ESX の管理 NIC を分散仮想スイッチに接続しないでください。VMware ESX と通信するための管理 NIC は標準仮想スイッチに接続してください。

◆ 分散仮想スイッチ名について

分散仮想スイッチ名は、システムで一意になるように設定することを推奨します。

◆ 仮想ポートグループ名について

仮想ポートグループ名には、2 バイト文字を使用しないでください。

分散スイッチ上の仮想ポートグループ名は、vCenter Server で一意になるように設定してください。また、システムで一意になるように設定することを推奨します。

◆ サービスコンソールについて

ESX を制御するためのサービスコンソールは、標準仮想スイッチに作成してください。

◆ ESX の vCenter Server への登録について

同じ ESX を、複数の vCenter Server へ登録しないでください。

◆ マスタ VM の構築について

• OS インストールについて

OS は必ず 1 台目の仮想ディスク (IDE0:0 / SCSI0:0 / SATA0:0) にインストールしてください。

• NIC の数について

テンプレートの元となるマスタ VM の仮想 NIC の数は、新規に作成する仮想マシンで使用する NIC の枚数以上を追加してください。仮想 NIC は最大 10 枚まで指定できます。

仮想 NIC の追加方法については VMware 社の製品マニュアルを参照してください。

• 管理者パスワードについて

VMware の場合、Windows server 2003 はテンプレート作成の前にマスタ VM の管理者パスワードをクリアしてください。

クリアしていない場合、仮想マシン作成後に設定されるパスワードが、指定したパスワードに設定されず、マスタ VM で設定されているパスワードと同じ設定になります。

• SCSI コントローラについて

vCenter Server 4.0 Update1 以前、で Differential Clone タイプの仮想マシンを作成する場合は、マスタ VM の SCSI コントローラに LSI Logic SAS は利用できません。

• ディスクについて

マスタ VM のディスクは、システムディスク 1 つにしてください。仮想マシンを作成する際に、拡張ディスク (データディスク) も同時に作成し、システムディスク + 拡張ディスクの運用とする場合は、テンプレート (コピー元のマスタ VM) には、拡張ディスクは付けず、システムディスク 1 つだけの構成にしてください。

◆ データストア名の変更について

データストア名を変更した場合、vCenter Server サービス、または ESXi を再起動してください。

◆ vCenter Server のエスケープ文字について

vCenter Server で仮想マシン名などに利用された "%"、"¥"、"/" の文字を SigmaSystemCenter に取り込むと、"%25"、"%5c"、"%2f" にエスケープされます。

◆ VM コンソールについて

• MouseKeyboardScreen プラグインのバージョンは、2.1.0.0 のみサポートしています。

• Firefox3 は対象外です。

- コンソールの状態変更（接続状態変更、解像度変更など）は監視しません。
- MouseKeyboardScreen プラグインは自動でインストールできません。手動でインストールしてください。
- VM コンソールは、仮想マシンの電源操作、移動を行うと切断されます。
- VM コンソールの全画面表示から元に戻す場合は、CTRL+ALT、もしくは Esc を押してください。それ以外の方法で全画面表示から戻った場合、管理サーバの画面の解像度が変更される場合があります。
- vSphere6.0 以降の VM コンソールで全画面表示ができない場合や解像度が合っていない場合は、vSphere Web Client を使用して仮想マシンのビデオカードの設定を [設定の自動検出] に設定してください。

◆ vCenter Server Client 管理画面における操作について

通常運用時は基本的に vCenter Server Client 管理画面から仮想マシンサーバや仮想マシンなどの操作を行わないようにしてください。

◆ データストアの構成について

複数の vCenter Server を構成している場合に、vCenter Server にまたがって同じ LUN を共有してデータストアとして構成しないでください。

◆ vApp について

SigmaSystemCenter は、VMware の vApp に対応していません。SigmaSystemCenter から vApp が属する vCenter Server に対して [収集] を実行すると、vApp 配下の仮想マシンは [仮想] ビューのツリー上に登録されますが、vApp 自体は登録されません。この場合、vApp 配下の仮想マシンは ESXi ホスト直下に登録されます。また、登録された vApp の仮想マシンに対して、電源制御を行うことは可能ですが、移動 (Failover、Migration など) を行うことはできず、実行した場合はエラーとなります。ポリシーによる移動操作も同様にエラーとなります。

Xen の場合

◆ 物理 NIC の搭載について

XenServer の場合は、管理用 NIC、仮想マシン接続用 NIC の区別はありませんので、最低 1 枚から搭載してください。

◆ 仮想ネットワーク名について

仮想ネットワーク名には、2 バイト文字を使用しないでください。

また、XenServer が持つデフォルトネットワークの名前は変更しないでください。もし、仮想マシンサーバ追加時にデフォルトネットワーク名が一致しない場合、不正なネットワークが作成される可能性があります。

◆ 仮想ネットワークについて

仮想ネットワークを作成する場合は、XenServer Pool Master に作成してください。

また、追加する XenServer には、新規に仮想ネットワークを作成しないでください。追加した際に XenServer Pool Master の状態が不正になる場合があります。

◆ マスタ VM の構築について

- OS インストールについて

OS は必ず 1 台目の仮想ディスク (デバイスポジションが "0") にインストールしてください。

◆ マスタ VM の管理者パスワードについて

Disk Clone 用のテンプレートから仮想マシンを作成する場合は、VMware の場合と同様にマスタ VM の管理者パスワードをクリアして下さい。

また、Full Clone 用のテンプレートから "VM 作成 (テンプレート)" を用いて、仮想マシンを複製する場合は、パスワードの有無にかかわらず、マスタ VM と同じ状態に設定されます。

◆ 仮想マシンの作成について

Sysprep の自動実行機能の利用、および Differential Clone 用のテンプレートから仮想マシンを作成する場合は、XenServer 5.5 以上が必要です。

◆ 仮想マシンサーバの IP アドレスの変更について

XenServer をプールに接続後、IP アドレスを変更すると、プールから認識なくなる場合があります。仮想マシンサーバの IP アドレスを変更する場合は、Citrix 社製品のマニュアルを参照してください。

◆ XenCenter における操作について

通常運用時は基本的に XenCenter から仮想マシンサーバや仮想マシンなどの操作を行わないようにしてください。

Hyper-V の場合

◆ ノードの名前解決について

Hyper-V クラスタ環境の場合、管理サーバから、各ノードの名前解決ができるように設定してください。

◆ DNS の逆引き設定について

IP アドレスを用いてマシンを登録する場合、DNS の逆引きができるように設定してください。設定を行わないと Hyper-V への接続や処理に時間がかかるようになります。

◆ 仮想ネットワーク名について

仮想ネットワーク名は、仮想マシンサーバ内では、重複しないようにしてください。

◆ マスタ VM の構築について

- Windows Server 2012 R2 の Generation 2 の仮想マシンに対しては、OS をインストールしている仮想ディスクの接続位置は SCSI コントローラですが、接続位置には特に制限はありません。これ以外の仮想マシンに対して、OS は必ず IDE0 – 0 に接続されている仮想ディスクにインストールしてください。
- Windows Vista より以前の OS では、管理者パスワードをクリアしてください。

◆ MAC アドレスの範囲について

MAC アドレスプール機能を有効にしないで、仮想マシンを大量に作成する場合、Hyper-V 側の MAC アドレスの範囲を他の Hyper-V と重複しないように拡大を行ってください。そのときは、最初の 3 バイト (00-15-5d) は変更をしないようにしてください。既定では 256 個用意されています。範囲の変更は、Windows Server 2008 R2 以降で、仮想ネットワークマネージャを用いて設定ができます。

◆ Windows Server 2012 の Live Migration について

Windows Server 2012 で、クラスタに依存しないライブマイグレーションを SigmaSystemCenter から行う場合、ライブマイグレーションの送受信を有効にして、認証プロトコルに Kerberos を使用するように構成してください。また、制約つき委任の設定も必要になります。

◆ Windows Server 2012 のファイルサーバについて

Windows Server 2012 で、ファイルサーバを使用する場合、そのファイルサーバは、アクティブディレクトリに参加していて、適切な権限設定がされている必要があります。

また、SigmaSystemCenter からファイルサーバのファイル共有を参照・操作する場合、SigmaSystemCenter の管理サーバもアクティブディレクトリに参加する必要があります。そして、ファイル共有に対して、SigmaSystemCenter の管理サーバのマシンアカウントがフルコントロールの権限を持つ必要があります。

KVM の場合

◆ 仮想マシンサーバの名前解決について

VM 移動を実行する場合は、仮想マシンサーバが相互に名前解決できるように設定してください。

◆ データストア名について

共有するデータストア (KVM のストレージプール) は、各ホストで同じ名前をつけてください。共有しないデータストアは、複数ホストで名前が重複しないようにつけてください。ただし、ストレージプールの種別がファイルシステムディレクトリの場合のみ、複数ホスト間で名前が同じでも、異なるデータストアとして認識されます。

◆ ネットワーク名について

KVM のインターフェース、ネットワーク、ポートグループは、SystemProvisioning ではすべてポートグループとして表示されます。区別できるように仮想マシンサーバ内では、重複しないように命名してください。また、VM 移動を実行する場合は、仮想マシンが接続しているネットワークが移動先仮想マシンサーバに同じ名前で作成されている必要があります。

1.2.3. 仮想環境構築について (関連製品の SigmaSystemCenter への登録・設定)

仮想環境全般

◆ DeploymentManager へ仮想マシンを登録する場合の SystemProvisioning のグループ情報設定

カテゴリ、グループ、モデルのいずれかで DPM サーバの設定を行うと、新規リソース割り当てやマスタマシン登録を実行時に、自動で DPM サーバに仮想マシンが登録されます。上記設定を行い、DPM サーバへ仮想マシンの登録を行う場合、SystemProvisioning のグループで設定する情報については、以下の点に注意してください。

- DPM サーバへの仮想マシン登録時、仮想マシンは所属している SystemProvisioning の運用グループと同じ階層のグループに登録されます。DPM サーバにそのグループが存在しない場合は、新たに作成されます。そのため、DPM サーバの制限を越えた場合、登録に失敗します。下記の設定に注意してください。
 - グループ名は、64 バイト以内で設定してください。
 - グループの階層数は、20 以内で設定してください。
 - グループの数は、1000 以内で設定してください。それ以上作成する場合は、DeploymentManager をインストールしたサーバに下記レジストリを追加し、上限値を設定してください。

キー名: HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\NEC\DeploymentManager
 値の名前 : GroupValue
 データタイプ : DWORD

- 仮想マシンが使用する 1 枚目の NIC を、DeploymentManager と接続する NIC としてネットワーク環境を構築する必要があります。

SystemProvisioning のグループにおける仮想マシン設定のネットワーク設定においても、必ず仮想マシンの 1 枚目の NIC は DeploymentManager の管理用ネットワークと通信可能となるよう設定してください。

- 仮想マシンの新規作成時には、Network Boot が行われられないため、PXE Boot を利用することができません。仮想マシンの新規作成時は、仮想マシンの BIOS と UEFI ブートメニューのいずれかでブートオーダーを変更する必要があるため、再起動処理が必要なソフトウェア配布を正常に実行できません。
- 仮想マシンを新規で作成する場合、仮想マシン名は「DeploymentManager リファレンスガイド Web コンソール編」の「3.5.5 管理対象マシンの登録」のマシン名の入力できる文字を使用してください。

◆ 仮想マシンの新規作成時の情報設定について

Web コンソールで仮想マシンの新規作成を行う際に、仮想マシン用グループで設定する情報については、以下の点に注意してください。

- Full Clone 用のテンプレート、または VMware 環境 (スタンドアロン ESXi は除く) Differential Clone 用のテンプレート、VMware 環境 (スタンドアロン ESXi は除く) Disk Clone 用のテンプレートを使用した場合は、1 枚の仮想 NIC に対して設定できる IP アドレスは、1 つのみです。
- ドメインへの参加を指定する場合、作成された仮想マシンが、ドメインへの接続が可能なネットワーク環境にある必要があります。
- WINS の設定を行う際は、Primary WINS と Secondary WINS の両方を指定する必要があります。Primary WINS のみを設定した場合は、設定が反映されません。(VMware のみ)
- vSphere 5.0 以前の環境の場合で、OS に Linux がインストールされている仮想マシンを作成する場合、“root” のパスワードを変更することはできません。Linux 設定画面で入力が可能です。設定は反映されません。
また、仮想マシン作成時には、Linux 設定のドメインサフィックスは必ず設定してください。
- VMware の場合、仮想マシン用グループで設定する情報の以下の項目では、全角文字、カナ文字を使用できません。全角文字、カナ文字を使用した設定を行った場合、仮想マシンが正常に作成されません。
[アカウントのアカウント名]、[アカウントのパスワード]、[ワークグループ名]、[ドメイン名]、[ドメイン参加のアカウント名]、[ドメイン参加のパスワード]

Xen の場合、Full Clone 用のテンプレートからの仮想マシン作成は、設定内容は自動で反映されません。仮想マシン作成完了後、手動で設定を行ってください。

◆ 仮想マシン新規作成後の IP アドレスの指定について

Web コンソールでテンプレートから新規作成を行った仮想マシンの IP アドレスが、設定した以外の IP アドレス (DHCP など) に設定されている場合、同じネットワーク上で設定した IP アドレスの競合がないかを確認してください。ネットワーク上で一意でない IP アドレスを設定した場合は、IP アドレスの設定が正しく行われません。

◆ 仮想マシンサーバの仮想ネットワーク設定について

各仮想マシンサーバの仮想ネットワークの設定は、仮想マシンサーバ間ですべて同じ設定を行ってください。

対象の仮想マシンが存在している仮想マシンサーバに、仮想ネットワーク情報と同名の仮想ネットワークがない場合、仮想マシンが起動できないことがあります。

◆ 仮想マシンサーバのサブシステムの編集について

仮想マシンサーバのサブシステム編集時に、仮想マシンサーバに実際に設定されているユーザ名、パスワードを指定しないと、編集に失敗します。編集する仮想マシンサーバに正しいユーザ名、パスワードを指定してください。

VMware の場合

- ◆ vCenter Server をサブシステムとして登録、およびサブシステムから削除する場合は、仮想マシンの作成や、テンプレート作成などが行われていないことを確認した上で行ってください。

仮想マシンの作成処理中や、テンプレート作成中などにサブシステム登録 / 削除を行った場合、情報の構築が正しく行われません。

ESXi を仮想マネージャとして登録・削除する場合も、上記に注意してください。

- ◆ IP アドレスとホスト名の両方でサブシステムに登録しないでください。

- ◆ ローカルコンピュータとドメインに同じアカウント名がある場合、vCenter Server をサブシステムに登録するとき、ローカルアカウント指定、ドメインパスワード指定をすると、ドメインアカウントが使用されます。

- ◆ ESXi プロビジョニングについて

ESXi プロビジョニング後に CD ドライブのトレイが開く場合があります。

- ◆ ESXi の登録について

ESXi では、インストール直後のホスト名の設定が、"localhost.localdomain" になっています。ESXi のホスト名は SystemProvisioning で一意になるように変更してください。

- ◆ モデルプロパティ設定のネットワークについて

ESX の 3.5 以降のバージョンでは、モデルプロパティ設定の [ネットワーク] タブで設定する仮想ネットワーク接続は、必ず画面から選択できるネットワークを設定してください。

- ◆ VMware ESXi の表示名について

VMware ESXi を SystemProvisioning に IP アドレスで登録しても、ESXi に設定されているホスト名が表示されます。

vCenter Server に追加した場合は、vCenter Server に追加した名前が表示されます。

- ◆ Windows のグループプロパティのホストプロファイル

Windows のグループプロパティのホストプロファイルで管理者パスワードを指定してください。正しく指定していない場合、仮想マシン作成に失敗します。

また、グループ設定で入力したパスワード設定は、Administrator アカウントに対して設定されます。個別に作成した管理者権限を持つユーザアカウントに対しては、設定されません。

- ◆ Red Hat Enterprise Linux 6 のカスタマイズについて
Red Hat Enterprise Linux 6 の仮想マシンを作成する場合に DHCP 設定で作成すると、ドメインサフィックスが反映されません。

- ◆ Sysprep 応答ファイルについて
 - Windows Vista 以降の Sysprep 応答ファイルのサンプルを使用して固有情報反映を行う場合は、下記のフォルダ配下が残ります。

%WINDIR%\¥SetUp¥Script

- プロダクトキーを設定しない場合は、ProductKey タグを削除してください。
- Sysprep 応答ファイルをインポートする場合は、下記に示す自動ログオン設定は、反映されません。Sysprep 応答ファイル内に記載してください。

[自動ログオンの設定]

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥

Provider¥VM¥VMware

値名 (型): AutoLogonSetting(DWORD)

値: 0 (既定値)

- 0 は自動ログオンしない
- 1 は Windows Vista/7 のみ自動ログオンする
- 2 は自動ログオンする

[自動ログオン回数]

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥

Provider¥VM¥VMware

値名 (型): AutoLogonCount(DWORD)

値: 1 (既定値)

- ◆ マシンプロファイルについて
ゲスト OS が認識する NIC の順番は、ネットワーク情報に設定している順番と一致しない場合があります。

◆ DeploymentManager による固有情報反映について

下記の場合に IP アドレスが反映可能なのは NIC4 枚までのため、ネットワーク設定に 5 枚以上の固定 IP アドレスを設定すると、IP アドレス反映待ちがタイムアウトします。

- マスタパラメータファイル（非高速版）を用意した場合
- マスタパラメータファイルがなく、ゲスト OS が Windows Vista 以前の場合

◆ ドメイン参加する場合

仮想マシンを新規リソース割り当てや再構成 (Reconstruct / Revert) などを実行して、ドメインに参加する場合は、ホストプロファイルのドメインアカウントに下記のようにドメイン名付きで指定してください。指定しない場合は、ActiveDirectory のドメインコンピュータで仮想マシンのコンピュータアカウントが無効になる場合があります。

ドメインアカウント@ドメイン名

Xen の場合

- ◆ XenServer をサブシステム登録する際は、XenServer Pool Master 以外の XenServer を登録できません。Slave の XenServer は、SigmaSystemCenter に登録できません。また、Standalone 管理の XenServer についてはサポートしておりません。
- ◆ XenServer Pool Master をサブシステムとして登録、およびサブシステムから削除する場合は、仮想マシンの作成や、テンプレート作成などが行われていないことを確認した上で行ってください。
仮想マシンの作成処理中や、テンプレート作成中などにサブシステム登録 / 削除を行った場合、情報の構築が正しく行われません。
- ◆ IP アドレスとホスト名の両方でサブシステムに登録しないでください。
- ◆ Windows のグループプロパティの OS 設定
Windows のグループプロパティの OS 設定で設定管理者パスワードを指定してください。正しく指定していない場合、仮想マシン作成に失敗します。
また、グループ設定で入力したパスワード設定は、Administrator アカウントに対して設定されます。個別に作成した管理者権限を持つユーザアカウントに対しては、設定されません。
- ◆ リソースプールについて
Xen 環境ではリソースプールを作成する場合に、vCPU の単位に 1 コアの vCPU 数を選択しないでください。vCPU 数の総数が "0" になります。

Hyper-V の場合

- ◆ Hyper-V を仮想マネージャとして登録、および削除する場合は、仮想マシンの作成や、テンプレート作成などが行われていないことを確認した上で行ってください。
仮想マシンの作成処理中や、テンプレート作成中などにサブシステム登録 / 削除を行った場合、情報の構築が正しく行われません。
- ◆ Hyper-V クラスタを登録するときには、すべてのノードを起動した状態でクラスタを登録してください。
- ◆ Hyper-V クラスタで省電力運用を行う場合、クォーラム設定を [マジョリティなし] に設定してください。ただし、クラスタマネージャで表示される [現在のホストサーバー] は、省電力の対象外になります。初期設定では、最低稼働ノード台数が 3 台となっています。この値は、以下のレジストリで変更が可能です。

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥Provider¥
VM¥HyperV

値の名前 : NumReserveMachines

データタイプ : DWORD

デフォルト値 : 3 (台)

- ◆ 仮想マシンの作成先ディレクトリの設定が長すぎる場合、VM 作成に失敗する可能性があります。その場合は、より短い設定に変更してください。
- ◆ ファイルサーバを仮想マシンの格納場所として使用する場合、かつ、Windows Server 2012 Hyper-V をスタンドアロンとして追加する場合、VM サーバ追加で使用するアカウントは、ドメインの管理者を使用してください。
- ◆ Hyper-V を SigmaSystemCenter へ登録する場合、Windows Server 2012 で導入された Hyper-V Administrators グループに含まれるアカウントは使用できません。管理者アカウントを使用してください。
- ◆ Windows Server 2012 のデータストアとして、ファイルサーバを SigmaSystemCenter に登録する場合、ssc コマンドを利用します。追加の場合は、ssc create datastore コマンド、削除の場合は、ssc delete datastore コマンドを使用してください。使用例は以下ようになります。

```
ssc create datastore ¥¥f-server1¥Share1¥ Hyper-V ホスト名 -server  
f-server1 -folder Share1
```

(2 行で表示されていますが、1 行で入力します。)

- ◆ Windows Server 2012 において、仮想マシンの構成にファイル共有を使用する場合、ファイルサーバの指定方法は、すべて同じ形式にしてください。(たとえば、ホスト名単独と FQDN、IP Address などを使い分けるような指定はしないでください。) また、IPv6 アドレスを使用した指定は行わないでください。
- ◆ ISO ファイルを SigmaSystemCenter に登録する場合、データストア直下か、その直下に "ISO" というディレクトリを作成して、その中に ISO ファイルを配置してください。
- ◆ Windows Server 2012 R2 でサポートされた Generation 2 の仮想マシンを作成する場合、SigmaSystemCenter でテンプレート元として、Generation 2 の仮想マシンを用いるか、もしくは空 VM を作成時に、マシンプロファイルの構成パラメータの「vm.hw.firmware」で「efi」を指定します。

1.2.4. 仮想マシンの設定について

仮想環境全般

- ◆ CPU 数、メモリサイズの最大値について
仮想マシンに設定できる CPU 数、メモリサイズはご利用の環境により制限があります。詳細については、VMware 社、Citrix 社、および Microsoft 社の製品マニュアルを参照してください。
- ◆ 仮想マシンのフラグメンテーションについて
差分情報の増大を予防するために、マスタ VM、および Differential Clone 用のテンプレートから作成した仮想マシンの自動デフラグメンテーションを無効化してください。
- ◆ 仮想マシンのスリープ設定について
マスタ VM のスリープ設定は、無効化してください。
- ◆ ゲスト OS のサービスのタイムアウト値について
仮想マシンのゲスト OS が Windows で、仮想マシンサーバの負荷が高い場合など、ゲスト OS 内のサービスの起動に時間がかかり、サービスがタイムアウトする場合があります。そのような場合は、ゲスト OS 内の以下のレジストリの調整が必要になります。

レジストリキー : HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Control
 値の名前 : ServicesPipeTimeout
 データタイプ : DWORD
 デフォルト値 : 30000 (ミリ秒)

注: 既定値は 30,000 ミリ秒ですが、90,000 ミリ秒から 180,000 ミリ秒程度への変更を推奨します。特に Hyper-V の場合、これが原因で Heartbeat サービスが停止し、仮想マシンの起動に失敗することがあります。マスタ VM での設定をお勧めします。

- ◆ SigmaSystemCenter 3.3u1 以前からバージョンアップした場合、バージョンアップ前に仮想マシンに対して指定されていた構成パラメータ設定は、バージョンアップ後の [仮想] ビューの VM 編集画面、およびテンプレート作成画面では表示されません。ただし、運用グループ配下で稼働中の仮想マシンの場合は、バージョンアップ後に、構成パラメータ設定付きのマシンプロファイルを指定して [再構成] - [マシンプロファイル適用] を実行すれば表示されるようになります。

VMware の場合

- ◆ VMware Tools のインストール
仮想マシンへのゲスト OS インストール後、必ず VMware Tools をインストールしてください。VMware Tools がインストールされていないマスタ VM を元に作成したテンプレートから、SystemProvisioning で新規に仮想マシンを作成した場合は、仮想マシン作成が失敗します。
インストール方法については、VMware 社の製品マニュアルを参照してください。
- ◆ シェア値について
VMware の仮想マシンの場合、SystemProvisioning で指定できる CPU のシェア値の上限値は "99999" です。
VMware の仮想マシンの場合、SystemProvisioning で指定できるメモリのシェア値の上限は "10000" です。
VMware の仮想マシンの場合、SystemProvisioning で指定できるディスクのシェア値の上限は "4000" です。
vSphere Client でそれぞれのシェア値に上限値以上の値を入力した場合、VM 編集ができません。
- ◆ スナップショットについて
スナップショットは、1 つのスナップショットからツリー状になるように作成してください。
ツリーの最上位のスナップショットが 2 つ以上の場合、ディスクタイプが正常に判断できなったり、VM 編集画面で不正な拡張ディスクが表示されたりする場合があります。
- ◆ 仮想ディスクの共有について
VM 編集の操作で 1 つの仮想ディスクを複数の仮想マシンで共有することはできません。
共有した場合は、一方の仮想マシンが起動できなくなります。
仮想ディスクを共有する場合は、vCenter Server であらかじめ仮想マシンの SCSI コントローラの SCSI パスの共有を仮想、または物理に設定してください。
- ◆ ネットワークの帯域制御について
分散スイッチに接続した仮想 NIC にトラフィックシェーピングを設定できます。

仮想 NIC にトラフィックシェーピングを設定する場合は、分散仮想ポートグループの「トラフィックシェーピングのオーバーライド」の設定を有効にしてください。

また、多数の仮想マシンに対して帯域制御を構成する場合は、仮想 NIC に帯域制御は設定せず、分散ポートグループに帯域制御を設定し仮想マシンを接続することもできます。

仮想 NIC が接続している仮想ポートグループの設定のポートバインドが「短期バインド」の場合はサポートしません。

◆ ディスクのリソース制御について

仮想ディスクのシェア値、制限値の設定は、vSphere5.5 以降をサポートしています。

ディスクのリソース制御を有効にするには、仮想ディスクを配置しているデータストアのストレージ IO 制御の設定を有効にする必要があります。下記を参照してストレージ IO 制御が有効になっていることを確認してください。

<http://kb.vmware.com/kb/2093479>

Xen の場合

◆ XenServer Tools のインストール

Xen で仮想マシンを作成した場合、ゲスト OS のインストール後、必ず XenServer Tools をインストールしてください。XenServer Tools がインストールされていない仮想マシンは、電源操作などに失敗する場合があります。

インストール方法については、Citrix 社の製品マニュアルを参照してください。

◆ 仮想マシンのブートオーダーについて

仮想マシンのブートオーダーの設定を必ず NIC よりディスクが先に起動するよう設定してください。先頭にしていない場合、仮想マシンの操作（電源操作、移動など）が失敗する場合があります。

◆ VM 編集について

メモリサイズの最小値は、仮想マシンのゲスト OS によって異なります。

メモリサイズの変更で最小値以下の値を入力して VM 編集を実行した場合、入力した値にならず、最小値に変更されます。

ゲスト OS のメモリサイズの最小値については、Citrix 社の製品マニュアルを参照してください。

◆ CPU、およびメモリ設定について

CPU 予約、CPU リミット、およびメモリシェア、メモリ予約、メモリリミットは設定できません。

◆ IP アドレスの設定

Xen の Full Clone 用のテンプレートから作成した仮想マシンの場合は、IP アドレスは自動で反映されませんので、手動で IP アドレスを設定してください。

Hyper-V の場合

◆ 統合サービスのインストール

Hyper-V 環境で仮想マシンを作成する場合、Guest OS のインストール後、統合サービスをインストールしてください。Windows Vista 以降の OS で、アップデートが必要な場合は、アップデートを行ってください。

インストール方法については、Microsoft 社の製品マニュアルを参照してください。

◆ CPU シェアについて

SigmaSystemCenter では、Hyper-V の設定値を 10 倍したものが表示されます。また、Hyper-V で設定できる最大値 10000 は、SigmaSystemCenter では設定できません。

◆ CPU リミットについて

SigmaSystemCenter では、以下の変換がされて、表示されます。

$(\text{Hyper-V の設定値} / 100) * \text{仮想マシンの CPU 数} * \text{仮想マシンサーバのクロック数 (MHz)}$

◆ メモリ設定について

ダイナミックメモリ機能を使用する場合、メモリリミットの設定は、メモリサイズの設定より、大きい値を設定してください。ダイナミックメモリ機能を使用しない場合、メモリサイズとメモリリミットの値を同じにしてください。

◆ 仮想ディスクの共有について

SigmaSystemCenter において、仮想ディスクの共有設定を行うことはできません。Hyper-V マネージャは、Windows Server 2012 R2 以前の場合、仮想ディスクの「高度な機能」で [仮想ハードディスクの共有を有効にする] をオンに設定して、当該仮想ディスクを共有してください。

Windows Server 2016 の場合、共有ドライブを利用して仮想ディスクを共有してください。

◆ ネットワークの帯域制御について

仮想スイッチに接続している仮想 NIC に対して、トラフィックシェーピングを設定できません。

多数の仮想 NIC に対して帯域制御を構成する場合は、仮想 NIC に帯域制御は設定せず、ポートグループに帯域制御を設定することにより、当該ポートグループに所属しているすべての仮想 NIC に適用できます。

帯域制御の設定は、Windows Server 2012 以降でサポートしています。

レガシ ネットワーク アダプターでは、帯域制御をサポートしません。

◆ ディスクのリソース制御について

仮想ディスクの予約値、制限値の設定は、Windows Server 2012 R2 以降でサポートしています。

SigmaSystemCenter 3.5 リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編

共有している仮想ディスクに対しては、ディスク IO リソースを設定できません。

◆ Windows Server 2012 における設定について

SigmaSystemCenter では、Windows Server 2012 Hyper-V の以下の機能をサポートしません。

- Hyper-V レプリカ機能
- 仮想 FC アダプタ機能
- SR-IOV 機能

◆ OS が確認できない仮想マシンの起動について

OS の情報が SigmaSystemCenter から確認されることがない仮想マシンを起動した場合、Warning を出力して正常終了します。OS がインストールされていない仮想マシンや、統合インストールをインストールしていない仮想マシンなどがこれに該当します。

1.2.5. 仮想マシンサーバの操作について

仮想環境全般

◆ 仮想マシンサーバのシャットダウン・リブート時の確認事項

仮想マシンサーバのシャットダウン / リブートを行う場合、必ず事前に該当仮想マシンサーバ上で仮想マシンが稼動していないことを確認し、その後に操作を行ってください。仮想マシンサーバ上で仮想マシンが稼動している場合、仮想マシンが停止状態となるため、操作後は仮想マシンの運用が行えなくなります。

◆ 仮想マシンサーバの用途変更について

モデルの種別が [VM サーバ] のグループで稼動している仮想マシンサーバを、モデルの種別が [物理] のグループに用途変更することはできません。

◆ 仮想マシンサーバの移動について

運用グループで稼動中の仮想マシンサーバを別の DataCenter に移動させた場合、移動先の DataCenter と運用グループの VM サーバモデルに設定した DataCenter が一致しなくなるため、移動させないでください。

◆ データストア一覧の容量表示について

仮想マシン作成やテンプレート作成後に自動で更新されません。

◆ マスタマシン登録、リソース割り当て、マシンの置換、および用途変更について

マスタマシン登録や OS をインストールするシナリオを設定せずに、仮想マシンサーバのリソース割り当て、マシン置換、および用途変更を実行する場合は、既にインストール

されている OS の情報 (ホスト名、IP アドレス) とホスト設定の情報を一致させてください。一致していない場合は、操作が失敗する場合があります。

◆ 依存関係が設定された仮想マシンサーバの操作について

- フェイルオーバー / 配置制約適用 / 配置情報適用時に、仮想マシンの移動先として他のマシンに依存する停止状態の仮想マシンサーバが起動される場合、その仮想マシンサーバの依存先のマシンは、連動操作が有効であっても起動されません。依存先のマシンが停止状態の場合は、仮想マシンの移動先として選択された仮想マシンサーバは起動できず、異常終了となります。
- 配置制約適用 / 配置情報適用では、他のマシンに依存する仮想マシンについては、移動後の起動は実行されません。そのため、他のマシンに依存する仮想マシンのフェイルオーバー用途としては利用できません。
- 仮想マシンサーバが仮想マシンに依存する場合、当該仮想マシンサーバ、および依存先の仮想マシンを同時に停止することはできません (連動操作による停止もできません)。先に当該仮想マシンサーバを停止してから、連動操作を無効に設定した上で、依存先の仮想マシンを停止する必要があります。
- 仮想マシンサーバの停止時は、仮想マシンサーバ上の仮想マシンから当該仮想マシンサーバへ暗黙の依存関係があるものとして動作するため、仮想マシンサーバから仮想マシンへの依存関係がある場合は、その依存関係の設定や仮想マシンの配置によっては、循環依存状態となる可能性があります。この場合、当該仮想マシンサーバ、および仮想マシンを停止することはできません。依存関係の設定、および仮想マシンの配置を見直し、循環依存状態を解消した上で停止を行う必要があります。
- 仮想マシン間に依存関係が設定されており、仮想マシンサーバで多重障害が発生している場合に、仮想マシンサーバの VM 退避操作は、EQ 制約が設定されている仮想マシンの一部を起動できない場合があります。

以下の条件に合致する仮想マシンが存在する場合、VM 退避後に手動で仮想マシンを起動してください。

- EQ 制約が設定されている仮想マシンの一部に対し、依存元方向に対象仮想マシンサーバと同じグループ / モデルで移動する仮想マシンサーバ上で動作する仮想マシンが存在する。
- 依存元となっている仮想マシンの依存先方向に、以下のいずれかのホストが設定されている。
 - 物理マシン
 - 依存先を有する仮想マシンサーバ
 - 対象仮想マシンサーバと異なるグループ / モデルで移動している仮想マシンサーバ、およびその仮想マシンサーバ上で動作する仮想マシン
- 仮想マシン間に依存関係が設定されている場合、仮想マシンの移動方法として "Storage Migration"、もしくは "Move" を指定した、仮想マシンサーバの VM 退避操作が失敗する場合があります。

以下の条件に合致する仮想マシンが存在する場合、VM 退避後に手動で仮想マシンを移動してください。

- 移動対象となる仮想マシンの仮想ディスクが、移動先となる仮想マシンサーバからアクセスできない場所に存在する。

- 依存元となっている仮想マシンの依存先方向に、以下のいずれかのホストが設定されている。
 - 物理マシン
 - 依存先を有する仮想マシンサーバ
 - 対象仮想マシンサーバと異なるグループ / モデルで稼動している仮想マシンサーバ、およびその仮想マシンサーバ上で動作する仮想マシン

◆ VM 退避操作における非常用ホストの開封処理について

非常用ホストを設定している場合、VM 退避時に手動、もしくは外部操作により非常用ホスト上で仮想マシンの電源操作を行うと、当該非常用ホストが開封される場合があります。VM 退避処理中に非常用ホスト上で仮想マシンを操作する場合、対象仮想マシンをメンテナンスモードに指定してください。

◆ 仮想マシンサーバの起動に連動した仮想マシンの自動起動について

複数の仮想マシンサーバに対して同時に起動操作を実行するとき、以下の条件が成立する場合において、まれに仮想マシンの起動が異常終了となることがあります。

- 操作対象の複数の仮想マシンサーバ上に、EQ/NE 制約が設定された仮想マシン群、または、依存関係が設定された仮想マシン群が分散して存在し、それらに対して仮想マシンサーバとの連動起動が設定されている。
- 操作対象の仮想マシンサーバ上に、上記の仮想マシン群とは別に、仮想マシンサーバとの連動起動が設定された仮想マシンが存在する。

VMware の場合

◆ ESX の電源操作について

DeploymentManager と vCenter Server の両方で管理されている ESX の電源操作をする場合、vCenter Server 上で接続状態である必要があります。切断状態の場合、電源操作がタイムアウトで失敗します。

◆ ESX の "VM サーバ削除" について

クラスタ管理下にある仮想マシンサーバの削除に失敗した場合、仮想マシンサーバが切断状態で vCenter Server に残る場合があります。

vSphere 5.0 以降の環境では、Full Clone 用のテンプレートが自動的に他の ESX サーバに移動します。移動先となる ESX サーバは選択できません。

◆ ESX の復旧処理について

vCenter Server に管理されている ESX の復旧 (Failover) 処理を行った場合、その ESX が切断状態になる場合があります。

◆ ESXi のリソース割り当て、マシン置換、および用途変更について

ESXi を管理する場合、VM サーバモデルに DataCenter が設定されていないと、リソース割り当て、マシン置換、および用途変更を行うと仮想マシンサーバの起動に失敗しま

す。また、切断状態の ESXi のマシン置換は、ESXi の起動を待ち合わせできない場合があります。

◆ LUN について

ESX に LUN (ディスクボリューム) を追加 / 削除を行った場合は、ssc scan datastore コマンドを使用して ESX の LUN (ディスクボリューム) 情報を更新してください。

Xen の場合

◆ XenServer Pool Master の電源操作について

SystemProvisioning から XenServer Pool Master の再起動、およびシャットダウンを行わないでください。この操作を行った場合、XenServer Pool Master が起動状態になるまで、SystemProvisioning から Xen 仮想マシンや XenServer に対する操作ができません。

◆ XenServer の "VM サーバ追加" について

- XenServer で仮想マシンが存在している場合は、その XenServer を "VM サーバ追加" にて追加しないでください。追加した XenServer 配下に存在する仮想マシンの情報が正しく収集されない場合があります。
- XenServer Pool Master の XenServer は追加できません。
- デフォルトネットワーク以外のネットワークを持つ XenServer を追加しないでください。

◆ XenServer の "VM サーバ削除" について

削除した XenServer に存在していた仮想マシンが、XenCenter に表示されたままになる場合があります。この場合は XenCenter で削除してください。

◆ データストアの使用量について

DataCenter 内に電源オフ状態の XenServer が存在する場合、仮想マシンを削除し収集を行ってもデータストア使用量が減少しない場合があります。

◆ 解体について

XenServer の解体を行う場合は、前もって XenServer を使用して対象 XenServer を DataCenter から削除し、シャットダウンを行ってください。解体後は収集を行ってください。

◆ マシン診断について

Slave の XenServer に対するディスク診断は正常状態が判断できないため、ハードウェアステータスの状態詳細の Disk 接続状態が正常にならず不明となります。

Hyper-V の場合

◆ CSV の構成変更について

Hyper-V クラスタ環境で、CSV を追加・名前変更・削除した場合は、クラスタの収集を行って、情報をアップデートしてください。

◆ データストアの作成について

SigmaSystemCenter で Hyper-V 環境にデータストアを追加する場合は、Unique ID を指定する形式のみサポートしています。他の形式での指定はできません。また、作成時に指定するディスクは、ホスト側で認識済みである必要があります。認識していない場合は、ssc scan datastore コマンドを実行してください。

◆ 仮想マシンサーバ上のフォルダのファイル共有について

- 仮想マシンサーバ (Hyper-V ホスト) 上のフォルダをファイル共有する方法は SigmaSystemCenter としてサポートしておりません。
- SigmaSystemCenter では、Hyper-V 単体に対して SMB ファイルサーバを導入する場合、ドメインの管理者アカウントを使用する必要があります。また、SigmaSystemCenter がそのファイルの共有を制御する必要もあります。

SMB ファイル共有については、ローカルグループである Hyper-V Administrators を用いる方法の代わりに、直接以下のアカウントに対して、フルコントロール権限の設定をする方法を推奨します。

- ドメインの管理者アカウント (Domain Admins)
- Hyper-V ホストのマシンアカウント
- SigmaSystemCenter 管理サーバのマシンアカウント

関連情報: その他の条件については、「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 概要編」の「4.1.7 Hyper-V 環境での SMB サーバの利用」を参照してください。

◆ 安全なシャットダウンについて

SigmaSystemCenter から予兆や省電力などで、クラスタを構成する Hyper-V のホストをシャットダウンする場合、通常のシャットダウンとは違い、安全にシャットダウンできるかどうかの判断を行います。

シャットダウンできるかどうかの判断でクラスタマネージャに表示される [現在のホストサーバ] は、シャットダウンの対象とはなりません。

また、[現在のホストサーバ] とは別に、SigmaSystemCenter でクラスタあたりの最低稼働ノード台数というものも定義しています。シャットダウンした結果、動作しているノード数が、その最低稼働ノード台数を下回るような場合、シャットダウンができなくなります。この台数は、デフォルトでは、3 台となっています。変更したい場合は、以下のレジストリで変更が可能です。

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥Provider¥
VM¥HyperV

値の名前 : NumReserveMachines

データタイプ: REG_DWORD

デフォルト値: 3 (台)

レジストリ変更後のサービス再起動やホストの再起動は必要ありません。

1.2.6. テンプレートについて

仮想環境全般

◆ テンプレートの再作成について

SigmaSystemCenter 2.1 update 2 で、VM 最適作成機能が改善されました。

「新規リソース割り当て」ウィンドウで [VM サーバを自動選択する] を選択して仮想マシンを作成する場合、SigmaSystemCenter 2.1、SigmaSystemCenter 2.1 update 1 で作成されたテンプレートは再作成が必要になります。

Full Clone 用のテンプレートの場合、再作成は必要ありません。

[VM サーバを自動選択する] を選択した場合の機能の詳細については、「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 概要編」の「1.7.3 マシン稼動 / 新規リソース割り当て (仮想マシン)」を参照してください。

◆ アカウントについて

テンプレートのアカウントは、仮想マシンに引き継がれます。

マスタ VM の不要なアカウントは、テンプレート作成前に削除してください。

なお、Windows Vista 以降の Windows Client の場合、Administrator アカウントは無効になります。

管理者権限を持つアカウントをすべて削除しないようにしてください。

◆ マスタ VM の VM 名とイメージ名の名称について

SigmaSystemCenter 3.0 から Differential Clone、および Disk Clone のテンプレート (VMware 環境を除く) を作成するために指定するマスタ VM の VM 名とイメージ名に空白が使用できなくなりました。

既存のテンプレート / イメージは継続して利用可能ですが、新規で作成する場合はマスタ VM 名とイメージ名に空白を含めることはできません。

- ◆ イメージについて
テンプレートに含まれるイメージが 1 つしかない場合、イメージの削除はできません。
- ◆ VM モードの設定について
Differential Clone、Disk Clone のテンプレート作成、またはテンプレートに対するイメージ作成においては、VM モードを有効に設定する場合は、以下の点に注意してください。
 - VM モードは、Windows Server 2012、Windows 8 でサポートされます。それ以外の OS では有効にしないでください。
 - VM モードを有効に設定して作成したイメージでは、固有情報反映時に固定 IP アドレスが反映されません。固定 IP アドレスを反映する場合は、有効にしないでください。

VMware の場合

- ◆ テンプレートの登録について
VMware vCenter Server から ESX がいったん削除されると、ESX が再度接続されてもテンプレートを参照できません。この場合、仮想マシン作成時に運用ログにテンプレートが見つからない旨のメッセージが表示されます。
復旧するには、データストアブラウザに以前作成したものと同名でテンプレートを登録してください。
- ◆ テンプレートの名称について
VMware の場合、テンプレートの名称は、DataCenter 内で一意となるよう設定してください。また、システムで一意になるように設定することを推奨します。
テンプレートの名称は、80 文字以下の英数字、および "-"、 "_" が使用可能です。
- ◆ テンプレート作成時の情報設定について
VMware の場合、[仮想] ビューのテンプレートの編集で指定する、Windows 設定の [名前]、および [組織名] では、全角文字、カナ文字を使用できません。全角文字、カナ文字を使用した設定を行った場合は、仮想マシンが正常に作成されません。
- ◆ vCenter Server 環境の Disk Clone 用のテンプレートについて
SigmaSystemCenter 3.0 から Disk Clone の方式が変更されました。
SigmaSystemCenter 3.0 以前に作成された Disk Clone 用のマスタ VM には、DeploymentManager による Sysprep、または自動 Sysprep 実行準備がされているため、Disk Clone 用テンプレートの作成に使用することができません。
以下の手順でマスタ VM の Sysprep を解除してください。
 - Sysprep が実行されたマスタ VM
 1. マスタ VM が起動すると DeploymentManager による固有情報反映が監視されるので、DeploymentManager でマスタパラメータファイルを用意します。

2. マスタ VM を起動し、個性を反映します。
 3. 個性が反映されたマスタ VM から「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 概要編」の「4.4.10 Disk Clone」を参照して、Disk Clone 用テンプレートを作成します。
- 自動 Sysprep 実行準備されたマスタ VM の場合
 1. マスタ VM を起動します。
 2. C:\Sysprep フォルダを削除します。
 3. マスタ VM から「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 概要編」の「4.4.10 Disk Clone」を参照して、Disk Clone 用のテンプレートを作成します。

KVM の場合

◆ テンプレートの再作成について

SigmaSystemCenter 3.0 からアップグレードする場合、SigmaSystemCenter 3.0 で作成した KVM のテンプレートのうち、マスタのディスクが Raw タイプのものは、アップグレード後に再作成する必要があります。

1.2.7. 仮想マシンの操作について

仮想環境全般

◆ メンテナンスモード設定中の仮想マシン / 仮想マシンサーバの操作について

"メンテナンスモード" に設定した仮想マシン / 仮想マシンサーバに対しての移動や追加などの操作を行わないで下さい。操作を行った場合、正常に動作しないことがあります。

◆ "サスペンド" 状態の仮想マシンの操作について

電源状態が "サスペンド" の仮想マシンに対して移動や追加などの操作を行う場合、必ず事前に Web コンソールなどから起動操作で一時停止をレジュームしてください。

仮想マシンの電源状態が "サスペンド" の場合、電源操作に失敗するため、正常に動作しないことがあります。

◆ 仮想マシン新規作成後のシャットダウン / 再起動について

Web コンソールで仮想マシンの新規作成を行い、作成した仮想マシンのシャットダウン / 再起動が必要な場合、仮想マシンのゲスト OS 上で IP アドレスの設定が正しく行われていることを確認後に、シャットダウン / 再起動を実行してください。

仮想マシンの新規作成処理が行われ、起動した直後にシャットダウン / 再起動を行うと、バックグラウンドで動作している IP アドレスの設定が完了していない場合は、IP アドレスの設定が正しく行われません。

◆ 仮想マシンのシャットダウンについて

SystemProvisioning から仮想マシンのシャットダウンを行う場合に、仮想マシンが "パスワード付きスクリーンセーバによるロック状態"、"編集集中のデータやシャットダウン要求に応答しないアプリケーションが存在する状態" になっている場合は、シャットダウンがタイムアウトして強制パワーオフが行われます。

◆ 仮想マシン移動後の自動起動について

仮想マシンを移動する際、Web コンソールの「VM 移動」ウィンドウで [自動起動] チェックボックスをオンにした場合、もしくは、移動コマンド (ssc migrate machine、ssc move machine) で -n オプションを指定しない場合、仮想マシンは移動後に自動で起動します。また、サスペンド状態も解除されます。

◆ VM 配置制約が設定された仮想マシンの移動について

仮想マシンの移動コマンド (ssc migrate machine、ssc move machine) では、複数の仮想マシンをまとめて移動することができません。そのため、EQ 制約が設定された起動状態の仮想マシンを移動する場合は、配置制約を無視して (-ignore rule オプションを指定して) 各仮想マシンを 1 台ずつ移動する必要があります。この場合、Pin 制約も無視されますので注意してください。

◆ リソース割り当ての実行条件について

- モデル、もしくはグループのソフトウェア設定に登録されている vCenter Server 管理以外のテンプレートのタイプが Differential Clone、または Disk Clone の場合、リソース割り当ては実行できません。
- 登録するグループ、ホスト、モデルのいずれかのソフトウェア設定に、テンプレートを登録してください。また、登録するテンプレートが、OS の種類が Windows の Full Clone 用のテンプレート、および Differential Clone 用のテンプレートの場合、OS の種類 (KMS ライセンス認証をサポートしていない OS) によっては、OS ライセンスの正しいプロダクトキーが設定されている必要があります。この設定を行っていない場合、リソース割り当てが失敗します。(VMware、および Xen のみ)
- 登録する仮想マシンの管理者パスワードはクリアしておいてください。クリアしていない場合は、グループプロパティの OS 設定で ローカルアカウント設定のビルトイン管理者の [パスワード] に設定した情報が仮想マシンに反映されません。

◆ Windows Vista Guest へのリソース割り当てについて

- 固定 IP アドレスが設定されたテンプレートを利用して、"新規リソース割り当て" を実行した場合、新規に作成された仮想マシンの仮想 NIC に、複数の IP アドレスが割り当たることがあります。
テンプレートの仮想 NIC は、DHCP 設定にしてください。
- 固定 IP アドレスが設定された仮想マシンに対して、"リソース割り当て" を実行した場合、リソースを割り当てた仮想マシンの仮想 NIC に、複数の IP アドレスが割り当たることがあります。

仮想マシンの仮想 NIC は、"リソース割り当て" を行う前に、DHCP 設定に変更してください。

- 複数の仮想 NIC が設定されているグループで、仮想マシンの "新規リソース割り当て"、または "リソース割り当て" を実行した場合、デフォルトゲートウェイが設定される仮想 NIC は 1 つだけです。
設定されなかった仮想 NIC は、オペレーション実行後に手動で設定してください。
- リソース割り当て時の固有情報反映は 1 回に制限されています。
"リソース割り当て" を実施した仮想マシンを、再度グループで移動させる場合は、"マスタマシン登録" を利用してください。
- 新規に作成した仮想マシンの Administrator アカウントは無効になります。
テンプレートから管理者権限を持つアカウントをすべて削除しないようにしてください。
- 新規リソース割り当ての際、仮想マシンがドメイン参加をする場合、NIC 枚数が 1 枚の場合にドメインに参加できないことがあります。ドメイン参加する場合は仮想マシンに NIC を 2 枚以上付けてください。

- ◆ SystemProvisioning で作成される仮想マシンの仮想マシン名について
グループに新規リソース割り当てを行い、仮想マシンを作成する場合、[VM サーバを自動選択する] を選択すると SystemProvisioning で自動的に仮想マシン名が決定されます。
仮想マシン名は、ホスト名と同じ名前になります。既に同じ仮想マシン名が存在する場合は、ホスト名に付加文字 "_x" が追加された名前になります。x には、1 で始まる整数が入ります。名前の末尾に "_1" が追加された仮想マシンが既に存在する場合、"_2" のように+1 した数字を付与した名前のマシンが追加されます。
- ◆ HW Profile Clone 用テンプレートを利用した仮想マシンの新規リソース割り当てについて
スタンドアロン ESXi で "新規リソース割り当て" を実行する場合、マスタ VM が共有ディスク上にあり、電源 ON 状態の場合は、新規リソース割り当てが失敗します。
- ◆ 仮想マシンの置換、用途変更について
仮想マシンに対して、置換、用途変更を行うことはできません。
- ◆ レプリカ VM のスナップショットについて
レプリカ VM は、「Frozen-Replica」の名前のスナップショットが作成されますが、追加でスナップショットを作成する場合は、同じ階層にスナップショットを作成しないでください。同じ階層に 2 個以上スナップショットを作成した場合は、Differential Clone 用の仮想マシンの新規リソース割り当てを行うと、意図しない仮想マシンが作成されることがあります。

- ◆ Differential Clone で作成した仮想マシンの再構成について
Differential Clone 用のテンプレートで作成した仮想マシンに対して再構成を行った場合は、システムディスクのマシンプロファイル設定は無視されます。
- ◆ VM クローンについて
レプリカ VM を VM クローンに使用することはできません。
また、Differential Clone で作成した仮想マシンを VM クローンした場合は、レプリカ VM と親子関係がなくなり、差分ディスクを持たず、レプリカ VM とは独立した仮想マシンが作成されます。Xen / KVM 環境では Differential Clone で作成した仮想マシンからの VM クローンは、サポートしていません。
- ◆ Reconstruct / Revert について
Reconstruct / Revert を実行時に、仮想マシンのシステムディスクが存在するデータストアの空き容量がシステムディスクサイズ以下の場合は操作に失敗します。
また、ホストプロファイルのローカルアカウント設定により作成されたアカウントは再作成されます。
- ◆ VM 削除、および仮想マシンの解体について
運用グループから仮想マシンが削除される場合、仮想マシンが登録されている仮想マシンサーバが電源オフの場合、仮想マシンサーバを起動して削除を行います。仮想マシンサーバに対して省電力イベントを設定したポリシーを適用している場合、省電力イベント発生後に仮想マシンサーバがシャットダウンされますが、その他の場合は、仮想マシンサーバが起動した場合は、仮想マシン削除後に仮想マシンサーバのシャットダウンを行ってください。
- ◆ 切断した仮想ディスクについて
VM 編集で仮想ディスクを切断した場合や VM 削除でディスク情報を削除しなかった場合は、仮想マシンから仮想ディスクが切断され、データストア上に仮想ディスクが削除されずに保持されます。切断された仮想ディスクは、Web コンソールのデータストアブラウザやコマンドで参照することができます。

以下の方法で切断された仮想ディスク名を確認してください。

- VMware 環境の場合
 1. 切断された仮想ディスクのデータストア名と名前を運用ログで確認します。

出力例)

アクションの状況: (80%) : 仮想マシン'VM1'から仮想ディスク'[SAN1]
VM1/VM1.vmdk'を切断します。

vVOL、vSAN 上にある仮想ディスクの場合は、仮想ディスク名とデータストア上に存在するファイルの名前が異なります。

2. vSphere Client で vCenter Server に接続し、[ホーム] — [インベントリ] — [データストア] を選択します。
3. 手順 1 で確認したデータストア [SAN1] を選択して、右クリックから [データストアの参照] をクリックします。
4. データストアブラウザ上で、手順 1 で確認したファイルパスに仮想ディスクが表示されます。

- Xen 環境の場合

1. 切断された仮想ディスクのデータストア名と UUID を運用ログで確認します。

出力例)

アクションの状況: (80%) : 仮想マシン'VM1'から仮想ディスク'[SAN1]
c9d0b592-7444-4cc3-bc44-8094c9dab803'を切断します。

2. XenCenter 上で、Xen PoolMaster のコンソール画面を開き、下記コマンドで仮想ディスクに名前をつけます。

入力例)

```
xe vdi-param-set  
uuid="c9d0b592-7444-4cc3-bc44-8094c9dab803"  
name-label="VM1-SystemDisk"
```

uuid には手順 1 で確認した UUID を指定します。
name-label には、一意な名前を指定します。

3. XenCenter 上で、手順 1 で確認したデータストア [SAN1] を選択して、[Storage] タブを開きます。
4. 仮想ディスク一覧の「name」に、手順 2 で付けた名前「VM1-SystemDisk」が表示されます。

- Hyper-V の場合

1. 切断された仮想ディスクのパス名とファイル名を運用ログで確認します。

出力例)

アクションの状況: (43%) : 仮想マシン'vm01'から仮想ディスク'[cluster01]
C:¥ClusterStorage¥Volume2¥vm01¥vm01-0001.vhd'を切断します。

2. 対象のクラスタ、もしくは仮想マシンサーバ上で、ログに出力されたパスにファイルがあることが確認できます。

- ◆ 仮想マシンの割り当て解除について

運用グループから仮想マシンが割り当て解除される場合に、[マシンを解体しないで未稼働にする] を選択すると、DeploymentManager から仮想マシンの登録が削除されま

SigmaSystemCenter 3.5 リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編

せん。その後、[仮想] ビューにて、仮想マシンを削除しても、DeploymentManager の登録は削除されません。不要な場合は、DeploymentManager の Web コンソールより仮想マシンを削除してください。

◆ マシンプロファイルに設定した既存ディスクについて

既存ディスクをマシンプロファイルに設定した場合は、そのときの仮想ディスクが設定されます。仮想ディスクを移動させたり、StorageMigration を行って仮想ディスクが移動したりした場合は、マシンプロファイルの更新は行われません。仮想ディスクを移動させた場合は、マシンプロファイルを再設定してください。

◆ 既存ディスクの接続について

VM 編集画面では差分ディスクは表示されず、差分ディスクの本体のディスクが表示されます。そのため、タイプに "Diff Clone" がある仮想ディスクをシステムディスク、または拡張ディスクに接続しても、VM 編集画面では本体の仮想ディスクのタイプでシステムディスクか拡張ディスクで表示され、接続したディスクを表示できない場合があります。

タイプに "Diff Clone" がある仮想ディスクを仮想マシンに追加する場合は、"Sys" はシステムディスク、"Ext" は拡張ディスクに追加するようにしてください。

また、仮想ディスクは複数の仮想マシンで共有することはできません (Hyper-V の場合を除く)。

◆ 依存関係が設定された仮想マシンの操作について

- 仮想マシンの起動 / 再起動時に、仮想マシンの起動先として他のマシンに依存する停止状態の仮想マシンサーバが起動される場合、その仮想マシンサーバの依存先のマシンは、連動操作が有効であっても起動されません。依存先のマシンが停止状態の場合は、仮想マシンの起動先として選択された仮想マシンサーバは起動できず、異常終了となります。
- 仮想マシンと仮想マシンに依存する仮想マシンサーバを同時に起動 / 再起動する場合、当該仮想マシンサーバは仮想マシンの起動先として選択されません。
- 他のマシンに依存されている仮想マシンを移動する場合、「サスペンド後に移動 (Quick Migration)」または「停止後に移動 (Move)」を行うことはできません。サスペンド操作、またはシャットダウン操作により、仮想マシンを事前に停止した上で移動を行う必要があります。

VMware の場合

- ◆ SystemProvisioning の Migration は、VMware 社の migration with VMotion 該当し、SystemProvisioning の電源オフ状態からの Migration、および Move は、VMware 社の migration に該当します。

◆ 仮想マシンの移動条件

- 電源 ON 状態の仮想マシン移動の場合

Migration / Storage Migration を利用する場合、移動元の仮想マシンサーバと、移動先の仮想マシンサーバが SAN を共有している構成である必要があります。また、

その他にも、ライセンス、HW 構成、仮想マシン構成など、条件を満たす必要があります。

詳細については VMware 社の製品マニュアルを参照してください。

- 電源オフ状態の仮想マシン移動の場合
仮想マシンの仮想マシンサーバ間の移動を使用する場合、仮想マシンサーバの構成、仮想マシン構成などの条件を満たす必要があります。
詳細については VMware 社の製品マニュアルを参照してください。
- Migration / Storage Migration により移動中の仮想マシンを移動するには、vCenter Server の VMotion の条件を満たす必要があります、VMotion ライセンス、SAN 環境などが必要です。詳細は VMware 社の製品マニュアルを参照して下さい。
- Differential Clone で作成した仮想マシン、および Differential Clone テンプレートのレプリカは、Storage Migration / Move はできません。
- Differential Clone で作成した仮想マシン、および Differential Clone テンプレートのレプリカは、DataCenter を超える仮想マシンサーバ間の移動はできません。
- 仮想マシンに非共有データストア上にあるフロッピーイメージがマウントされている場合は、Migration できません。
非共有データストア上にある ISO ファイルをマウントしている場合は、VM 移動によってアンマウントされます。
- 分散スイッチを使用している仮想 NIC がある仮想マシンを Failover した場合は、仮想 NIC が使用している分散スイッチ上のポートが変更されます。ポート単位で VLAN や帯域制御を設定している場合は、設定が削除されます。VLAN や帯域制御を設定する場合は、スイッチ、またはポートグループに設定してください。

◆ Failover について

Failover では DataCenter を超える移動はサポートしておりません。

◆ Differential Clone 方式で作成した仮想マシンの操作について

- Differential Clone 方式で作成した仮想マシンを削除する場合
スタンドアロン ESXi 上の Differential Clone で作成された仮想マシンを削除する場合は共有していた仮想ディスクを削除することができません。そのため、仮想マシンが削除されても仮想ディスクが残ります。仮想ディスクを削除する場合は、vSphere Client のデータストアブラウザ、または ESX 上から削除を行ってください。
- Differential Clone 方式で作成した仮想マシンに対しては、VMware Consolidated Backup (VCB) は利用できません。仮想マシンを停止し、VMFS 上に構築されたファイルを直接バックアップするようにしてください。

SigmaSystemCenter 3.5 リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編

- ◆ スタンドアロン ESXi 上の仮想マシンにリソースを割り当てる場合
作成するカテゴリの DPM サーバ、またはグループ、モデルのプロパティ設定の [全般] タブにある [DPM サーバ] テキストボックスを設定しておく必要があります。
また、HW Profile Clone を利用する場合は、作成するモデル、グループ、もしくはホストのいずれかプロパティ設定にある [ソフトウェア] タブに HW Profile Clone 用のテンプレートと DeploymentManager の OS 配信用のシナリオの登録が必須となります。
- ◆ 差分ディスクの容量表示について
VMware Infrastructure 3 環境、または ESXi の場合、差分ディスク容量は正常に表示されません。
- ◆ 再構成時の実行条件について
VMware Infrastructure 3 環境、または ESXi の場合、仮想マシンの差分ディスク容量が正しく取得できず、ディスク使用容量が設定した実行条件に合致していても再構成が動作しない場合があります。
- ◆ 再構成時の固有情報反映について
DeploymentManager 登録を行わない場合、再構成のジョブ完了時点で、再構成時に行われる固有情報反映がまだ完了していない場合があります。
- ◆ 仮想マシンの削除について
他の仮想マシンの仮想ディスクを参照し、かつスナップショットが作成されている場合は削除できません。
- ◆ VM クローンについて
 - ・ スタンドアロン ESXi 環境では、クローン元の仮想ディスクのタイプに関係なく、Thick タイプになります。
 - ・ 仮想マシンを作成する仮想マシンサーバにクローン元の仮想マシンが使用されているネットワークと同名のネットワークが構成されていない場合、作成した仮想マシンのネットワークが切断状態になります。仮想マシン作成後に VM 編集を行い、作成された仮想マシンのネットワークを正しく設定してください。
- ◆ VM 編集について
 - ・ VI3 環境でスナップショットがある仮想マシンの仮想ディスクサイズを変更することはできません。電源オフ状態の場合、操作は正常終了し、電源オン状態の場合、下記のエラーで失敗します。

仮想マシン編集に失敗しました。一般的なシステムエラーが発生しました:Internal Error
 - ・ スナップショットや Differential Clone で作成される Differencing タイプの仮想ディスクは編集することができません。

- 仮想ディスクのタイプを変更した場合に vCenter Server が仮想ディスクのタイプを正常に認識しない場合があります。
- VI3 環境で仮想ディスクのタイプの変更はできません。
- Differential Clone で作成される Differencing タイプの仮想ディスクが独立型の場合でも VM 編集画面では独立型になりません。
- 仮想ディスクの使用量が実際の値と異なる場合は、仮想マシン、または仮想マシンサーバの電源操作を行った後、収集を実行してください。
- スタンドアロン環境で電源オフの仮想マシンに対して仮想 NIC の追加はできません。
- CPU のシェア値は、vCenter Server に設定される値が 1,000,000 を超える場合は、VM 編集が失敗します。
- CPU のシェア値に下記のような値を設定すると、SigmaSystemCenter と vCenter Server に設定される値は異なる場合があります。
 - CPU 個数で割り切れない値
- メモリのシェア値は、vCenter Server に設定される値が 1,000,000 を超える場合は、VM 編集が失敗します。
- メモリのシェア値に下記のような値を設定すると、SigmaSystemCenter と vCenter Server に設定される値は異なる場合があります。
 - メモリサイズで割り切れない値
 - 100 で割り切れない値
- スタンドアロン環境で ESXi 4.1 Update1 の場合に、CPU / メモリのシェア値 / 予約 / リミットは設定されません。
- CPU の個数は、ライセンスで許可されている個数以上を設定すると、仮想マシンの電源オンができません。
- スナップショットがある仮想マシンの仮想ディスクを切断 / 削除しても VM 編集画面には拡張ディスクが表示されます。
- 電源オン状態で仮想ディスクのモードを変更することはできません。
- VM 編集でシステムディスクが表示されない場合は、vCenter Server から編集を実行してください。
- VMware Tools がマウントされている場合はアンマウントされます。光学ドライブ情報に VMware Tools が指定されている場合も一度アンマウントされた後、再度マウントされます。
- VMware Tools がマウントされている場合でも光学ドライブ情報は、設定なしと表示されます。
- 拡張ディスクの [既存ディスクを使用する] では、RDM された仮想ディスクはサポートしておりません。RDM のマッピングファイルは指定できません。
- 拡張ディスクに [既存ディスクを使用する] で差分ディスク (A-00001.vmdk) を接続した場合に、差分ディスクの本体の仮想ディスクのタイプが判断できないため、仮想ディスクが VM 編集画面で表示されない場合があります。差分ディスクを本体の仮想ディスクとマージする必要があります。仮想ディスクのマージは、以下の手順で行ってください。

1. 仮想マシンにスナップショットを作成する
2. 作成したスナップショットを削除する

上記の手順で、不要な差分ディスクが削除され、本体の仮想ディスクのみになります。

- ディスクのタイプを Thin から Thick に変更する際、以下のエラーが別ウィンドウで表示される場合がありますが、ウィンドウ上の [OK] を選択することで処理は続行され、タイプの変更は完了します。

「仮想マシン編集に失敗しました。一般的なシステムエラーが発生しました:Internal Error」

◆ 仮想マシンの再構成について

- Differential Clone で作成した仮想マシンの再構成で、マシンプロファイルのシステムディスクの情報は反映されません。スナップショットを採取している仮想マシンの場合も同様です。
- Disk Clone で作成した仮想マシンの再構成をする場合、操作対象の仮想マシンがある仮想マシンサーバが、レプリカがあるデータストアにアクセスできる必要があります。
アクセスできない場合は、操作が失敗します。

◆ VM 作成 (テンプレート) について

仮想マシンを作成する仮想マシンサーバに Full Clone テンプレートが使用しているネットワークと同名のネットワークが構築されていない場合、作成した仮想マシンのネットワークが切断状態になります。仮想マシン作成後に VM 編集を行い、作成された仮想マシンのネットワークを正しく設定してください。

UEFI ファームウェアを使用した仮想マシンで HW Profile Clone を行う場合は、仮想 NIC の種類を、E1000E 以外を使用するか、仮想 NIC の Wake On LAN の設定をオンにする必要があります。

固定 IP アドレスが設定されたテンプレートを利用して Windows Server 2008 以降の仮想マシンを作成すると、新規に作成された仮想マシンの仮想 NIC に複数の IP アドレスが割り当てることがあります。テンプレートの仮想 NIC は、DHCP 設定にしてください。

◆ 新規リソース割り当てについて

新規リソース割り当てを実行して仮想マシンを作成する場合、作成途中の仮想マシンを [仮想] ビューで表示すると仮想 NIC が切断した状態に見えますが、新規リソース割り当ての動作に影響はありません。仮想マシンの作成完了時に仮想 NIC はすべて接続状態になります。

◆ 仮想マシンのアカウントについて

仮想マシンのゲスト OS の認証情報を登録するには、ログイン可能なアカウントが必要になります。

登録されたアカウントは、ファイル配信、サービスの収集、サービスの起動確認に使用します。アカウントはマシンプロパティ設定の [アカウント情報]、ホストプロファイル設定のローカルアカウント設定で設定できます。

設定されたアカウントの優先順位は以下になります。

1. マシンプロパティ設定のアカウント情報
2. ローカルアカウント設定の [OS 操作] にチェックがあるアカウント
3. ローカルアカウント設定の [ビルトイン管理者] にチェックがあるアカウント

◆ サービスの収集について

Windows 10 以前の場合は、収集されたサービスの [起動の種類] の自動 (遅延開始)、自動 (トリガー開始) は収集できません。自動、または手動で表示されます。

サービスの収集するアカウントに Administrator 以外を設定している場合に収集できないサービスがあります。その場合は Administrator を使用するようにアカウントを設定してください。Windows の既定のサービスでは下記が該当します。

- Local Session Manager
- Home Group Listener
- Network Setup Service

◆ Virtual Volumes 上の仮想マシンについて

- スナップショットのある仮想マシンのエクスポートはサポートしていません。
- Differential Clone テンプレートを使用する場合は、テンプレート作成時に [レプリカ VM を指定した位置に固定する] チェックボックスはオフにしてください。

◆ 仮想 NIC の帯域制御について

仮想 NIC の帯域制御は、仮想 NIC に接続する分散ポートグループ上のポートに設定します。そのため、帯域制御の方向はポートに対応した方向を指定してください。

ssc コマンドで指定する type の in はポートの入力方向 (仮想マシンの出力方向)、out は、ポートの出力方向 (仮想マシンの入力方向) となります。

◆ VM コンソールについて

vSphere6.0 以降で VM コンソールの画面が Web コンソールの右ペインの範囲を越えて表示された場合は、ブラウザの画面をリサイズしてください。リサイズしたタイミングで VM コンソールの画面サイズが調節されます。

Xen の場合

◆ Xen の仮想マシンでは、Move は使用できません。

◆ SystemProvisioning の Migration (電源オン状態からの Migration) は、Citrix 社の XenMotion に該当します。

- ◆ Xen の仮想マシンのシャットダウンについて
Xen の仮想マシンは、リブート直後はシャットダウンが実行できない場合があります。その場合、しばらく待ってから実行してください。
- ◆ Xen 仮想マシンの電源操作について
SystemProvisioning から "VM 作成 (テンプレート)" により作成した Xen 仮想マシンには、必ず一度電源操作を行ってください。電源操作を行わないと、XenCenter で電源操作を行うことはできません。
- ◆ マシンプロファイルについて
Xen 環境では、CPU 情報の CPU 予約、CPU リミット、メモリ情報のメモリシェア、メモリ予約、メモリリミット、ディスク情報のタイプ、モードについて設定は不要です。マシンプロファイルに上記のパラメータの設定がある場合、そのパラメータは無視されます。
また、Xen 環境の最大仮想 NIC 数は 7 枚です。7 枚以上設定しても、仮想 NIC#8 以降の設定は無視されます。
- ◆ VM 編集について
 - CPU 予約、および CPU リミットは変更されません。
 - ディスクサイズを変更できません。ディスクサイズは、仮想マシンに拡張ディスクを追加する場合にのみ設定可能です。
 - 仮想 NIC を切断することはできません。
 - 仮想 NIC を 7 枚以上設定することはできません。
 - [既存ディスクを使用する] は、サポートしておりません。
- ◆ 仮想マシンの再構成について
CPU 情報の CPU 予約、CPU リミット、メモリ情報のメモリシェア、メモリ予約、メモリリミット、ディスク情報のタイプ、モードは変更されません。
ディスクサイズは、仮想マシンに拡張ディスクが追加される場合のみ有効となります。既に拡張ディスクが存在する場合は、ディスクサイズの変更はされません。
また、仮想 NIC は 7 枚以上設定することはできません。
- ◆ 仮想マシンの移動条件
 - 電源 ON 状態の仮想マシン移動の場合
XenMotion を利用する場合、移動元の仮想マシンサーバと、移動先の仮想マシンサーバが同じプールに含まれており、共有ディスクを利用している構成である必要があります。
詳細については Citrix 社の製品マニュアルを参照してください。
 - 電源 OFF 状態の仮想マシン移動の場合
仮想マシンの仮想マシンサーバ間の移動を使用する場合、仮想マシンサーバは同じプールに含まれている必要があります。また、その他にも、仮想マシンサーバの構成、仮想マシン構成などの条件を満たす必要があります。
詳細については Citrix 社の製品マニュアルを参照してください。

また、仮想マシンの移動後は、Web コンソール上と XenCenter で表示が一致しない場合がありますが、SigmaSystemCenter から仮想マシンを起動することで一致します。

◆ テンプレートからの仮想マシン複製について

Xen の Full Clone 用テンプレートから仮想マシンを作成する場合はテンプレートが格納されていないデータストアを選択できますが、テンプレートが格納されているデータストアを選択して下さい。

テンプレートが格納されていないデータストアを選択した場合は、複製に失敗します。詳細については Citrix 社のマニュアルを参照してください。

また、XenServer が持つデフォルトテンプレートを使用した場合は XenCenter から仮想マシンに対して手動で仮想ディスク、および仮想 NIC を作成してください。

◆ Xen の仮想マシンに "リソース割り当て" は実行できません。グループで稼働させる場合は、"マスタマシン登録"、または "新規リソース割り当て" で稼働させてください。

◆ 仮想マシン新規作成時の仮想 NIC の指定について

Xen の Full Clone 用のテンプレートで作成した仮想マシンの場合は、Web コンソールで設定した IP アドレスは反映されないため、仮想マシンへは IP アドレスを手動で設定してください。

◆ オペレーションの並列実行について

"新規リソース割り当て"、"テンプレート作成"、および "VM 作成 (テンプレート)" と他のオペレーションを並列で実行した場合に、タイムアウトで失敗する場合があります。これは Xen 側の後続の処理を待たせる動作によるものです。失敗した場合は処理を再度実行してください。

◆ 仮想ディスクの使用量表示について

LVM ベースのストレージ上の仮想マシンの場合、ディスク使用量はディスクサイズと等しく表示されます。

◆ 拡張ディスクのサイズについて

追加した拡張ディスクのサイズが、指定したサイズより大きくなる場合があります。

◆ VM 作成について

[手動で OS をインストールする] オプションは、Xen ではサポートしていません。

◆ 光学ドライブ管理について

Xen の仮想マシンではサポートしていません。

◆ 仮想マシンのインポートとエクスポートについて

Xen の仮想マシンのインポートとエクスポートは、サポートしていません。

Hyper-V の場合

- ◆ 仮想マシンがオンのときの Migration と電源オフのときの Migration は、それぞれ Hyper-V の Live Migration とノード間の VM 移動に相当します。
- ◆ Hyper-V 上の仮想マシンにリソースを割り当てる場合
作成するカテゴリの DPM サーバ、またはグループ、モデルのプロパティ設定の [全般] タブにある [DPM サーバ] テキストボックスを設定しておく必要があります。
また、HW Profile Clone を利用する場合は、作成するモデル、グループ、もしくはホストのいずれかプロパティ設定にある [ソフトウェア] タブに HW Profile Clone 用のテンプレートと Deployment Manager の OS 配信用のシナリオの登録が必須となります。
- ◆ マシンプロファイルについて
Hyper-V 環境の最大仮想 NIC 数は 8 枚です。8 枚以上設定しても、仮想 NIC#9 以降の設定は無視されます。
- ◆ VM 編集について
 - ・ 仮想 NIC を 9 枚以上設定することはできません。
 - ・ 仮想ディスクのサイズが 2TB 以上の場合、編集はできません (Windows Server 2012 以降の「.vhdx」の仮想ディスクは、仮想ディスクサイズの上限が 64TB になりました)。
- ◆ 仮想マシンをマスタマシン登録する場合
ネットワーク定義が、仮想マシンの NIC 数より多い場合、仮想マシンがオフの状態でマスタマシン登録を行ってください。
- ◆ データストアブラウザについて
Hyper-V のデータストアブラウザでは、以下の動作をします。
 - ・ 仮想マシンに関連したファイルのみを表示します。その他のファイルは表示されません。
 - ・ システムドライブは、以下のディレクトリのみ参照できます。
 - 仮想マシンの既定のフォルダ
 - 仮想ハードディスクの既定のフォルダ
 - VM 作成先として指定したフォルダ
 - ISO フォルダ
- ◆ 仮想マシンの移動について
Migration で仮想マシンを移動できる範囲は、同じデータセンタ内となります。
Hyper-V クラスタの Storage Migration を使用すると、仮想マシンを他のデータセンタへ移動できます。

Windows のフェールオーバー クラスタリング機能によりクラスタ化された仮想マシンを CSV からローカルディスクにストレージマイグレーションすると、フェールオーバーができなくなります。

◆ 仮想ディスクのフォーマットについて

Windows Server 2012 で、SigmaSystemCenter から仮想ディスクファイルを作成する場合、VHDX 形式が選択されます。

◆ 既存ディスクの接続について

Hyper-V 仮想マシンに対する既存ディスクの接続で、共有仮想ディスクは仮想マシンの拡張ディスクとしてのみ使用できます。システムディスクとして使用できません。

システムディスクとして使用した場合、以下の問題が発生する可能性があります。

- システムディスクが複数の仮想マシンで共有される場合、仮想マシンの起動に影響を与えます。
- 仮想ディスクはシステムディスク、拡張ディスクとして、同時に共有される場合、SigmaSystemCenter でディスクタイプ (Sys・Ext) を分けられません。
そのため、システムディスクは共有しないでください。
- 差分ディスクを拡張ディスクに接続することはサポートしていません。

◆ 仮想マシンのアカウントについて

仮想マシンのゲスト OS の認証情報を登録するには、ログイン可能なアカウントが必要になります。

登録されたアカウントは、サービスの収集、サービスの起動確認に使用します。アカウントはマシンプロパティ設定の [アカウント情報]、ホストプロファイル設定のローカルアカウント設定で設定できます。

設定されたアカウントの優先順位は以下になります。

1. マシンプロパティ設定のアカウント情報のタイプが "IB" のアカウント
2. ローカルアカウント設定の [ビルトイン管理者] にチェックがあるアカウント

◆ サービスの収集について

Windows 10 以前の場合は、収集されたサービスの [起動の種類] の自動 (遅延開始)、自動 (トリガ開始) は収集できません。自動、または手動で表示されます。

KVM の場合

- ◆ Red Hat Enterprise Linux 7.2 では、異なるタイプのストレージプール間におけるディスク複製をサポートしません。仮想マシンの作成、テンプレート作成、VM クローンなどのディスク複製を含む操作では、複製元のディスクがあるストレージプールと同じタイプのストレージプールを作成先として選択してください。

- ◆ Differential Clone で作成した仮想マシンに対して VM クローンを実行する場合、クローン先データストアとして LVM タイプのストレージプールをサポートしません。

SigmaSystemCenter 3.5 リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編

- ◆ Red Hat Enterprise Linux 7.2 では、仮想マシンが電源オンの場合、仮想ディスクの切断、削除をサポートしません。

1.2.8. 仮想マシンの拡張ディスクについて

仮想環境全般

- ◆ SigmaSystemCenter がシステムディスクと認識するコントローラとディスク番号に拡張するディスクを追加することはできません。
 - VMware 環境では IDE0:0/SCSI0:0/SATA0:0
 - Xen 環境では SCSI0:0
 - Hyper-V 環境では IDE0:0 *1

*1 Windows Server 2012 R2 の Generation 2 の仮想マシンにおいて、システムディスクは接続位置と関係がありません。ブートオーダー 1 番上の仮想ディスクは、システムディスクとして認識されています。

- ◆ コントローラとディスク番号の一覧について
 マシンプロファイル画面や VM 編集画面に表示されるコントローラとディスク番号の一覧に拡張ディスクを追加することができます。
 ただし、拡張ディスク以外に NIC や CD ドライブなど他のデバイスが使用している場合があるため、すべてのコントローラとディスク番号に拡張ディスクを追加することはできません。

VMware の場合

- ◆ コントローラとディスク番号について
 - コントローラは、IDE0 / IDE1、SCSI0 / SCSI1 / SCSI2 / SCSI3、および SATA0 / SATA1 / SATA2 / SATA3 をサポートしています。
 - ハードウェアバージョンが 4 の仮想マシンでは、IDE0 / IDE1 コントローラに仮想ディスクを追加することはできません。
 - IDE0:0 にデバイスがない場合に、IDE0:1 にデバイスを追加すると仮想マシンが起動できなくなります。また、IDE1:0 にデバイスがない場合に IDE1:1 にデバイスを追加すると仮想マシンが起動できなくなります。
 - 同じコントローラとディスク番号に対して同時に追加 / 削除はできません。削除を実行した後で、追加を実行してください。
- ◆ 「VM 編集」ウィンドウの表示順について
 拡張ディスクは、IDE0 / IDE1、SATA0 / SATA1 / SATA2 / SATA3、SCSI0 / SCSI1 / SCSI2 / SCSI3 の順でディスク番号が小さい順に表示されます。

Xen の場合

- ◆ コントローラとディスク番号について
 - コントローラは、SCSI0 のみをサポートしています。
 - SCSI0:3 には、CD ドライブがあるため、仮想ディスクを追加することはできません。CD ドライブがあるディスク番号を調べるには、XenServer のコンソールで以下のコマンドを実行してください。

```
xe vm-cd-list vm=VM 名
```

Hyper-V の場合

- ◆ コントローラとディスク番号について
 - コントローラは、IDE0 / IDE1、および SCSI0 / SCSI1 / SCSI2 / SCSI3 をサポートしています。
 - SCSI コントローラの番号は、SigmaSystemCenter 側で便宜的に番号が割り振られます。SCSI コントローラを削除した場合、番号の振り直しが発生する場合がありますので、削除しないようにしてください。
 - DVDドライブの位置には、仮想ディスクを追加することはできません。DVDドライブは、通常 IDE1-0 の位置にあります。
 - コントローラを自動選択にして拡張ディスクを追加すると、仮想 SCSI ディスクとして追加されます。
 - Windows Server 2012 R2 の Generation 2 の仮想マシンにおいて、IDE コントローラが廃止されたため、仮想ディスクと DVD ドライブはすべて SCSI コントローラに接続します。SigmaSystemCenter のマシンプロファイル画面で IDE コントローラに接続する仮想ディスクは、仮想マシンを作成するときに無視されます。

1.2.9. Raw Device Mapping (RDM) について

仮想環境全般

- ◆ RDM 関連機能は、以下の環境でサポートしています。
 - VMware ESX 4.1 以降
 - Hyper-V
- ◆ RDM 用の LUN について

同じ LUN を仮想マネージャ (vCenter Server、Hyper-V Cluster) を超えて共有しないでください。

LUN が正常に収集されないため、RDM 関連機能が正常に機能しません。

◆ LUN のサイズについて

「VM 編集」ウィンドウでは、10GB 未満の LUN を仮想マシンに追加することができますが、マシンプロファイルではサイズが 10GB 未満（既定）の LUN は操作対象になりません。

VMware の場合

◆ 物理互換の RDM 仮想ディスクについて

物理互換の RDM 仮想ディスクは独立型にできません。

◆ NAS 上に作成した仮想マシンについて

NAS 上に作成した仮想マシンに RDM の仮想ディスクを追加する場合は、仮想マシンがある仮想マシンサーバがアクセス可能な VMFS データストアに "rdmmap" タグを設定してください。":rdmmap" を設定することで、RDM マッピングファイルを配置するデータストアを指定できます。

◆ 共有 RDM ディスクの切断について

vSphere 5.1 以降の環境では、RDM ディスクに対して release diskvolume コマンドを実行した場合、scan diskvolume、または収集を実行して他の ESXi が認識する RDM ディスク情報を更新するまで、他の ESXi ホストからこの RDM ディスクを利用することができません。

Hyper-V の場合

◆ RDM 用の LUN について

クラスタ環境において、RDM 用の LUN として使用できるのは、クラスタに登録されたディスクで、ドライブレターを割り当てていないディスクのみになります。また、CSV ディスクについては、除外されます。

◆ Differential Clone のテンプレートについて

RDM が接続された仮想マシンは、スナップショットが作成できないため、Differential Clone のマスタにすることができません。

1.2.10. 仮想マシンのインポートとエクスポートについて

仮想環境全般

◆ インポートとエクスポートについて

Web コンソールから仮想マシンのインポートとエクスポートを実行する場合は、ファイル転送アプリケーションが管理サーバの一時フォルダにファイルを保存して、連携製品と

ファイルの転送を行います。管理サーバの一時フォルダの既定値は「%TEMP%」です。変更する場合は、ssc コマンドを使用してください。

ssc update environment TempWorkingDir 一時フォルダの絶対パス

ssc コマンドで仮想マシンのインポートとエクスポートを実行する場合は、直接、連携製品とファイルの転送を行います。管理サーバの一時フォルダは使用しません。管理サーバ上にインポートとエクスポートを行う場合は、ssc コマンドで行うことを推奨します。

◆ ファイル転送アプリケーションについて

Web コンソールから仮想マシンのインポートとエクスポートを行う場合は、ファイル転送アプリケーションを使用します。ファイル転送アプリケーションを使用するには、Internet Explorer の [インターネットオプション] の [セキュリティ] タブで、SystemProvisioning の Web コンソールのサイトがローカルイントラネットに含まれている必要があります。

◆ OVF ファイルのインポートについて

OVF ファイルが 4MB 以上の場合は、インポートできません。

Internet Explorer 9 以前で OVF ファイルをインポートするには、Internet Explorer の [インターネットオプション] の [セキュリティ] タブで SystemProvisioning の Web コンソールのサイトが、ローカルイントラネットに含まれていて、[レベルのカスタマイズ] で [ActiveX コントロールとプラグイン] - [スクリプトを実行しても安全だとマークされない ActiveX コントロールの初期化とスクリプトの実行] を有効に設定する必要があります。

OVF ファイル内に指定された CPU / メモリのシェア値は無視されます。シェア値を変更する場合は、インポート時にシェア値を指定するか、インポート後に VM 編集を行ってください。OVF ファイルは、バージョン 1.0 以降をサポートしています。

◆ エクスポートされるファイルの名前について

エクスポートされるファイルの名前は指定できません。エクスポート先のフォルダに同じ名前のファイルが存在する場合は、エクスポートに失敗するため、エクスポート先のフォルダの指定は、空のフォルダを指定することを推奨します。

◆ [ポータル] ビューと [運用] ビューの操作について

異なる製品の仮想化基盤を混在して管理されているグループに対して仮想マシンをインポートするには、仮想マシンサーバを選択する必要があります。

上記の環境では、[ポータル] ビューのインポートは未サポート、[運用] ビューからインポートする場合は、仮想マシンサーバを指定してください。

VMware の場合

◆ エクスポートされるファイルについて

SystemProvisioning で仮想マシンをエクスポートした場合は、OVF ファイルと仮想ディスクがエクスポートされます。マニフェストファイルやチェックサムファイルは、エクスポートされません。

- ◆ インポートされるファイルについて
仮想マシンが 1 つのみ含まれている OVF / OVA をサポートしています。WebUI からインポートを実行する場合は、1 つの仮想ディスクが複数に分割されている場合や OVF ファイルと仮想ディスクが別のフォルダに保存されている場合は、サポートしておりません。
 - ◆ スタンドアロン ESXi 環境のインポートについて
スタンドアロン ESXi 環境からの新規リソース割り当てでインポートを行う場合は、ホスト名と IP アドレスの設定反映待ちでタイムアウトが発生します。
 - ◆ ディスクタイプについて
仮想マシンをインポートする場合に、ディスクタイプを指定しても反映されません。仮想マシンのインポートは、"Thin" で行われます。"Thick" に変更する場合は、インポート後に VM 編集から行ってください。
 - ◆ PVM サービス側の作業領域について
仮想マシンをエクスポートするときのエクスポート先や OVA でインポート / エクスポートするときの管理サーバに必要な作業領域は、対象のファイルよりも十分に大きな空き容量を確保してください。容量が不足している場合は、失敗する場合があります。
容量は最大で仮想マシンが使用している仮想ディスクのサイズの合計になります。
- 仮想マシンのインポート / エクスポートで 1 時間（既定値）以上が経ち、vCenter Server のタスク一覧に「OVF のデプロイ」、「OVF のエクスポート」がない場合は、操作が失敗しています。仮想マシンのインポート / エクスポートのジョブをキャンセルして、再度操作を行ってください。

Hyper-V の場合

- ◆ サポート対象の仮想マシン基盤について
Windows Server 2012、および Windows Server 2012 R2 で、本機能をサポートします。
- ◆ インポート / エクスポートのサポート形式について
システムディスクを仮想ディスクファイルとしてエクスポートする形式、および仮想ディスクファイルを仮想マシンのシステムディスクとしてインポートする形式のみをサポートします。
- ◆ デフォルト共有の有効化
インポート / エクスポート時の仮想ディスクファイルの転送に、Windows の管理用共有が使用されます。この機能を使用するために、ファイアウォールの設定で、「ファイルとプリンターの共有」を有効にしてください。

- ◆ 仮想マシンの電源状態について
仮想マシンの電源がオフの場合のみ、エクスポートが可能です。
Windows Server 2012 R2 以降は、電源オンの仮想マシンのエクスポートが可能です。
- ◆ 作業量のディスク容量について
Hyper-V 側のディスクに十分な作業用の空き容量がない場合、仮想ディスクのファイルのエクスポートは失敗する場合があります。
また、スナップショットがある仮想マシンのエクスポートで、ファイルのマージに失敗した場合、最初のスナップショット取得時のシステムファイルのエクスポートします。

1.2.11. テンプレートのインポートとエクスポートについて

仮想環境全般

- ◆ テンプレートのインポート / エクスポート機能は、以下の環境でサポートしています。
 - vCenter Server 5.5 以降
 - Hyper-V
- ◆ インポートとエクスポートについて
ssc コマンドでテンプレートのインポートとエクスポートを実行する場合は、zip ファイルを圧縮 / 解凍するため管理サーバの一時フォルダにファイルを保存して、連携製品とファイルの転送を行います。管理サーバの一時フォルダの既定値は「%TEMP%」です。変更する場合は、ssc コマンドを使用してください。


```
ssc update environment TempWorkingDir 一時フォルダの絶対パス
```
- ◆ エクスポートされるファイルの名前について
エクスポートされるファイルの名前は指定できません。エクスポート先のフォルダに同じ名前のファイルが存在する場合は、エクスポートに失敗するため、エクスポート先のフォルダの指定は、空のフォルダを指定することを推奨します。
- ◆ インポートされるテンプレートとイメージのテンプレート番号について
イメージ名 / レプリカ名に使用されるテンプレート番号は、インポート時にマスタ VM を指定するかどうかで使用される値が異なります。
 - マスタ VM を指定しない場合は、エクスポート時のテンプレートのテンプレート番号を引き継ぎます。
 - マスタ VM を指定する場合は、指定したマスタ VM から既に作成されたテンプレートに割り当てられている番号からの連番になります。

ただし、マスタ VM の VM 名が変更されている場合で正常にテンプレート番号が取得できないときは、テンプレート番号は 1 が使用されます。

◆ インポートされるイメージとレプリカの名前について

イメージとレプリカの名前に使用されるテンプレート番号とイメージ世代は、インポート先の環境で再割り当てが行われます。そのため、エクスポート元の環境と同じテンプレートとイメージであっても、イメージとレプリカは同じになりません。

同じ名前にする場合は、インポート時にイメージ世代の順にテンプレートをインポートしてください。

また、テンプレートとイメージが同じであるかは、下記の `ssc` コマンドを使用して "UniversalIdentifier" の値を確認してください。

```
ssc show software
ssc show image テンプレート名
```

◆ インポート時のマスタ VM について

インポート時にマスタ VM を指定しない場合は、テンプレートにマスタ VM がない状態になります。マスタ VM がない場合は、イメージ作成ができません。

インポートしたテンプレートにマスタ VM を設定する場合は、下記の `ssc` コマンドを実行してください。

```
ssc update template テンプレート名 -mastervm name=マスタVM 名
```

VMware の場合

◆ テンプレートのインポート / エクスポート機能は、以下のテンプレートでサポートしています。

- Full Clone テンプレート
- Differential Clone テンプレート

Hyper-V の場合

◆ テンプレートのインポート / エクスポート機能は、以下のテンプレートでサポートしています。

- Differential Clone テンプレート
- Disk Clone テンプレート

1.2.12. 仮想ネットワークの操作について

VMware の場合

- ◆ 仮想マシンサーバ削除
ESX が稼動中に分散スイッチに登録されている仮想マシンサーバを削除することはできません。ESX が応答できない状態で分散スイッチから削除すると、vCenter Server と ESX との情報の不一致が発生する場合があります。
- ◆ 仮想スイッチの構成変更について
仮想マシン、サービスコンソール / VMKernel がある仮想スイッチは、物理 NIC を 0 枚にする構成変更はできません。
- ◆ 仮想ポートグループの構成変更について
仮想ポートグループ名に 2 バイト文字は使用しないでください。
SigmaSystemCenter で作成する分散仮想スイッチ上のポートグループのポートバインド設定は静的バインドで作成されます。
- ◆ ネットワークについて
VLAN 定義が 1 個以外のネットワークを指定して構成変更 / 再構成を実行すると失敗します。
- ◆ スタンドアロンポートについて
SigmaSystemCenter では、スタンドアロンポートを制御できないため、分散仮想スイッチ上にスタンドアロンポートは作成しないでください。
- ◆ [仮想ネットワーク設定] タブの NIC 番号について
マシンプロパティ設定の [ネットワーク] タブに NIC 番号を設定していない場合は、VM サーバモデルにある [仮想ネットワーク設定] タブで設定する NIC 番号は、VMware ESX が認識する NIC の順番になります。
例えば、vmnic0 の NIC 番号は 1、vmnic1 の NIC 番号は 2 になります。
物理スイッチの制御を同時に行う場合、その NIC 番号に合わせてマシンプロパティの [ネットワーク] タブの NIC 設定を行ってください。
- ◆ ネットワーク帯域制御について
SigmaSystemCenter から設定可能な値は、以下になります。

0 < 平均バンド幅 < 9,000,000,000,000,000
0 < ピークバンド幅 < 9,000,000,000,000,000
0 < バーストサイズ < 9,007,199,254,740,991

Xen の場合

◆ 仮想ネットワークについて

Xen 環境では、SigmaSystemCenter から仮想ネットワークの作成、および変更はできません。

Hyper-V の場合

◆ 仮想スイッチの名前について

名前が指定されなかった場合、以下の形式で命名します。

VirtualNetwork# N (N は NIC の番号)

◆ ポートグループについて

Windows Server 2012 で Hyper-V Manager を用いて設定した VLAN ID について、その ID をベースにしたポートグループは、自動で生成されません。

◆ 仮想ポートグループの構成について

仮想ポートグループ名に 2 バイト文字は使用しないでください。

◆ 仮想ポートグループ名の設定について

Hyper-V を Windows Server 2008 から、Windows Server 2012 にアップグレードした場合、ポートグループ名の再設定が必要になります。

◆ データセンタ内の仮想スイッチについて

仮想マシンのマイグレーションや移動を適切に行う場合、データセンタ内で仮想スイッチの名前や構成を揃えておく必要があります。

1.2.13. 仮想マシンサーバの障害復旧後の切り戻しについて**VMware の場合**

ESXi の障害復旧において、仮想マシンの Failover が行われると、移動した仮想マシンが複数の ESXi に多重登録された状態になります。

下記の手順を行うことで ESXi に多重登録された仮想マシンを整理することができます。

◆ 事前確認

1. ESXi のアカウントとパスワードが設定されている。

2. 復旧させる ESXi が起動している。
3. 復旧させる ESXi と同じ DataCenter にある ESXi が接続状態になっている。

◆ 切り戻し手順

1. 下記コマンドを実行する。

なお、下記のコマンドは接続状態が "切断" 状態のスタンドアロン ESXi のみ有効です。

```
ssc recover machine ダウンしたESXi マシン名
```

◆ 注意事項

- 復旧させる ESXi と同じ DataCenter にある ESXi が、下記の状態の場合はその ESXi は処理対象から除かれます。
 - 接続状態が切断の場合
 - ネットワーク障害など接続できない場合
- また、復旧処理中に下記の状態になっている場合は処理が失敗する場合があります。
 - 復旧させる ESXi の接続状態が切断以外の場合
 - ネットワーク障害など、復旧させる ESXi に接続できない場合
 - 仮想マシンの電源操作が行われた場合
- 復旧処理の対象外になった ESXi がある場合、または復旧処理が失敗した場合は復旧処理を再実行するか、vSphere Client から多重登録されている仮想マシンを削除してください。

Xen の場合

◆ XenServer Pool Master の切り替え操作が行われた場合、以下の手順を行ってください。

- 切り替え完了後の現在の XenServer Pool Master が起動している状態で、Pool 内のすべての XenServer をいったん起動してください。行わない場合は XenServer Pool Master が Slave の起動を認識しない場合があります。
- XenServer Pool Master 切り替え終了後に、旧 XenServer Pool Master マシンの復旧作業を行う場合は、必ず現在の XenServer Pool Master が起動している状態で復旧作業を行ってください。また、復旧完了後は必ず XenServer Pool Master が起動している状態で、復旧したマシンの再起動を行ってください。再起動後は旧 XenServer Pool Master マシンは Slave として運用されます。

- XenServer Pool Master 切り替え後に、XenServer Pool Master をシャットダウンする場合は、いったん Pool 内のすべての XenServer を立ち上げた後、シャットダウンして下さい。

◆ 通信エラーから旧 XenServer Pool Master マシンが復旧した場合

通信エラーによって XenServer Pool Master の切り替え動作が実行され、その後に旧 XenServer Pool Master マシンが復旧した場合、仮想マシンが自動で移動する場合があります。仮想マシンの移動によって、SigmaSystemCenter の画面表示と不整合が発生した場合は収集を行って下さい。

◆ XenServer Pool Master 障害発生時に起動中であった仮想マシンについて

XenServer Pool Master 障害発生時に起動中であった仮想マシンは、起動が完了しない場合があります。この場合は、XenCenter から仮想マシンの強制シャットダウンを行った後、再度起動を行ってください。

◆ XenServer Pool Master 障害発生時に作成中であった仮想マシンについて

XenServer Pool Master 故障発生時に、作成途中であった仮想マシンは作成されません。また、ストレージに未使用のディスクが残る可能性があります。XenCenter からそのディスクを削除する場合に、そのディスクが削除出来ない場合は以下の手順を行ってください。

- ディスク削除時にエラーが発生する場合は、現在の Master の再起動後に再度実行してください。
- エラーは発生しないがディスクが削除できない場合は、xe コマンド vdi-forget を使用してください。

◆ データストアの使用量について

XenServer Pool Master 切り替え操作後にデータストアの使用量が正しく表示されない場合があります。その場合は各ストレージが接続可能な状態で、xe コマンド sr-scan を XenServer Pool Master のコンソールから対象のデータストアに対して実行、または XenServer からデータストアの Rescanを行った後、SystemProvisioning から収集を実行すると、正しく表示されるようになります。

xe コマンドの詳細については Citrix 社の製品マニュアルを参照してください。

◆ XenServer Pool Master 切り替え後の Pool 構成について

XenServer Pool Master 切り替え完了後は新しい XenServer Pool Master が認識している Pool 構成となります。そのため Pool 構成が XenServer Pool Master 切り替え発生以前の構成に巻き戻る可能性があります。

Hyper-V の場合

- ◆ 複数登録状態について

Hyper-V スタンドアロン（単体）環境において、仮想マシンの Failover が行われると、移動した稼動マシンが複数の Hyper-V に多重登録された状態になります。その多重登録された Hyper-V が複数起動していると、仮想マシンの動作が不安定になります。

そのため、障害元の Hyper-V を復旧させたら、速やかに切り戻し作業を行い、多重登録状態を解消してください。

1.2.14. エラーについて

VMware の場合

- ◆ 仮想マシンの IP アドレス反映エラーについて

VMware の場合、仮想マシン作成時に、運用ログに以下のメッセージが出力された場合は、指定した IP アドレスが正しく反映されていない可能性があります。

この場合、仮想マシンのゲスト OS 上で、正しい IP アドレスを再設定してください。

IP アドレスの設定待ちがタイムアウトしました。

IP アドレスの設定待ちが失敗しました。

- ◆ リモート環境における仮想マシン操作時のエラーについて

vCenter Server が SigmaSystemCenter 管理サーバとは別のサーバにインストールされている場合、または ESXi を管理する場合、以下のエラーが運用ログに表示され、仮想マシンの操作に失敗することがあります。

「理由：操作がタイムアウトしました。」

「理由：RetrieveProperties() failed」

この場合、仮想マシンの操作を再度実行してください。

- ◆ スタンドアロン ESXi 環境における仮想マシン作成時のエラーについて

スタンドアロン ESXi 環境で、ファイルロックエラーが発生し、Differential Clone タイプの仮想マシンの作成に失敗することがあります。

この場合、イメージ（マスタレプリカ VM）を参照している仮想マシンの電源をすべてオフにするか、仮想マシンの作成先をマスタレプリカ VM が所属する ESXi を選択して、仮想マシンの作成を再度実行してください。

- ◆ 仮想マシンのインポートとエクスポート時のエラーについて

仮想マシンのインポート / エクスポートが以下の内容を含むエラーメッセージで異常終了した場合は、ESX とのファイルの転送に失敗しています。

ESX とのネットワークに問題がないことを確認して、再度、操作を行ってください。

SigmaSystemCenter 3.5 リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編

「転送接続にデータを書き込めません: (エラー内容)」

「転送接続からデータを読み取れません: (エラー内容)」

Hyper-V の場合

- ◆ 仮想マシンを大量に起動すると、一部のハートビートが上がらない件について
サービスのタイムアウト値の延長でも回避できない場合、エラーになった仮想マシンを個別に再起動するか、仮想マシン内のハートビートサービスを起動してください。

KVM の場合

- ◆ 仮想マシン削除のエラーについて
Red Hat Enterprise Linux 7.2 では、仮想マシンの削除がエラーになることがあります。仮想マシンが停止していることを確認後、対象仮想マシンが動いている仮想マシンサーバの収集を実行してから、再度仮想マシンの削除を実行してください。

1.2.15. ポリシーについて

VMware の場合

- ◆ 標準ポリシー（仮想マシン）では、VMware (vCenter Server) の環境上の仮想マシンについて、下記のイベントに対して、固定でポリシーアクションの実行抑制が動作するようになっています。抑制の待機時間は 180 秒です。抑制機能の無効化や、待機時間の変更を行うことはできません。
仮想マシンの場合、仮想マシンサーバの負荷などの他の影響を受け、状況の変化が発生しやすいことを想定して、障害のイベント以外に回復のイベントも対象となっています。
 - マシンアクセス回復
 - CPU 高負荷回復
 - メモリ不足
 - メモリ不足回復

1.2.16. その他の注意事項

仮想環境全般

◆ VM 最適起動 / 最適配置のメモリ使用量による判定の設定について

VM 最適起動 / 最適配置機能では、メモリ使用量による判定の有無、およびその判定閾値を、レジストリを利用して変更することが可能です。

通常、最適起動 / 最適配置機能は仮想マシンサーバのメモリ使用量が、メモリ搭載量を超過しないように仮想マシンの移動を行います。

しかし、一部の仮想化基盤では、仮想マシンサーバのメモリ搭載量を超過して、仮想マシンを移動可能なものがあります。また、仮想マシンサーバのメモリ搭載量をすべて利用せず、余裕を持たせた運用が期待される場合があります。

このような場合に、移動先のメモリ使用量が、搭載量に対してどの程度の割合まで利用するかを指定することが可能となっています。

設定は、以下のレジストリ値を利用して行います。

- VMware の場合

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥
Provider¥VM¥VMware

値名 (型): MemoryOverCommitRatio (REG_SZ)

デフォルト値: 1.0

- Xen の場合

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥
Provider¥VM¥Xen

値名 (型): MemoryOverCommitRatio (REG_SZ)

デフォルト値: 1.0

- Hyper-V の場合

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥
Provider¥VM¥HyperV

値名 (型): MemoryOverCommitRatio (REG_SZ)

デフォルト値: 1.0

VM 最適起動 / 最適配置では、レジストリの値とメモリ搭載量の積を、メモリ使用量の上限値と判断して移動を行います。メモリ使用量の上限値を変更する場合、上記レジストリに値を 0.0 から 2.0 の範囲で設定し、判定を無効にする場合は-1.0 を設定してください。

なお、Xen、および Hyper-V 環境では、メモリ搭載量を超えて仮想マシンを移動 / 起動することはできません。これらの環境では、1.0 を超える値を設定しないでください。

◆ VM 配置情報機能における VM 配置制約について

配置情報適用 (ssc vmop apply-position) コマンドでは、VM 配置制約機能による制約を考慮しません。このため、配置情報が設定された仮想マシンが配置制約に従って稼動している場合、配置情報を適用した結果、制約に違反する移動が行われる可能性があります。

VM 配置制約を違反しないように運用させる場合は、配置情報を設定する際に制約違反とならないように注意してください。

◆ リソースプールの Web コンソール表示上の使用率とリソースプール監視によるイベントのメッセージ内の使用率が異なる場合があります。

リソースプールの Web コンソール表示とリソースプール監視のイベントメッセージ内の使用率の間には 1% の差異が生じる場合があります。このため、WebUI 上は閾値に達しているように表示されていても、通報が実施されない場合があります。

◆ 仮想マシンで RDM を使用する場合

RDM として利用している仮想マシンをテンプレート化して複製した場合、RDM は解除されます。RDM 上のデータはコピーされ、データストア (VMFS) 上に仮想ディスクとして作成されます。Hyper-V の場合、RDM を利用している仮想マシンをテンプレート化する際に、仮想ディスクを作成していますが、RDM 内部のデータはコピーされません。

VMware の場合

◆ マシンプロファイルに設定するメモリサイズ

マシンプロファイルに設定するメモリサイズは、ESX のメモリ容量より小さくしてください。

◆ イベントによるデータベースの自動更新

仮想マシンの電源状態の変化や所属する VMware ESX の変更があった場合に vCenter Server から SigmaSystemCenter にイベントが通知されます。

SigmaSystemCenter は、イベントを受け取った場合に仮想マシンの最新の状態をデータベースに反映します。

この機能を無効にするには、以下のレジストリを "1" に変更して PVM サービスを再起動してください。

VMware HA や VMware FT、VMware DRS 機能を有効にしている場合は、この機能を無効にしないでください。この機能を無効にした場合は、VMware HA や VMware FT、

VMware DRS によって vCenter Server で行われた構成の変更が SigmaSystemCenter のデータベースに自動的に反映が行われません。

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥Provider¥
VM¥VMware¥Event

値名 (型): DisableAsyncAction (REG_DWORD)

デフォルト値: 0

◆ 管理中の仮想マシンサーバを ESXi へアップグレードする場合

ESXi には DPM クライアントがインストールできないため、インストール済みのソフトウェア情報の取得など、DeploymentManager の一部の機能が利用できなくなります。機能の詳細については、「DeploymentManager ファーストステップガイド」の「付録 A 機能対応表」を参照してください。

そのため、[リソース] ビューのマシンの詳細情報にて表示されるインストール済みのソフトウェアが更新されず、古い情報が残ります。下記コマンドを実行して削除してください。その後、マシン収集を実行し、インストール済みソフトウェアが削除されていることを確認してください。

```
ssc dpminformation delete
```

◆ ESX の削除、再登録は行わないでください。

ESX 上に RDM 設定された仮想マシンが存在する状態で、ESX の削除、再登録を行うと、仮想マシンの UUID が変更され、SigmaSystemCenter の [運用] ビューから操作できなくなります。メンテナンスなどでやむを得ずこの操作が必要となった場合は、ESX 上の仮想マシンを別のホストに移動し、仮想マシンが存在していない状態で実施してください。

本操作を行った場合の回避手順は以下となります。

1. SigmaSystemCenter から全収集実行
2. [運用] ビューから仮想マシンの割り当て解除
3. [運用] ビューから仮想マシンのマスタマシン登録

◆ 仮想マシンを作成する際には、以下のデバイスを選択してください。

- VMware ESX 4.0 / 4.1、および VMware ESXi 4.0 / 4.1 の場合
 - NIC
 - E1000
 - フレキシブル
 - Storage
 - SCSI BusLogic パラレル

- SCSI LSI Logic パラレル
 - SCSI LSI Logic SAS
 - IDE
 - CD/DVD
 - IDE
 - VMware ESXi 5.0 / 5.1 の場合
 - NIC
 - E1000
 - E1000E
 - フレキシブル
 - Storage
 - SCSI BusLogic パラレル

本デバイスを使用する場合は、仮想マシンのメモリは 3GB 以下に設定してください。

 - SCSI LSI Logic パラレル
 - SCSI LSI Logic SAS
 - IDE - CD/DVD
 - IDE
- VMware ESXi 5.5 / 6.0 の場合
 - NIC
 - E1000
 - E1000E
 - フレキシブル
 - VMXNET3
 - Storage
 - SCSI BusLogic パラレル

本デバイスを使用する場合は、仮想マシンのメモリは 3GB 以下に設定してください。

 - SCSI LSI Logic パラレル
 - SCSI LSI Logic SAS
 - VMware 準仮想化
 - IDE- CD/DVD
 - IDE
- VMware ESXi 6.5 の場合
 - NIC
 - E1000

- E1000E
- フレキシブル
- VMXNET3
- PVRDMA
- Storage
 - SCSI BusLogic パラレル
- CD/DVD
 - IDE

本デバイスを使用する場合は、仮想マシンのメモリは 3GB 以下に設定してください。

- SCSI LSI Logic パラレル
- SCSI LSI Logic SAS
- VMware 準仮想化

◆ VMware ESXi 4 / 5 をインストールしたマシンの PET を受信する場合

VMware ESXi 4、または VMware ESXi 5 環境において、ESXi 4 / 5 から行われる EXPRESSSCOPE エンジンへの IPMI アクセスが競合することにより、EXPRESSSCOPE エンジンからの SNMP 通報 (PET (Platform Event Trap) フォーマットに従った SNMP Trap 通報) が行われない場合があります。

回避手順については、以下を参照してください。

<https://www.support.nec.co.jp/View.aspx?id=3140101627>

Xen の場合

◆ 作成された仮想マシンへの NIC の追加

作成された仮想マシンに、XenCenter から NIC を追加しないでください。DeploymentManager からのシナリオ配布に失敗する可能性があります。

Hyper-V の場合

◆ Hyper-V を使用する場合の注意事項 (Hyper-V)

Hyper-V Manager で仮想マシンの [エクスポート] と [インポート] を行くと、元の仮想マシンとインポートした仮想マシンの UUID が同一となります。

そのため、SystemProvisioning では、それらを区別して管理することはできません。

仮想マシンの複製のために Hyper-V Manager の [エクスポート] と [インポート] は、使用しないでください。

◆ 削除した仮想マシンが残る場合の対処について

Hyper-V Manager で、仮想マシンを削除した場合、SigmaSystemCenter にその仮想マシンが存在し続ける場合があります。その場合、すべての仮想マシンサーバをオンの状態にして、[仮想] ビューの直下のマネージャ (Hyper-V 単体の場合は、Hyper-V クラスタ環境の場合は、それぞれのクラスタのマネージャ) で収集を行ってください。クラスタ環境の場合、仮想マシン構成がオフラインの仮想マシンがない状態で行ってください。

1.3. NetvisorPro を使用する場合の注意事項

1.3.1. スイッチ装置に対する操作について

スイッチ装置に対して直接 VLAN の追加、および削除を行った場合、SigmaSystemCenter には反映されません。

スイッチ装置の VLAN の追加、および削除は、SigmaSystemCenter から行ってください。

1.3.2. VLAN とポートの関連付け、または VLAN とポートの関連付け解除に失敗した場合の復旧手順

VLAN とポートの関連付け、または VLAN とポートの関連付けの解除に失敗した場合は、以下の手順で復旧できます。手順は、Brocade 製品 FastIron Edge X シリーズのスイッチをご利用の場合と、その他のスイッチをご利用の場合で異なります。ご利用のスイッチ、および操作が失敗したタイミングに応じて、復旧手順を実行してください。

以下の場合の復旧手順について、記載します。

Brocade 製品 FastIron Edge X シリーズのスイッチをご利用の場合

- ◆ リソース割り当て実行時に、VLAN とポートの関連付けに失敗した場合
- ◆ 割り当て解除実行時に、VLAN とポートの関連付け解除に失敗した場合
- ◆ VLAN 編集実行時に、VLAN とポートの関連付けに失敗した場合
- ◆ VLAN 編集実行時に、VLAN とポートの関連付け解除に失敗した場合

Brocade 製品 FastIron Edge X シリーズ以外のスイッチをご利用の場合

- ◆ リソース割り当て実行時に VLAN とポートの関連付けに失敗した場合
- ◆ 割り当て解除実行時、VLAN とポートの関連付け解除に失敗した場合
- ◆ VLAN 編集実行時、VLAN とポートの関連付けに失敗した場合
- ◆ VLAN 編集実行時、VLAN とポートの関連付け解除に失敗した場合

[Brocade 製品 FastIron Edge X シリーズのスイッチをご利用の場合]

注: telnet でスイッチに接続する場合は、ご利用の装置の製品マニュアルを参照してください。

- ◆ リソース割り当て実行時に、VLAN とポートの関連付けに失敗した場合

1. 失敗原因を運用ログにて確認し、失敗要因を取り除きます。
2. telnet を使用して、スイッチへログインします。

SigmaSystemCenter 3.5 リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編

3. VLAN の状態を参照するコマンド (例: show running-config) を実行し、VLAN の状態を確認します。
4. [運用] ビューのグループプロパティ設定の [ネットワーク設定] タブで設定されている VLAN と、[リソース] ビューのマシンプロパティ設定の [ネットワーク] タブで設定されているポートの関連付けを確認し、telnet 上に表示される VLAN と状態を比較します。
 - VLAN が作成されていない場合
手順 5 以降を実施してください。
VLAN に関連付けるポートが正しい場合
手順 5 以降を実施してください。
 - VLAN に関連付けるポートが存在しない場合
手順 5 以降を実施してください。
 - VLAN に関連付けるポートが異なる場合
装置側の設定を SigmaSystemCenter 上の設定に合わせる必要があります。
以下の手順を実行してください。
 1. 装置の VLAN 設定コマンド (例: no vlan vlanID) で、VLAN をいったん削除します。
 2. 装置の VLAN 設定コマンド (例: vlan vlanID) で、削除した VLAN を追加します。
 3. 装置の VLAN 設定コマンド (例: untagged ethe portID) で、VLAN とポートを関連付けます。

例)

各設定の状態が以下である場合

- グループプロパティ設定の [ネットワーク設定] タブで設定されている VLAN:
VLAN ID 10 / NIC: 2
- マシンプロパティ設定の [ネットワーク] タブで設定されているポート:
NIC:2 / ポート 3
- 装置上に設定されている VLAN の状態:
VLAN10 にポート 4 が関連付いている

この場合、装置上で VLAN10 をいったん削除し、VLAN10 を再度作成してから、ポート 3 を VLAN10 に関連付けます。

※ポート 4 が他のマシンと関連付いている場合は、合わせてポート 4 を VLAN10 に関連付ける必要があります。

5. 運用グループの詳細情報の [ホストー覧] グループボックスからいったん割り当て解除を実行します。
6. 運用グループの詳細情報の [ホストー覧] グループボックスから再度リソース割り当てを実行します。

◆ 割り当て解除実行時に、VLAN とポートの関連付け解除に失敗した場合

1. 失敗原因を運用ログにて確認し、失敗要因を取り除きます。
2. telnet を使用して、スイッチへログインします。
3. VLAN の状態を参照するコマンド (例: show running-config) を実行し、VLAN の状態を確認します。
4. [運用] ビューのグループプロパティ設定の [ネットワーク設定] タブで設定されている VLAN と、[リソース] ビューのマシンプロパティ設定の [ネットワーク] タブで設定されているポートの関連付けを確認し、telnet 上に表示される VLAN と状態を比較します。

- VLAN が作成されていない場合
手順 5 を実施してください。
- VLAN に関連付けるポートが正しい場合
手順 5 を実施してください。
- VLAN に関連付けるポートが存在しない場合
手順 5 を実施してください。
- VLAN に関連付けるポートが異なる場合
装置側の設定を SigmaSystemCenter 上の設定に合わせる必要があります。
以下の手順を実行してください。

1. 装置の VLAN 設定コマンド (例: no vlan vlanID) で、VLAN をいったん削除します。
2. 装置の VLAN 設定コマンド (例: vlan vlanID) で、削除した VLAN を追加します。
3. 装置の VLAN 設定コマンド (例: untagged ethe portID) で、VLAN とポートを関連付けます。

例)

各設定の状態が以下である場合

- グループプロパティ設定の [ネットワーク設定] タブで設定されている VLAN:
VLAN ID 10 / NIC: 2
- マシンプロパティ設定の [ネットワーク] タブで設定されているポート:
NIC:2 / ポート 3
- 装置上に設定されている VLAN の状態:
VLAN 10 にポート 4 が関連付いている

この場合、装置上で VLAN10 をいったん削除し、VLAN10 を再度作成してから、ポート 3 を VLAN10 に関連付けます。

※ポート 4 が他のマシンと関連付いている場合は、合わせてポート 4 を VLAN10 に関連付ける必要があります。

5. 運用グループの詳細情報の [ホストー覧] グループボックスから割り当て解除を実行します。

◆ VLAN 編集実行時に、VLAN とポートの関連付けに失敗した場合

1. 失敗原因を運用ログにて確認し、失敗要因を取り除きます。
2. telnet を使用して、スイッチへログインします。
3. VLAN の状態を参照するコマンド (例: show running-config) を実行し、VLAN の状態を確認します。
4. [システムリソース] ツリーから対象のスイッチのアイコンをクリックし、表示される [ポート一覧] グループボックスを確認し、telnet 上に表示される VLAN と状態を比較します。
 - VLAN が作成されていない場合
手順 5 を実施してください。
 - VLAN に関連付けるポートが正しい場合
手順 5 を実施してください。
 - VLAN に関連付けるポートが存在しない場合
手順 5 を実施してください。
 - VLAN に関連付けるポートが異なる場合
装置側の設定を SigmaSystemCenter 上の設定に合わせる必要があります。
以下の手順を実行してください。
 1. 装置の VLAN 設定コマンド (例: no vlan vlanID) で、VLAN をいったん削除します。
 2. 装置の VLAN 設定コマンド (例: vlan vlanID) で、削除した VLAN を追加します。

例)

各設定の状態が以下である場合

- VLAN10 の詳細情報の [ポート一覧] グループボックス:
対象のポート割り当てなし
- 装置上に設定されている VLAN の状態:
VLAN10 にポート 4 が関連付いている

この場合、装置上で VLAN10 をいったん削除してから、VLAN10 を再度作成します。

※ポート 4 が他のマシンと関連付いている場合は、合わせて装置の VLAN 設定コマンド (例: untagged ethe portID) で、ポート 4 を VLAN10 に関連付けてください。

5. スイッチの詳細情報から VLAN 編集を実行し、VLAN とポートを関連付けます。

◆ VLAN 編集実行時に、VLAN とポートの関連付け解除に失敗した場合

1. 失敗原因を運用ログにて確認し、失敗要因を取り除きます。
2. telnet を使用して、スイッチへログインします。
3. VLAN の状態を参照するコマンド (例: show running-config) を実行し、VLAN の状態を確認します。
4. [システムリソース] ツリーから対象のスイッチのアイコンをクリックし、表示される [ポート一覧] グループボックスを確認し、telnet 上に表示される VLAN と状態を比較します。

- VLAN が作成されていない場合
手順 5 を実施してください。
- VLAN に関連付けるポートが正しい場合
手順 5 を実施してください。
- VLAN に関連付けるポートが存在しない場合
手順 5 を実施してください。
- VLAN に関連付けるポートが異なる場合
装置側の設定を SigmaSystemCenter 上の設定に合わせる必要があります。
以下の手順を実行してください。

1. 装置の VLAN 設定コマンド (例: no vlan vlanID) で、VLAN をいったん削除します。
2. 装置の VLAN 設定コマンド (例: vlan vlanID) で、削除した VLAN を追加します。
3. 装置の VLAN 設定コマンド (例: untagged ethe portID) で、VLAN とポートを関連付けます。

例)

各設定の状態が以下である場合

- VLAN10 の詳細情報の[ポート一覧] グループボックス:
VLAN10 にポート 3
- 装置上に設定されている VLAN の状態:
VLAN10 にポート 4 が関連付いている

この場合、装置上で VLAN10 をいったん削除してから、VLAN10 を再度作成します。

※ポート 4 が他のマシンと関連付いている場合は、合わせて装置の VLAN 設定コマンド (例: untagged ethe portID) で、ポート 4 を VLAN10 に関連付けてください。

5. スイッチの詳細情報から VLAN 編集を実行し、VLAN とポートの関連付けを解除します。

[Brocade 製品 FastIron Edge X シリーズ以外のスイッチをご利用の場合]

- ◆ リソース割り当て実行時に、VLAN とポートの関連付けに失敗した場合
 1. 失敗原因を運用ログにて確認し、失敗要因を取り除きます。
 2. 運用グループの詳細情報の [ホストー覧] グループボックスからいったん割り当て解除を実行します。
 3. 運用グループの詳細情報の [ホストー覧] グループボックスから再度リソース割り当てを実行します。

- ◆ 割り当て解除実行時に、VLAN とポートの関連付け解除に失敗した場合
 1. 失敗原因を運用ログにて確認し、失敗要因を取り除きます。
 2. 運用グループの詳細情報の [ホストー覧] グループボックスから割り当て解除を実行します。

- ◆ VLAN 編集実行時に、VLAN とポートの関連付けに失敗した場合
 1. 失敗原因を運用ログにて確認し、失敗要因を取り除きます。
 2. VLAN の詳細情報から VLAN 編集を実行し、VLAN とポートを関連付けます。

- ◆ VLAN 編集実行時に、VLAN とポートの関連付け解除に失敗した場合
 1. 失敗原因を運用ログにて確認し、失敗要因を取り除きます。
 2. VLAN の詳細情報から VLAN 編集を実行し、VLAN とポートの関連付けを解除します。

1.3.3. ロードバランサの追加、または削除に失敗した場合の注意事項

SigmaSystemCenter は、リソース割り当てや、割り当て解除に伴ってロードバランサの制御を行います。その際に、ロードバランサの追加、または削除に失敗した場合は、失敗要因を取り除いてリソースの割り当て解除を行ってください。復旧手順は以下の通りです。

状況	手順
待機中のマシンを稼働させた際にロードバランサの追加に失敗した場合	1. 失敗原因を運用ログにて確認し、失敗要因を取り除きます。 2. 割り当て解除を実行します。 3. リソース割り当てを実行します。
稼働中のマシンを待機させた際にロードバランサの削除に失敗した場合	1. 失敗原因を運用ログにて確認し、失敗要因を取り除きます。 2. 割り当て解除を実行します。

1.3.4. トランク、リンクアグリゲーション、ポートチャネル設定された物理ポートについて

スイッチ装置上でトランク設定、リンクアグリゲーション設定、ポートチャネル設定を行ったポートに対して、SigmaSystemCenter で VLAN 制御を行うことはできません。

VLAN 制御対象のポートとして指定しないでください。

例えば、SIGMABLADE GbE インテリジェントスイッチのポート 17,18 は、ブレード収納ユニットの隣接スロットと接続するためのインターリンクポートで、既定でトランク構成となっているため、SigmaSystemCenter で VLAN 制御を行うことはできません。

また、SigmaSystemCenter は、トランク、リンクアグリゲーション、ポートチャネル設定された論理インターフェースに対する VLAN 制御をサポートしていません。

1.3.5. DeploymentManager の設定について

- ◆ SigmaSystemCenter 3.0より前のバージョンのDPMサーバからアップグレードインストールした場合、かつアップグレード前にDeploymentManagerとNetvisorPro VのTFTPサービスの連携を行っていた場合
「DeploymentManager インストレーションガイド」の「付録F DPMサーバとNetvisorPro Vを同一マシン上に構築する」の「■ DPMサーバをインストールしたマシンにNetvisorPro Vをインストールするには、以下の手順に従ってください。」の(4)～(7)を再度行ってください。

1.4. ESMPRO/ServerManager を使用する場合の注意事項

1.4.1. 仮想マシンサーバの ESXi 5.0 以降へのアップグレードについて

VMware ESXi には、サービスコンソールがありませんので、ESXi には ESMPRO/ServerAgent for VMware は導入できません。そのため、仮想マシンサーバを ESXi 5.0 以降へアップグレードするときは、下記に記載する手順に従って ESMPRO/ServerManager の管理から該当マシンを削除してください。

仮想マシンサーバが ESMPRO による管理から外されるため、SystemProvisioning では、ESMPRO/ServerManager、および ESMPRO/ServerAgent から通報される障害イベントなどを取得することができなくなります。そのため、運用グループで利用しているポリシーにこれらのイベントで設定されていた場合、そのポリシーは起動しなくなります。

死活監視には、vCenter Server を使用します。「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 概要編」の「2.5. 死活監視」の vCenter Server 管理の ESXi の設定を参照して vCenter Server のイベントをポリシーに設定してください。

ハードウェアの異常検出には、OOB Management 管理機能を使用します。「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 概要編」の「2.6.1 ハードウェア監視の概要」を参照して、OOB 経由でイベントを取得するように設定を変更してください。

関連情報: ESMPRO/ServerManager、および ESMPRO/ServerAgent から通報されるイベントの詳細については、「SigmaSystemCenter リファレンスガイド データ編」の「1.1.1 ESMPRO/ServerManager 経由で検出できる障害」を参照してください。

SigmaSystemCenter で管理している仮想マシンサーバを ESXi 5.0 にアップグレードする手順は以下となります。

1. Web コンソールを起動し、[仮想] ビューを開きます。
2. [仮想] ツリーからアップグレードする ESX を選択し、稼動中の VM 一覧からすべての仮想マシンを選択して、[アクション] メニューから [VM 移動] をクリックします。
3. VM 移動終了後、アップグレードする ESX を [操作] メニューから [メンテナンスオン] をクリックし、メンテナンスモードにします。
4. ESMPRO/ServerManager から該当するマシンの情報を削除します。
5. 仮想マシンサーバを ESXi 5.0 にアップグレードします。
6. アップグレード終了後、SigmaSystemCenter の Web コンソールに戻り、[管理] ビューの [サブシステム] をクリックし、[操作] メニューから [収集] をクリックします。
7. 収集終了後、[操作] メニューから [メンテナンスオフ] をクリックし、メンテナンスモードを解除します。
8. 手順 2 で退避させた仮想マシンを [VM 移動] でアップグレードした仮想マシンサーバに戻します。

1.4.2. SNMP Trap 受信ポートの競合について

環境によっては、ESMPRO/ServerManager のアラートビューアで、「SNMP TRAP ポートバインド不可」アラートが表示されることがあります。この場合、PVM Service が起動する延長で SNMP Trap Service が起動することにより、ポート競合が発生している可能性があります。

以下の対処方法のいずれかを実施してください。

- ◆ "SNMP Trap Service" を無効にする
- ◆ ESMPRO/ServerManager の SNMP トラップ受信方式を変更する

関連情報: SNMP トラップ受信方式を変更するには、「SigmaSystemCenter インストールガイド」の「2.5.2 SNMP Trap サービスの設定について」を参照してください。

1.4.3. ESMPRO/ServerManager の管理対象マシンの自動登録機能について

ESMPRO/ServerManager の以下の自動登録機能は無効にしてください。

- ◆ WebGUI から設定できる "CPU ブレード自動登録"
初期設定では、CPU ブレード自動登録設定は無効に設定されていますので、何も設定しないでください。

設定状況を確認するには、ESMPRO/ServerManager の WebGUI にログインして筐体を選択し、「CPU ブレード自動登録」を選択します。

通報先 IP アドレスが設定されていなければ、無効に設定されています。

1.5. ストレージ管理機能を利用する場合の注意事項

1.5.1. ディスクボリューム名について

SigmaSystemCenter から管理するすべてのストレージ装置上で、ディスクボリューム名は一意となるようにしてください。

1.5.2. ストレージのサイズ上限について

SigmaSystemCenter では、2PB を超えるストレージプール、およびディスクボリュームを扱うことができません。

SigmaSystemCenter で利用するストレージのプールサイズ、およびディスクボリュームサイズは 2PB 未満になるようにご用意ください。

1.6. iStorage を使用する場合は注意・制限事項

1.6.1. Integration Base のバージョンアップについて

Integration Base をバージョンアップなどの理由により、再インストールする場合、下記の手順で実施してください。

手順が守られなかった場合、正しくインストールされないことがあります。

インストール後に、iStorage の接続に失敗するようになった場合は、本事象に該当している可能性があります。その場合は、再度下記の手順で再インストールを行ってください。

1. PVM Service を停止
2. Integration Base をアンインストール
3. Integration Base をインストール
4. Integration Base サービスを起動
5. PVM Service を起動

1.6.2. 二次キャッシュ機能を利用する場合の制限事項

iStorage 二次キャッシュ機能を利用する場合、二次キャッシュボリュームの LD 番号は既定値を利用するようにしてください。

二次キャッシュボリュームの LD 番号に任意の値を指定して構築する場合、運用で切り出す予定のボリューム数以上の値を設定してください。

1.6.3. データ最適配置 (LD 移動) 機能を利用する場合

データ最適配置 (LD 移動) 機能を利用する場合、最適化により LD が所属するストレージプールが変わる場合があります。

その際は、ストレージ収集を行うことで SigmaSystemCenter 上のストレージプールと LD の関係を同期します。

1.6.4. パーティショニング機能を利用する場合

パーティショニング機能を使用する場合、SigmaSystemCenter ではパーティショニング単位での制御のみ可能となります。複数パーティションにまたがった構成変更には対応しておりません。

パーティショニング機能とは、ディスクアレイのリソース (ディスク、キャッシュメモリ、ポート) を業務などの論理単位に分割して、独立したリソースを持つ仮想的なストレージを構築し、管理する機能です。

1.6.5. Virtual Volumes 機能を利用する場合

Virtual Volumes 機能を使用する場合、以下の点に注意してください。

- ◆ Virtual Volumes 環境 (Storage Container がある環境) の場合、ディスクボリュームの最適作成が失敗する場合があります。ディスクボリュームの作成先となるストレージプールに Storage Container が選択されないよう、タグによる切り分けを行ってください。

また、以下の制限事項があります。

- ◆ iStorage では Virtual Volumes 機能で使用する LD セットはプラットフォーム種別が「VW」となりますが、SigmaSystemCenter からプラットフォーム種別が「VW」の LD セットに対するストレージの構成変更を伴う操作を行った場合、プラットフォーム種別の変更が必要な状況においても、プラットフォーム種別の変更は行われません。
- ◆ Virtual Volumes 機能により追加・削除されたディスクボリュームの情報を SigmaSystemCenter のストレージポロジの画面に反映するためには、SigmaSystemCenter 上で [仮想] ビューでの収集、ストレージ収集、および対象のディスクボリュームを管理対象にする操作が必要となります。

1.6.6. I/O 流量制御機能を利用する場合

I/O 流量制御機能を利用する場合、SigmaSystemCenter では iStorage 装置に対して直接 iSMCLI を実行します。装置の専有処理競合や同時実行タイミングにより、他処理と互いに失敗する可能性があります。失敗した場合は、時間をおいて再度実行するなどの対処を行ってください。

- ◆ お客様が SSH クライアントより実行する iSMCLI コマンド
- ◆ iStorage 装置に対する Virtual Volumes 制御 (VM 作成、電源操作)

1.7. NetApp ストレージを使用する場合の注意事項

1.7.1. 利用可能なプロトコルについて

SigmaSystemCenter では、NFS プロトコルのみサポートします。

1.7.2. 利用可能なディスクボリュームの種類について

SigmaSystemCenter では、FlexVol（仮想ボリューム）のみをサポートします。また、SigmaSystemCenter では、Root Volume は管理しません。

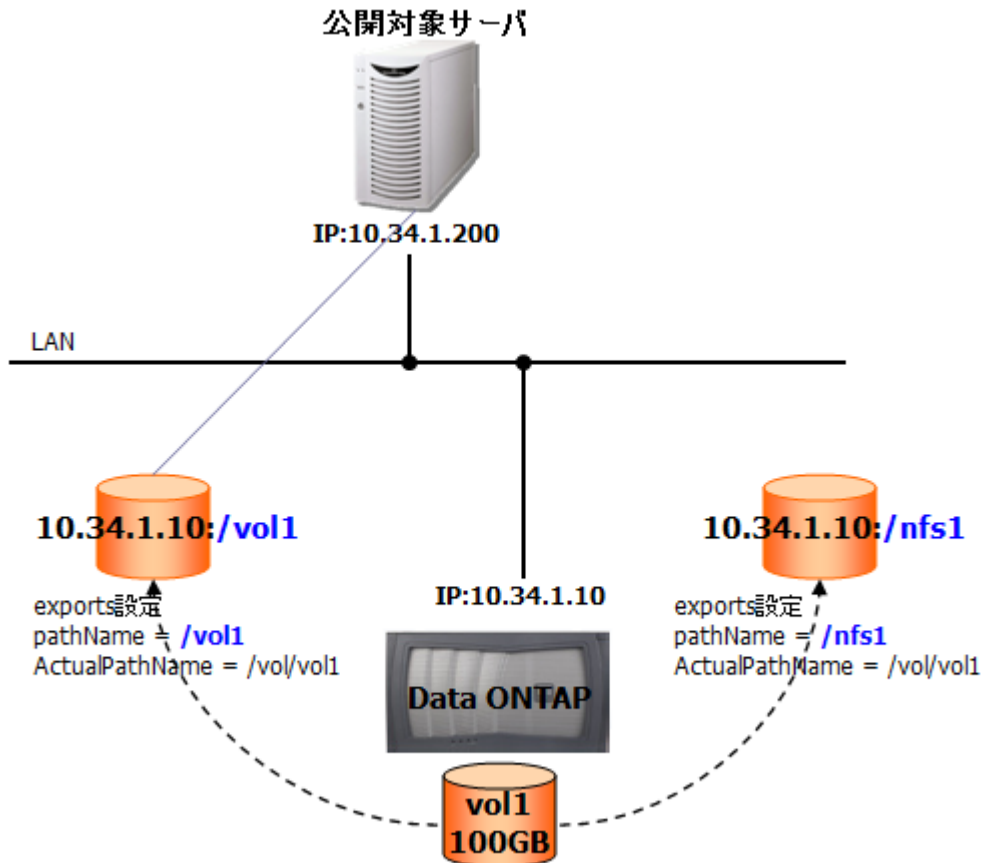
1.7.3. ディスクボリュームを公開できるホスト台数の上限について

SigmaSystemCenter では、1 つの管理対象ディスクボリュームを複数のホストへ公開する場合、公開できるホストの台数には上限があります。

- ◆ IP アドレスで設定する場合
約 250 台のホストへ公開することが可能です。
- ◆ ホスト名で設定する場合
ホスト名の長さに依存します。ホスト名を 64 バイトと仮定した場合、約 60 台のホストへ公開することが可能です。

1.7.4. ディスクボリュームの exports 設定について

ディスクボリュームの exports 設定は、各ディスクボリュームに 1 つのみとしてください。SigmaSystemCenter では、以下の図のように、ディスクボリューム (vol1) に対して、複数の exports (「/vol1」、「/nfs1」) が設定された環境では、exports 設定が特定できなくなり、正しく制御できなくなります。



注: SigmaSystemCenter を利用してディスクボリュームの exports 設定を行った場合、本章で説明する構成にはなりません。SigmaSystemCenter を利用した設定方法については、「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 概要編」の「6.7.7 NetApp 制御」を参照してください。

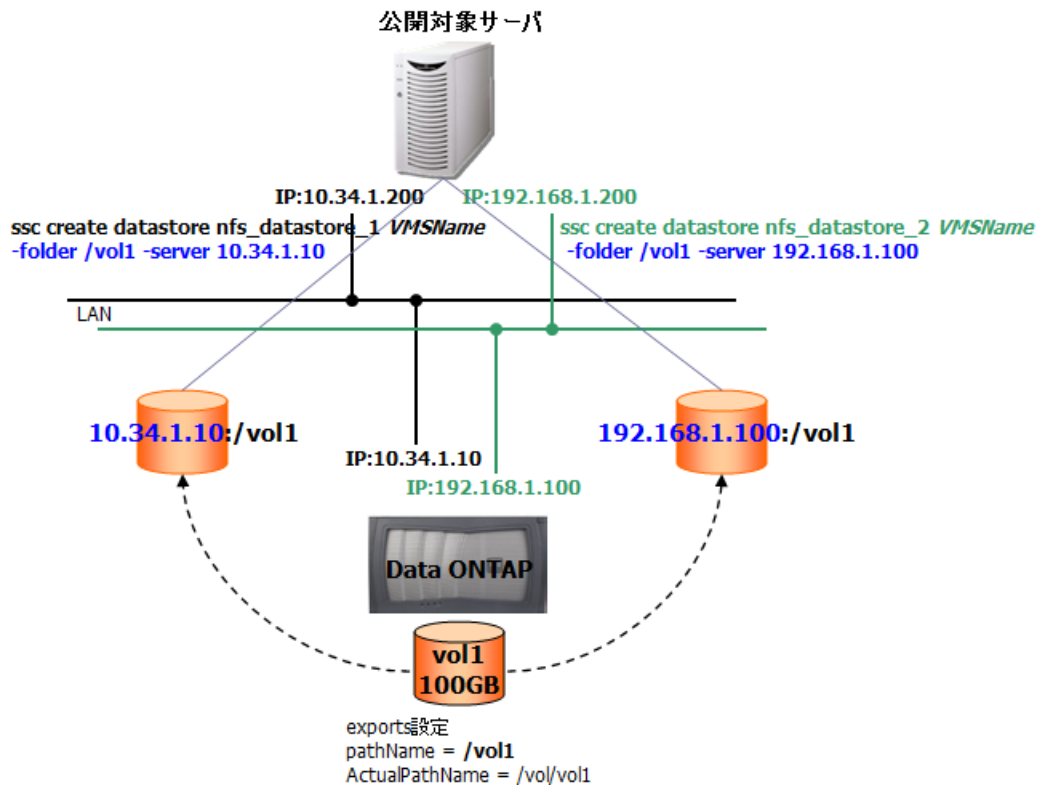
1.7.5. ホストへのディスクボリューム公開について

1つのホストに対して、1つのディスクボリュームを複数のIPアドレスで公開 (exports 設定) しないでください。

また、1つのホストに対して、1つのディスクボリュームを複数のIPアドレス経由で利用しないでください。

SigmaSystemCenter では、1つのディスクボリュームを複数のデータストアとして利用した場合、以下の図に示す通り、1つのホストに対し、Data ONTAP に設定された複数のIPアドレスを経由したデータストアを登録すると、実際のディスクサイズ (100GB) に対して、データストアの合計サイズは 200GB として認識されます。

また、この環境で 10GB の仮想マシンを作成した場合、双方のデータストアから 10GB ずつ、合計 20GB が消費されたように見えることになります。



1.7.6. オフラインの Aggregate、Volume

オフラインの Aggregate と Volume はサイズが "0" と表示されます。オフラインの Aggregate と Volume を使用しないでください。

1.7.7. NetApp ボリュームをホスト名でデータストア登録した際のトポロジ出力について

[現象]

仮想マシンサーバにホスト名で NetApp のボリュームをデータストア登録している環境では、既定の設定では、トポロジ (show storagetopology) にデータストアの情報は出力されません。

[原因]

NetApp ストレージ情報収集の既定の設定では、NetApp ストレージに設定された IP アドレスに対して、DNS サーバへのホスト名問い合わせを行わないため、ホスト名情報は保持されません。そのため、データストア登録時に設定したホスト名が指し示す NetApp ストレージが解釈できない状態になります。

[対処方法]

仮想マシンサーバにホスト名で NetApp のボリュームをデータストア登録している環境では、以下のレジストリを作成し、NetApp に設定されている IP アドレスに対して、ホスト名を取得する設定を行ってください。

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥Provider¥
Storage¥NetApp

値名: CollectDNS

型: DWORD

デフォルト値: 0 (収集しない) ※1

※1 値に「2(すべて問い合わせる)」を設定します。また、NetApp ストレージに定義されている IP アドレスの一部のみをホスト名取得の対象としたい場合には、「1(DefinedIP に定義された IP のみ収集する)」を設定し、更に以下の値を設定します。

値名: DefinedIP

型: SZ

デフォルト値: (空白) ※2

※2 ホスト名取得を行う IP アドレスを指定します。複数の IP アドレスを対象とする場合は、カンマ区切りで定義してください。(例 : 172.16.255.230, 2001:db8::9abc)

1.8. SMI-S を利用してストレージ装置を管理する場合の注意・制限事項

1.8.1. ディスクボリューム番号を指定したディスクボリュームの作成について

SigmaSystemCenter で、SMI-S を利用してストレージ装置を管理した場合、ディスクボリューム番号を指定したディスクボリュームの作成できません。

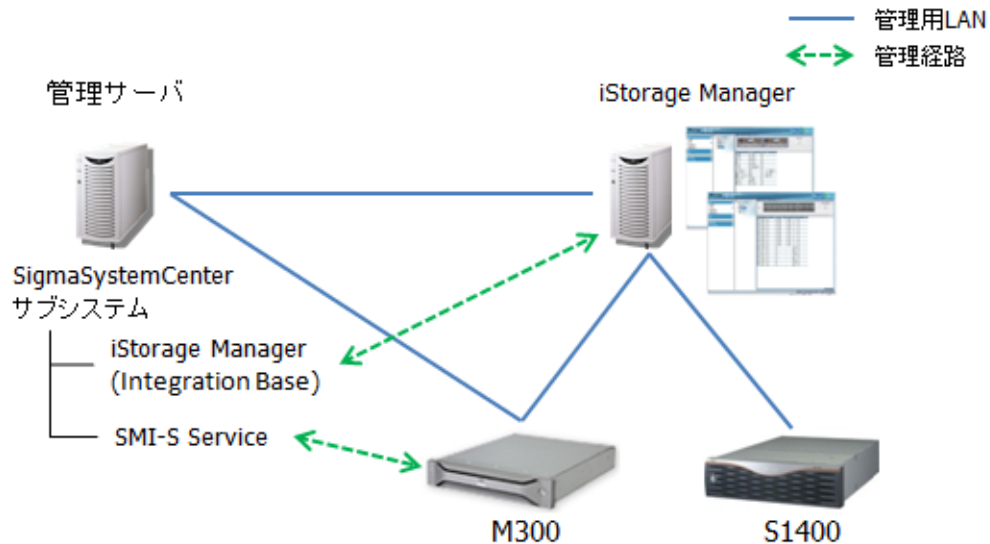
ディスクボリューム番号は、ストレージ装置で自動採番され、空き番号が使用されます。

1.8.2. 既存のストレージとの共存について

SigmaSystemCenter で、SMI-S を利用してストレージ装置を管理する場合、1 つのストレージ装置を複数のサブシステムで管理することができません。

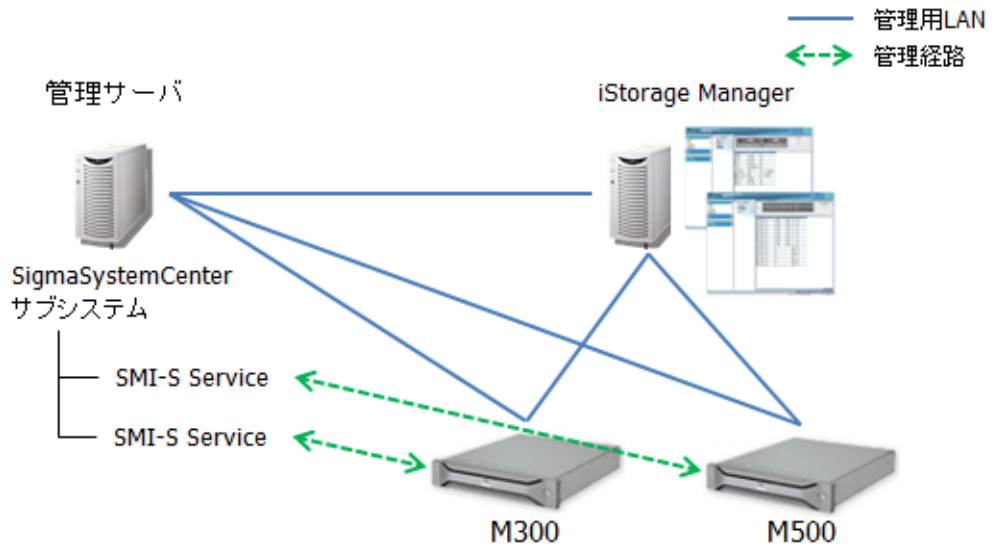
既存のサブシステムで管理しているストレージ装置は、SMI-S で管理しないでください。

【管理不可な例】



※ M300をSMI-Sサブシステムで管理せず、従来のIntegration Base経由で管理

【管理可能な例】



1.8.3. ストレージ設定における LUN 番号の指定について

SigmaSystemCenter で、SMI-S を利用してストレージ装置を管理した場合、ストレージ設定の LUN 番号を指定することはできません。また、アクセスコントロール時にディスクボリュームの認識順番 (LUN 番号) を指定することはできません。

1.8.4. 二次キャッシュプール、二次キャッシュボリュームの扱いについて

SigmaSystemCenter で、SMI-S を利用して iStorage 装置を管理した場合、二次キャッシュプールは、ストレージプールとしてシステムボリューム、二次キャッシュボリュームは通常のディスクボリュームとして表示されますが、ほとんどの操作を行うことはできないため、注意してください。

また、二次キャッシュプールを利用したディスクボリュームの作成・削除は行えません。システムボリューム、二次キャッシュボリュームについても、ディスクボリュームの制御 (削除、アクセスコントロール) は行えません。

1.8.5. EMC CLARiX (VNX) の利用について

SigmaSystemCenter で、SMI-S を利用して EMC CLARiX (VNX) 装置を管理した場合、すべての LUN・イニシエータを SigmaSystemCenter で管理・操作してください。

アクセスコントロール時に、SigmaSystemCenter で認識していない LUN・イニシエータがストレージグループに接続されている場合、操作に失敗する、または対象のストレージグループを利用した運用が正しく動作しない場合がありますので、注意してください。

また、ストレージグループに接続されている、または接続する LUN は、SigmaSystemCenter のグループ、およびホストのストレージ設定に必ず設定してください。

1.8.6. iStorage のポートの情報について

ストレージ制御ソフト 0940 以降をご利用の場合で、かつコントローラ冗長（二重化）構成の場合は、ディスクアレイのポート情報が表示できません。

1.9. EMC CLARiX (VNX) を使用する場合の注意事項

1.9.1. Navisphere CLI のインストールオプションについて

Navisphere CLI のインストールオプション「Set Verification Level」は、「Low」でインストールしてください。

「Medium」でインストールした場合は、「Low」でインストールをやり直してください。

「Medium」でインストールした場合は、PVMService から CLARiX (VNX) への接続が失敗し、CLARiX (VNX) を管理できなくなります。

1.10. ユーザ管理についての注意事項

ユーザアカウントのアクセス権限を変更した場合、対象ユーザアカウントがログイン中であっても反映されます。

ただし、以下の例外がありますのでご注意ください。

◆ ユーザアカウントを無効に設定した場合

無効に設定されたユーザアカウントは、SystemProvisioning にログインすることができません。ただし、対象ユーザアカウントがログイン中の場合には、無効に設定されてもログアウトするまでは使用を継続することができます。

◆ 表示系の権限を変更した場合

[監視] ビュー、および [管理] ビューに関する表示系の権限については、ログイン中のユーザアカウントに対して変更を行うと、ログアウトするまで一部反映されません。

1.11. マシン情報についての注意事項

1.11.1. NIC 情報について

NIC 情報は収集により自動で削除されないため、故障により取り外した NIC の情報など、実際には存在しない NIC 情報が登録されている可能性があります。

また、過去バージョンからアップグレードした場合、過去バージョンにて手動で登録された MAC アドレスは、小文字、または "-" 区切りで登録されている可能性があります。

小文字、または "-" 区切りの MAC アドレス、および存在しない NIC 情報が登録されている場合は、手動で削除してください。

削除する方法は、以下の通りです。

1. Web コンソールの [システムリソース] ツリーから対象のマシンのアイコンをクリックします。
2. [操作] メニューの [メンテナンスオン] をクリックします。
3. [設定] メニューの [プロパティ] をクリックします。
4. [ネットワーク] タブを選択します。
5. [NIC 一覧] グループボックスにて、削除する NIC のチェックボックスをオンにし、[アクション] メニューから [削除] をクリックします。

注: NIC 番号が 1 の NIC 情報は削除できません。下記の手順にて、NIC 番号を変更後、削除してください。

1. [NIC 一覧] グループボックスから削除する NIC の [編集] をクリックします。
 2. NIC 番号を空に変更し、[OK] をクリックします。
-

6. [戻る] をクリックします。
7. [操作] メニューの [メンテナンスオフ] をクリックします。

1.12. Rescue VM についての注意事項

1.12.1. 構成について

- ◆ Rescue VM は、SigmaSystemCenter と vCenter Server を導入した仮想マシンをそれぞれ 1 台ずつ監視することができます。
- ◆ SigmaSystemCenter には 1 台の Rescue VM を登録することができます。
- ◆ SigmaSystemCenter と Rescue VM の時刻を同じにする必要があります。同じでない場合は、正常にイベントの受信ができません。
- ◆ 使用するポートグループについて
Rescue VM の監視対象 (SigmaSystemCenter / vCenter Server がインストールされた仮想マシン) は、標準ポートグループを使用する必要があります。
分散仮想ポートグループは使用しないでください。

1.12.2. Rescue VM について

- ◆ Red Hat Enterprise Linux 7 のサービスの起動停止について
Red Hat Enterprise Linux 7 のサービスの起動停止は、systemctl コマンドで行ってください。rescue-vm モジュールに付属の rescuevm-admin コマンドは使用しないでください。

1.12.3. 監視について

- ◆ 仮想マシンサーバの管理ネットワークで障害が発生し場合は、BMC による強制オフ後に監視対象の仮想マシンが復旧されます。
- ◆ 仮想マシンは、vCenter Server、または ESXi から参照した電源状態を監視します。仮想マシンのクラッシュなどゲスト OS 内の状態は監視しません。

1.12.4. 復旧処理について

- ◆ Rescue VM とその監視対象の仮想マシンに対して同時に障害が発生した場合は復旧できません。
- ◆ Rescue VM による復旧は、最適配置の配置制約を無視します。
- ◆ Rescue VM による復旧は、復旧先の仮想マシンサーバを選択することはできません。
- ◆ Rescue VM による復旧は、監視対象の復旧順序は指定できません。

1.13. N+1 リカバリについて

1.13.1. 本番マシンと予備マシンで利用できるマシンの制限について

本番マシンと予備マシンは、同一のハードウェア構成を推奨しています。

異なるハードウェア構成の場合、N+1 リカバリによる切り替え実行後、OS 動作に何らかの影響が発生する可能性があります。

特にハードウェアの型番が異なる場合は、切り替え後、業務を続行できない影響が発生する可能性がありますので注意してください。

詳細については、以下の資料を参照してください

http://jpn.nec.com/websam/sigmasystemcenter/qabody_kousei.html?#Q1-4

「Q4.本番機と予備機で、利用できるマシンに制限はありますか？」

1.14. システム構成のトポロジについての注意・制限事項

1.14.1. 依存関係設定について

依存関係設定において、マシンを 102 台以上連続で接続すると、トポロジを表示できません。

例: machine001 → machine002 → machine003 → ... → machine102

トポロジを表示する場合は、依存関係設定の連続接続数を 101 以下に設定してください。

1.14.2. 仮想マシン、および仮想マシンサーバのポップアップ表示について

一部の仮想化基盤 (Hyper-V など) において、大規模環境の場合、仮想マシン、および仮想マシンサーバのポップアップ表示に時間がかかることがあります。

[原因]

仮想マシン、および仮想マシンサーバのポップアップ表示における「CPU 使用量」、「メモリ使用量」、「IP アドレス」の情報を表示するために、仮想化基盤を直接アクセスして、情報を取得しますが、対象が多くなると処理に時間がかかるためです。

[対処方法]

仮想化基盤へアクセスして取得する「IP アドレス」、および「CPU 使用量」、「メモリ使用量」はポップアップで表示不可になりますが、仮想化基盤へのアクセスをスキップすることでポップアップの表示時間を短縮できます (「IP アドレス」、「CPU 使用量」、「メモリ使用量」は、[仮想] ビュー / VM サーバの詳細情報 / 性能情報より確認できます)。

下記の手順を実行してください。

◆ 対象ファイル

SystemProvisioning のインストールディレクトリ¥¥Provisioning
¥App_Data¥Config¥IntegratedTopologyConfig.xml

(既定値: C:¥Program Files (x86)¥NEC¥PVM¥Provisioning¥App_Data¥Config
¥IntegratedTopologyConfig.xml)

◆ 変更手順

1. 上記の「◆ 対象ファイル」を修正する前に、ファイルのバックアップを行ってください。
2. 下記の「◆ ファイル変更箇所」を参照し、「★」印の行を編集してください。
3. インターネットインフォメーションサービス(IIS)マネージャを使用して、アプリケーションプール「ProvisioningPool」を再起動してください。

◆ ファイル変更箇所

「★」印の「MachineSummary」の値(true)を「false」に変更してください。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<Configuration>
  <Topology>
    <Hierarchy>
      <HierarchyBeside>Operation</HierarchyBeside>
      <HierarchyBeside>VMServer</HierarchyBeside>

      <HierarchyBeside>VirtualMachineServer</HierarchyBeside>
      <HierarchyBeside>
        <Beside>PhysicalMachine</Beside>
        <Beside>LogicalMachine</Beside>
      </HierarchyBeside>
      <HierarchyBeside>
        <Beside>PhysicalSwitch</Beside>
        <Beside>FCSwitch</Beside>
        <Beside>UPS</Beside>
        <Beside>CustomDiskArray</Beside>
        <Beside>CustomSwitch</Beside>
        <Beside>EMCard</Beside>
        <Beside>Rack</Beside>
        <Beside>CustomObject</Beside>
        <Beside>CustomOther</Beside>
      </HierarchyBeside>
      <HierarchyBeside>DiskArray</HierarchyBeside>
    </Hierarchy>
    <CustomValue>
      <Point>40</Point>
      <HeightInterval>40</HeightInterval>
    </CustomValue>
    <Popup>
      ★ <MachineSummary>true</MachineSummary>
    </Popup>
  </Topology>
</Configuration>
```

1.15. Windows のセキュリティ強化に伴う注意事項

1.15.1. SSL / TLS 通信における弱い暗号方式の制限について

Windows Server 2016 を利用する場合、もしくは Microsoft 社が提供する更新プログラムを適用することで、従来利用できていた安全性の低い SSL / TLS 通信が制限されることがあります。

以下のケースが現在確認されています。

- ◆ 証明書のキー長の最小値変更について
証明書のキー長の最小値が変更され、キー長が 1024 ビット未満である暗号化キーがブロックされ、通信ができなくなります。

- KB2661254
<https://support.microsoft.com/ja-jp/kb/2661254>

- ◆ Diffie-Hellman Ephemeral (DHE) キー長の最小値変更について (logjam)
通信の鍵交換で使用する DHE キー長の最小値が変更されます。
この変更により、DHE キー長が 1024 ビット未満である場合、通信ができなくなります。

- KB3061518
<https://support.microsoft.com/ja-jp/kb/3061518>

現在確認されている、影響を受ける連携製品と対処方法について以下に記載します。

- ◆ ProgrammableFlow Controller
Ver.6.3 以降へバージョンアップしてください。
バージョンアップ手順などについては、ProgrammableFlow Controller のマニュアルを参照してください。
- ◆ ストレージ管理ソフトウェア
管理サーバ、またはストレージ管理 / 制御ソフトウェアのセキュリティ設定や証明書などを変更する必要があります。
詳細については、ストレージ装置のサポート窓口にお問い合わせください。または、ストレージ装置のマニュアルを参照してください。

1.16. InterSecVM/LB を使用する場合の注意・制限事項

1.16.1. ロードバランサグループの追加について

ロードバランサグループの追加にて後述する操作を行った場合、InterSecVM/LB 上にロードバランサグループが追加されていないに関わらず、ロードバランサグループの追加操作が成功します。

以下の操作を行わないでください。

- ◆ ロードバランサグループ名に InterSecVM/LB で使用できない文字、または文字数を指定する。
 - ・ 使用できる文字は半角英数字、および半角記号（"_"、"-"）です。
 - ・ 文字数は 63 文字以内です。
- ◆ 仮想サーバの IP アドレスに、InterSecVM /LB とセグメントが異なる IP アドレスを指定する。

既に操作を行ってしまった場合は、以下の手順で追加したロードバランサグループを削除してください。

1. Web コンソールの [システムリソース] ツリーから対象のロードバランサのアイコンをクリックします。
2. [ロードバランサグループ一覧] グループボックスにて、削除するロードバランサグループのチェックボックスをオンにし、[アクション] メニューから [削除] をクリックします。
3. 確認ダイアログボックスが表示されますので、[OK] をクリックします。

2. トラブルシューティング

本章では、SigmaSystemCenter の設定中、および運用中に発生した障害に対応する方法について説明します。

本章で説明する項目は以下の通りです。

- 2.1 エラーへの対処方法..... 110
- 2.2 SystemProvisioning のトラブルシューティング 111
- 2.3 構成情報管理のトラブルシューティング 150

2.1. エラーへの対処方法

SigmaSystemCenter の設定中、および運用中にエラーが発生した場合の作業の流れを説明します。

1. ジョブの実行状況、および障害状況の確認

[監視] ビューのダッシュボードから、ジョブの実行状況、および管理対象マシン・サブシステムの障害状況を確認することができます。

ダッシュボードの使用方法については、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「9.8.1 ダッシュボード」を参照してください。

2. 障害の解析

障害の原因を究明し、特定できた場合は対処を実施します。

本章内のトラブルシューティングを参照してください。

ジョブの実行が失敗した場合は、運用ログを参照し、ジョブが失敗した原因を確認してください。

運用ログの確認方法については、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「9.8.5 ジョブの実行状態の確認方法」を参照してください。

3. ログの採取、およびお問い合わせ

上記手順で原因を特定できなかった場合は、ログを採取の上お問い合わせください。

ログの採取方法、およびお問い合わせの詳細については、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「9.11. ログの採取」を参照してください。

2.2. SystemProvisioning のトラブルシューティング

注: Windows OS は、ご使用の環境が x64 OS と x86 OS でレジストリのパスが異なります。レジストリは x64 OS の表記ですので、適宜読み替えてください。

- x64 OS : HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node
 - x86 OS : HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE
-

2.2.1. SigmaSystemCenter 3.0 以降にアップデートすると Differential Clone 用のテンプレートが使用できない

[詳細説明]

SigmaSystemCenter 2.1 update 2 以前とは Differential Clone 方式が異なるため、SigmaSystemCenter 2.1 update 2 以前に作成された Differential Clone 用のテンプレートとは互換性がなく使用できなくなります。

SigmaSystemCenter 3.0 以降では、Differential Clone は、VMware vSphere 4.0 以降の環境 (vCenter Server 4.0、ESX 4.0 以降) の場合にサポートしています。

[対処方法]

使用できなくなったテンプレートを削除し、マスタ VM から新規にテンプレートを作成してください。

1. タイトルバーの [仮想] をクリックし、[仮想] ビューに切り替えます。
2. [仮想] ツリーから対象のマスタ VM を選択し、[テンプレート作成] をクリックします。
3. 「テンプレート作成」ウィンドウが表示されます。
[タイプ] から Differential Clone を選択してテンプレートを作成します。

2.2.2. SigmaSystemCenter 2.1 update 3 以降にアップデートすると Disk Clone 用のテンプレートが使用できない

[詳細説明]

SigmaSystemCenter 2.1 update 3 から Disk Clone 用のテンプレートにイメージが関連付けられるようになりました。SigmaSystemCenter 2.1 update 2 以前のテンプレートはイメージが関連していないため、そのテンプレートは使用できなくなります。

[対処方法]

1. タイトルバーの [リソース] をクリックし、[リソース] ビューに切り替えます。

2. [リソース] ツリーから対象のテンプレートを選択し、[操作] メニューから [イメージ作成] をクリックします。
3. 「イメージ作成」ウィンドウが表示されます。
[イメージ名] テキストボックス、[作成先 VM サーバ] プルダウンボックス、[格納場所] プルダウンボックスを入力・選択し、[OK] をクリックします。

2.2.3. 複数のブラウザ画面からの操作により、画面が不一致となる

[現象]

同じマシン上で、同じ管理サーバを表示する Web コンソールを複数起動して利用している場合、画面状態が不一致となり、下記メッセージが表示される場合がある。

「リクエスト画面の表示に失敗しました。

指定された要素が見つかりません。変更または削除された可能性があります。

画面更新してください。」

例)

- ◆ Internet Explorer、もしくは Firefox のようなタブブラウザを利用して、複数のタブ画面やウィンドウから、同じ管理サーバに対する操作を行った場合

[原因]

一般的なブラウザは、タブやウィンドウが別でもブラウザセッションを共有します。インターネットインフォメーションサービス (IIS) のプロセスは、同じ管理サーバの画面を、ブラウザセッションを共有する複数のブラウザ画面から参照した場合に、1 つの画面からの接続として認識するため、情報に不整合が発生し、上記のメッセージが表示されます。

[対処方法]

Web コンソールから [運用] などをクリックし、ビューを変更した後、該当の画面を更新してから再度操作を行ってください。

2.2.4. マシンの稼働処理、もしくは待機処理の実行中に、処理をキャンセル、処理が途中で失敗すると、マシンの状態が処理実行前に戻らない

[原因]

キャンセル以外の失敗要因は、GUI や装置の設定ミス、ネットワーク障害、装置故障など多様な原因が考えられます。

[対処方法]

以下の対処方法のいずれかを実施してください。

- ◆ グループでの稼働処理に失敗した場合: いったんマシンをグループから削除し、エラーが発生した原因を取り除いた後、再度グループで稼働する操作を実行してください。
- ◆ グループからの待機処理に失敗した場合: エラーが発生した原因を取り除いた後、グループからの待機操作を実行してください。

マシンの状態が処理実行前に戻らない場合は、イベントログや運用ログを参照し、関連部分を特定する必要があります。GUI や装置の設定やハードウェアの状態などを再確認してください。

2.2.5. 1つのマシンの NIC や UUID が収集で別々のマシンに登録されてしまった

[原因]

同一のマシン情報が複数のサブシステムから収集された際に、各サブシステムから得たマシン情報の中に共通の UUID や MAC アドレスの情報がなく、SystemProvisioning 上でそれぞれが別マシンとして認識されてしまったためです。

注: 推奨されたサブシステム登録手順、マシン登録手順が守られなかった場合に発生します。

[対処方法]

以下の手順で二重登録されてしまったマシンの片方をいったん SigmaSystemCenter から削除し、残った方のマシンに UUID と MAC アドレスの両方が登録されている状態を確認してから、再度、各サブシステムから情報を収集してください。

1. 二重登録されてしまったマシンの NIC / UUID 登録状況やマシンに設定した他の情報を確認し、削除するマシンを 1 つ決めます。
2. 削除対象マシンが SigmaSystemCenter の管理対象として登録されている場合、登録を削除して管理対象外にします。
3. 各サブシステム上でマシンの登録を削除します。
削除対象のマシン種別を確認し、以下の該当する項目をすべて実行してください。
 - 種別が Blade or Unitary のマシンを削除する場合: 連携中の DeploymentManager を操作し、対象マシンをいったん削除します。
 - 種別が VMServer、または VirtualMachine のマシンを削除する場合: 連携中の vCenter Server を操作し、対象マシンのインベントリをいったん削除します。
4. SigmaSystemCenter 上で収集を実行します。
収集終了後に対象マシンが SigmaSystemCenter 上から削除されたことを確認してください。
5. 削除しなかったマシンに対し、3 でマシンを削除したサブシステムでも認識できる MAC アドレスを登録します。3 でマシンを削除したサブシステムが MAC アドレスを認識できな

い場合は、対象マシンを DeploymentManager 上に UUID を認識させた状態で登録したうえで DeploymentManager に対し収集を実行し、マシンに UUID を登録してください。

6. 3 でマシンを削除した全サブシステムに対し、再びマシンを再登録します。
7. SigmaSystemCenter 上で収集を実行します。

2.2.6. マシン種別が正しく表示されない / マシン種別に依存する固有機能が正しく動作しない

[現象]

対象マシンのマシン種別が正しく表示されない、もしくは、マシン種別に依存する固有機能が正しく動作しない。

例えば、VM Server であるはずのマシンに対し、最適配置などのポリシーが動作しない。

[原因]

マシンが二重登録されている可能性があります。

[対処方法]

該当マシンの UUID、および MAC アドレスを確認し、それらが別々のマシンに二重に登録されていないか確認してください。

二重に登録されていた場合は、上記の「2.2.5 1つのマシンの NIC や UUID が収集で別々のマシンに登録してしまった」場合の対処を行ってください。

2.2.7. PVMService サービスを停止できない

[現象]

以下のエラーメッセージが表示される。

「ローカルコンピュータの PVMService サービスを停止できません。」

「エラー1053: そのサービスは指定時間以内に開始要求または制御要求に応答しませんでした。」

[原因]

いったん DeploymentManager との接続が確立された後に、ネットワークを切断すると、DeploymentManager への処理要求が 5 分のタイムアウト待ちになります。

この状態で、サービススナップインから PVM Service の停止を行った場合、停止処理が待ちの状態となりサービススナップインでタイムアウトのメッセージが表示されます。

[対処方法]

メッセージ表示後、PVM Service の停止処理が完了するまで待ってください。停止処理の完了はサービススナップインを更新することで確認できます。

2.2.8. 操作中にウィンドウが自動的にログインウィンドウに変わる

[原因]

OS 環境、設定、他製品の影響が考えられます。

また、ブラウザより 30 分以上操作しない場合、この現象になります。

[対処方法]

再度ログインし、操作を実行してください。

また、ログインウィンドウに戻る現象が続く場合、以下の原因が考えられます。以下を参考に、原因を取り除いてください。

- ◆ IIS のアプリケーションプールのリサイクル条件を満たし、ワーカプロセスがリサイクルされている
 1. Web コンソールのブラウザを閉じます。
 2. IIS マネージャを起動します。
 3. 左ツリーの「アプリケーションプール」を選択し、Web コンソールが利用する「ProvisioningPool」を選択し、右クリックから [詳細設定] をクリックします。「詳細設定」ダイアログボックスを表示します。
 1. 「リサイクル」下の「定期的な間隔(分)」の値を「99999」に変更します。
 2. 「プロセス モデル」下の「アイドル状態のタイムアウト」の値を「43200」に変更します。
 3. [OK] をクリックして保存します。
 4. 左ツリーの Web コンソールが利用するサイト「Default Web Site」-「Provisioning」を選択し、「セッション状態」をダブルクリックします。「セッション状態」画面を表示します。
 1. [Cookie の設定] グループボックス内の [タイムアウト(分)] の値を「525600」に変更し、右ツリーの [適用] をクリックして保存します。
 5. 左ツリーの Web コンソールが利用するサイト「Default Web Site」-「Provisioning」を選択し、[認証] をダブルクリックします。「認証」画面を表示します。
 1. 「フォーム認証」を選択し、右ツリーの [編集...] をクリックします。「フォーム認証設定の編集」ダイアログボックスを表示します。
 2. [認証 Cookie のタイムアウト(分)] の値を「35791394」に変更し、[OK] をクリックして保存します。
 6. 設定完了後、左ツリーの「アプリケーションプール」を選択し、「ProvisioningPool」を右ツリーから [停止] を実行して、再度 [開始] を実行します。
 7. 左ツリーの「既定の Web サイト」(「Default Web Site」)を選択し、右ツリーの [Web サイトの管理] から [再起動] を実行します。
- ◆ ウィルス対策ソフトウェアで asax ファイル、aspx ファイル、および config ファイルをスキャン対象としている
- ◆ システムに利用可能メモリが不足している

2.2.9. マシンの誤認識による制御異常 / 管理対象マシンのネットワーク利用不可

[現象]

SystemProvisioning で単純に構成変更処理を続けていくと、同一のホスト名、IP アドレスを設定しているマシンが同じネットワーク内に存在する状態になり、マシンの誤認識による制御異常や管理対象マシンのネットワーク利用不可が起こる場合があります。

[原因]

操作ミスや電源管理製品などにより SystemProvisioning の管理外で稼動しているマシン以外のマシンを起動した可能性があります。

[対処方法]

ご利用の環境が Windows、もしくは Linux により対処方法が異なります。環境に応じて以下の手順に従って、本機能を設定してください。

◆ Windows

SigmaSystemCenter では、このような不具合が発生しないように、稼動しているマシンをプールへ移動する際にホスト名と IP アドレスの設定を変更するオプション機能を提供しています。本機能を使用すると、ホスト名と IP アドレスを以下のように変更します。

- ホスト名: PC-MAC アドレス (MAC アドレスの ":" は除く)
複数の NIC を搭載するマシンの場合、任意の NIC の MAC アドレスを使用します。
- IP アドレス: [IP アドレスを自動的に取得する]
DHCP サーバから取得します。

本機能を導入するには、本機能が動作する DeploymentManager のシナリオ (既定値: SetDHCP シナリオ) を、DPM サーバに登録し、マシン、ホスト設定、モデル、およびグループの待機時に配布するソフトウェアに設定してください。

注:

- ・ SetDHCP の実行中に管理対象マシンに対して操作は行わないでください。
- ・ ホスト名、IP アドレスが変更されることになりますので、アプリケーションなどの環境によっては利用できない場合があります。
- ・ 既定では、下記のレジストリ設定が設定されています。SystemProvisioning は、稼動しているマシンをプールへ移動するときに DeploymentManager に前述のシナリオが存在するかどうかを確認し、存在すれば、マシン、ホスト設定、モデル、およびグループのソフトウェアの設定によらず、本機能を自動的に実行します。SetDHCP シナリオが自動で実行されないようにするには、下記のレジストリ設定を削除してください。

キー名: HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥
ActionSequence¥Scenario

値名: SetDHCP

型: 文字列型

設定値: SetDHCP

1. ホスト名、IP アドレス設定変更機能用アプリケーションの登録

本機能の設定は、DeploymentManager で行います。

1. DPM サーバをインストールしたサーバの DVD/CD-RW ドライブに SigmaSystemCenter の製品 DVD-R を挿入します。
2. [スタート] — [すべてのプログラム] — [DeploymentManager] — [イメージビルダ] をクリックし、イメージビルダを起動します。
3. [パッケージの登録/修正] を選択し、「パッケージの登録/修正」ウィンドウを表示します。[ファイル] メニューから [Windows パッケージ作成] を選択し、「Windows パッケージ作成」ウィンドウを表示します。
4. [基本] タブの各項目を以下のように入力 / 選択します。
[パッケージ ID]: 「SetDHCP」
[タイプ]: [アプリケーション]
[緊急度]: [一般] もしくは [低]

注: [緊急度] を [最高]、および [高] には指定しないでください。

これらを指定した場合は、ターゲットが起動したタイミングで実行される自動更新で自動的にインストールが実行されます。

[表示名]: 「SetDHCP」

5. [実行設定] タブを選択し、[コピーするフォルダ] グループボックスの [フォルダ名] に SigmaSystemCenter の製品 DVD-R に含まれる¥Tool¥SetDHCP を指定し、[追加] をクリックします。
6. [インストール] グループボックスの [実行ファイル] に¥Tool¥SetDHCP 下の install.exe を指定します。

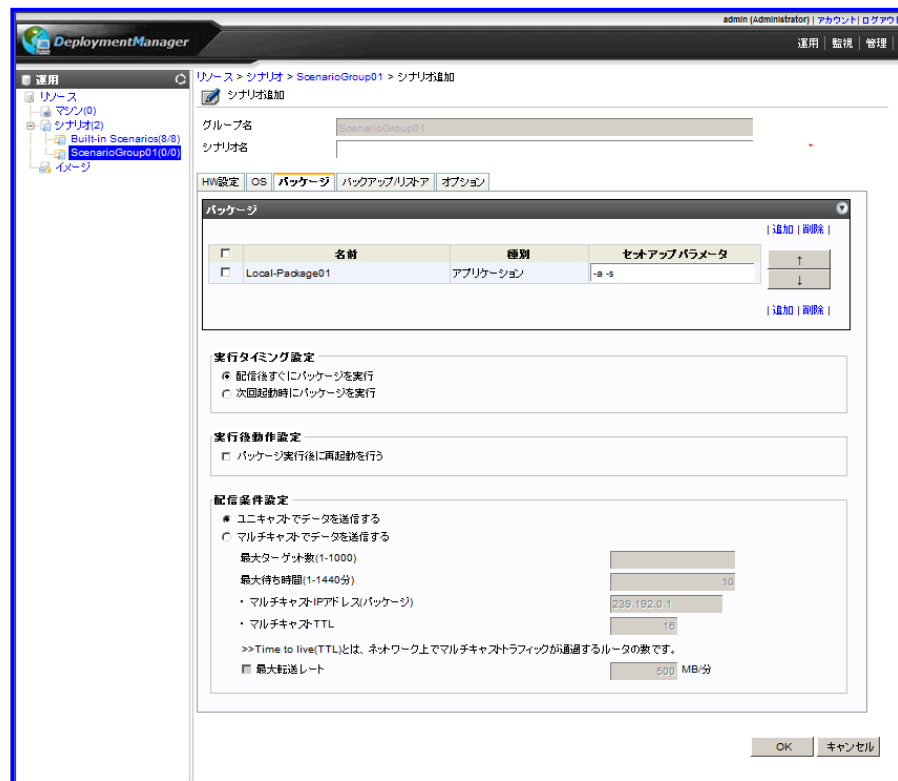
7. [セットアップパラメータ] に DeploymentManager で配信後、install.exe を実行してから設定変更処理を実行するまでの時間 (秒) を指定します。指定しない場合、既定値 (10 秒) となります。
8. [対応 OS と言語] タブを選択し、[OS] から [All OS]、および [言語] から [All Language] を選択し、[追加] をクリックします。
9. [OK] をクリックし、[完了] をクリックします。

2. ホスト名、IP アドレス設定変更機能用シナリオの作成

1. DeploymentManager の Web コンソールを起動します。
2. タイトルバーの [運用] をクリックし、[運用] ビューに切り替えます。
3. シナリオグループを作成します。登録するシナリオグループが既に存在する場合は、手順 10 へ進んでください。
4. [リソース] ツリーから [シナリオ] をクリックします。
5. メインウィンドウに [グループ一覧] グループボックスが表示されます。
6. [設定] メニューから [グループ追加] をクリックします。
7. 「シナリオグループ追加」ウィンドウが表示されます。



8. [名前] テキストボックスにグループ名を入力します (入力必須)。
9. [OK] をクリックします。
10. 続いてシナリオの追加を行います。[リソース] ツリーからシナリオを追加するシナリオグループをクリックします。
11. メインウィンドウにグループの詳細情報が表示されます。
12. [設定] メニューから [シナリオ追加] をクリックします。
13. 「シナリオ追加」ウィンドウが表示されます。
14. [パッケージ] タブを選択します。



15. 以下のように各項目を設定します。

- [シナリオ名]: 「SetDHCP」
- [パッケージ]: 手順 1 で作成した "Local-SetDHCP" を追加
- [配信条件設定] グループボックスの [ユニキャストでデータを送信する] チェックボックス: オン

16. [OK] をクリックします。

3. ホスト名、IP アドレス設定変更機能用シナリオの設定

1. マシン、ホスト設定、モデル、およびグループのいずれか、待機時に配布するソフトウェアに、SetDHCP シナリオを設定します。

◆ Linux

1. ホスト名、IP アドレス設定変更機能用アプリケーションの登録

本機能の設定は、DeploymentManager で行います。

1. DPM サーバをインストールしたサーバ上で任意のディレクトリを作成し、そのディレクトリにホスト名、IP アドレス設定を変更するスクリプトファイルを作成します。

注: スクリプトファイル内の改行コードは、必ず Linux 用 (<LF>) に設定してください。設定されていない場合、作成したファイルが正常に実行されません。

2. [スタート] - [すべてのプログラム] - [DeploymentManager] - [イメージビルダ] をクリックし、イメージビルダを起動します。
3. [パッケージの登録/修正] を選択し、「パッケージの登録/修正」ウィンドウを表示します。[ファイル] メニューから [Linux パッケージ作成] を選択し、「Linux パッケージ作成」ウィンドウを表示します。
4. [基本] タブの各項目を以下のように入力 / 選択します。
[パッケージ ID]: 「SetDHCP for Linux」
[タイプ]: [アプリケーション]
5. [実行設定] タブを選択し、各項目を以下のように入力 / 選択します。
[フォルダ名]: 作成したスクリプトファイルのディレクトリ
[実行ファイル]: 作成したスクリプトファイル
[セットアップパラメータ]: 特に指定しません。
6. [OK] をクリックします。

2. ホスト名、IP アドレス設定変更機能用シナリオの作成

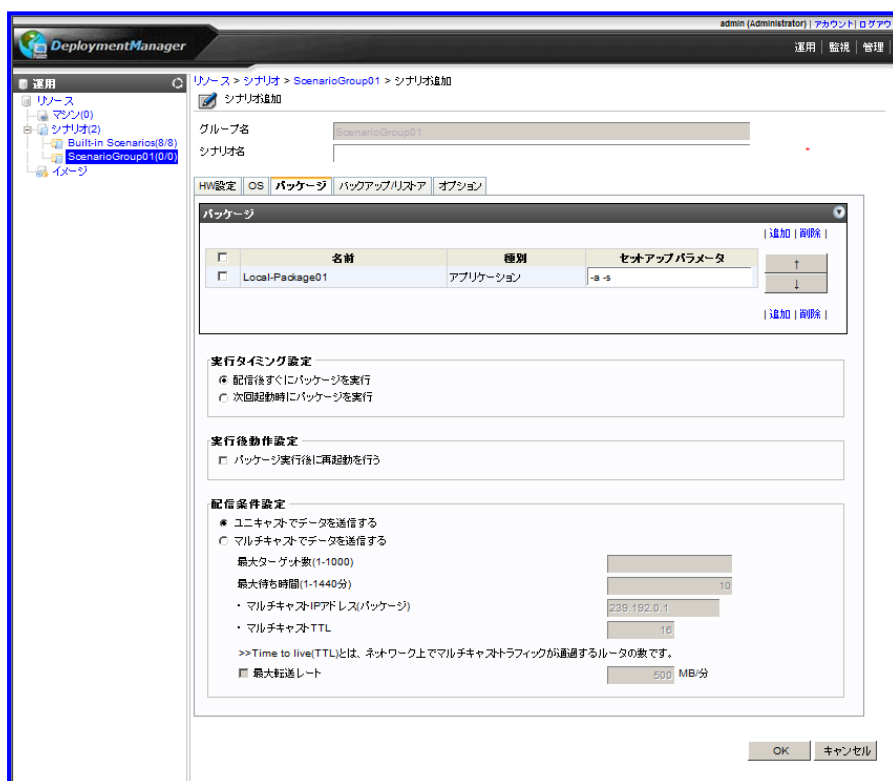
1. DeploymentManager の Web コンソールを起動します。
2. タイトルバーの [運用] をクリックし、[運用] ビューに切り替えます。
3. シナリオグループを作成します。登録するシナリオグループが既に存在する場合は、手順 10 へ進んでください。
4. [リソース] ツリーから [シナリオ] をクリックします。
5. メインウィンドウに [グループ一覧] グループボックスが表示されます。
6. [設定] メニューから [グループ追加] をクリックします。

7. 「シナリオグループ追加」ウィンドウが表示されます。



8. [名前] テキストボックスにグループ名を入力します (入力必須)。
9. [OK] をクリックします。
10. 続いてシナリオの追加を行います。[リソース] ツリーからシナリオを追加するシナリオグループをクリックします。
11. メインウィンドウにグループの詳細情報が表示されます。
12. [設定] メニューから [シナリオ追加] をクリックします。
13. 「シナリオ追加」ウィンドウが表示されます。

14. [パッケージ] タブを選択します。



15. 以下のように各項目を設定します。

- [シナリオ名]: 「SetDHCP」
- [パッケージ]: 手順 1 で作成した "Local-SetDHCP for Linux" を追加
- [配信条件設定] グループボックスの [ユニキャストでデータを送信する] チェックボックス: オン

16. [オプション] タブを選択し、[シナリオ実行動作設定] グループボックスの [シナリオ終了時に対象マシンの電源を OFF にする] チェックボックスをオンにします。

17. [OK] をクリックします。

3. ホスト名、IP アドレス設定変更機能用シナリオの設定

1. マシン、ホスト設定、モデル、およびグループのいずれか、待機時に配布するソフトウェアに、SetDHCP シナリオを設定します。

2.2.10. データストアが正しく表示されない

[現象]

VMware (ESX, ESXi) で使用できるストレージ ディスクまたは LUN に何らかの変更が加えられた場合、VMware (ESX, ESXi) が管理しているデバイス情報が変更され、VMware (ESX, ESXi) から取得できるデバイス情報に不整合が発生する場合があります。

[原因]

VMware (ESX, ESXi) から取得できるデバイス情報が不正になっている場合に、SigmaSystemCenter で収集を実行したため、不正な情報でデータベースが更新されている可能性があります。

[対処方法]

以下の方法でデバイス情報の整合をとってください。

1. SigmaSystemCenter の定期的な構成情報の収集が有効になっている場合は、無効にします。定期的な構成情報の収集の設定方法については、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「2.4.1 構成情報の収集に関する設定を行うには」を参照してください。
2. 下記の SSC コマンドを使用してデータストアのスキャンを実行してください。

```
ssc scan datastore VMSName
```

3. SigmaSystemCenter で収集を実行します。SigmaSystemCenter の定期的な構成情報の収集を実行する場合は、無効にした設定を有効に変更してください。

2.2.11. Windows の管理対象マシンをシャットダウンできない

[現象]

Windows の管理対象マシンに対しシャットダウンを実行しても、シャットダウンできない。

[原因]

Windows の管理対象マシンの状態が以下の場合は、シャットダウンされません。

- ◆ ワークステーションロックによりロックされている状態
- ◆ パスワード付きスクリーンセーバによるロック状態
- ◆ リモートデスクトップ、ターミナルサービス、その他リモート接続ソフトから接続された状態
- ◆ 編集集中のデータやシャットダウン要求に応答しないアプリケーションが存在する状態

[対処方法]

上記原因のロック状態を解除し、再度シャットダウンを行ってください。

2.2.12. 仮想マシン作成がタイムアウトする

[現象]

仮想マシン作成操作が下記の内容の警告やエラーで失敗する場合があります。

「理由：操作がタイムアウトしました。」

「仮想マシンのホスト名の設定待ちがタイムアウトしました。」

「仮想マシンの IP アドレスの設定待ちがタイムアウトしました。」

[原因]

仮想マシン作成操作では、仮想マシンにホスト名や IP アドレスが反映されることを待ち合わせます。この待ち合わせ動作は、作成する仮想マシンのゲスト OS の種類や管理サーバの負荷の状態などで変化するため、タイムアウトが発生する場合があります。

[対処方法]

ホスト名設定待ちがタイムアウトする場合は、下記のレジストリを秒単位で指定して作成してください。

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥Provider¥
VM¥VMware

値名 (型): HostNameWatchTimeout (REG_DWORD)

デフォルト値: 900

IP アドレス設定待ちがタイムアウトする場合は下記のレジストリを秒単位で指定して作成してください。

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥Provider¥
VM¥VMware

値名 (型): IpWatchTimeout (REG_DWORD)

デフォルト値: 600

それ以外で固有情報反映が完了しているがタイムアウトする場合は、下記のレジストリを作成してください。

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥Provider¥
VM¥VMware

値名 (型): SysprepWaitCount (REG_DWORD)

値: 1

値名 (型): EnableWaitForFixedTime (REG_DWORD)

値: 1

値名 (型): WaitForFixedTime (REG_DWORD)

デフォルト値: 120 ※

※ 値は秒単位で指定してください。

固有情報反映が完了せずタイムアウトする場合は、下記のレジストリを作成してください。

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥Provider¥
VM¥VMware

値名 (型): InitialStartupVMTimeout (REG_DWORD)

デフォルト値: 3600 ※

※値は秒単位で指定してください。

2.2.13. テンプレート作成がタイムアウトする

[現象]

テンプレート作成操作が下記の内容のエラーで失敗する場合があります。

「理由 : 操作がタイムアウトしました。」

[原因]

テンプレート作成操作では、作成元になる仮想マシンのディスクサイズやVMware ESX の負荷の状態により、仮想マシンのクローンに必要な時間が変化します。そのため、クローンの完了待ち合わせがタイムアウトする場合があります。

[対処方法]

下記のレジストリを秒単位で指定して変更してください。

◆ Full Clone テンプレートの場合

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥Provider¥
VM¥VMware

値名 (型): CloneTimeout (REG_DWORD)

デフォルト値: 1800 (単位:秒)

◆ Differential Clone / Disk Clone テンプレートの場合

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥Provider¥
VM¥VMware

値名 (型): CreateReplicaTimeout (REG_DWORD)

デフォルト値: 3600 (単位:秒)

2.2.14. VM 移動がタイムアウトする

[現象]

VM 移動操作が下記の内容のエラーで失敗する場合があります。

「同時実行数の制限により処理がタイムアウトしました。」

[原因]

VM 移動操作では、VMware ESX の負荷を考慮して同時に移動可能な VM 数を制限しています。VM 移動操作は、VMware ESX の負荷の状態により必要な時間が変化するため、操作の完了がタイムアウトする場合があります。

[対処方法]

下記のレジストリでタイムアウト値 (秒単位)、同時実行数 (VM 数) を変更してください。

◆ Migrate の場合

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥Provider¥
VM¥VMware

値名 (型): MigrateSemaphoreTimeout (REG_DWORD)

デフォルト値: 1800 (タイムアウト値 : 秒単位)

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥Provider¥
VM¥VMware

値名 (型): MigrateMaxParallel (REG_DWORD)

デフォルト値: 5 (同時実行数 (VM 数))

◆ Failover の場合

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥Provider¥
VM¥VMware

値名 (型): FailoverSemaphoreTimeout (REG_DWORD)

デフォルト値: 1800 (タイムアウト値 : 秒単位)

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥Provider¥
VM¥VMware

値名 (型): FailoverMaxParallel (REG_DWORD)

デフォルト値: 5 (同時実行数 (VM 数))

2.2.15. 仮想マシン作成後のソフトウェア配布が失敗する**[現象]**

仮想マシン作成後のソフトウェア配布が下記の内容のエラーで失敗する場合があります。

「指定されたマシンは電源 OFF です」

[原因]

仮想マシン作成後にホストプロファイルの拡張設定などを利用して、仮想マシンと DPM サーバ間の通信状態を制御するような場合、仮想マシンの作成が完了しても、DPM サーバが仮想マシンの電源状態を正常に認識するまでタイムラグが生じることがあります。

[対処方法]

下記のレジストリを設定して、仮想マシンと DPM サーバが通信可能な状態になるまで VM 作成の完了を待ち合わせてください。

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥Provider¥
VM¥VMware

値名 (型): EnableWaitForFixedTime (REG_DWORD)

値: 1

値名 (型): WaitForFixedTime (REG_DWORD)

デフォルト値: 120 ※

※ 待ち合わせ時間を秒単位で指定してください。

2.2.16. シャットダウン、再構成が失敗する

[現象]

仮想マシンのシャットダウン操作、再構成操作が下記のエラーで失敗する場合があります。

「この仮想マシンで VMware Tool が動作していないため、操作を完了できません。」

[原因]

仮想マシンをシャットダウンするには VMware Tools が必要になります。起動直後など VMware Tools が動作していない状態でシャットダウン操作を行った場合に発生する場合があります。

[対処方法]

下記のレジストリを秒単位で指定して変更してください。

キー名:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥Provider¥
VM¥VMware

値名 (型): WaitAfterStartUp (REG_DWORD)

デフォルト値: 0

仮想マシンの起動操作が上記のレジストリで指定した時間の待機を行います。

2.2.17. XenServer の起動を XenServer Pool Master が認識しない

[現象]

Pool 内の XenServer の起動が完了しているにも関わらず、XenServer Pool Master マシンが XenServer の起動を認識しない場合があります。

[原因]

XenServer Pool Master の切り替えが行われ、Slave が正しい XenServer Pool Master を認識していない可能性があります。

[対処方法]

現在の XenServer Pool Master のコンソールから xe コマンド

xe pool-recover-slaves

を実行してください。

xe コマンドの詳細については Citrix 社の製品マニュアルを参照してください。

2.2.18. Xen 環境で SigmaSystemCenter と実際の XenServer Pool Master に不整合が発生した

[現象]

SigmaSystemCenter で登録されている XenServer Pool Master と実際の XenServer Pool Master が違うため、操作ができなくなる場合があります。

[原因]

XenServer Pool Master の切り替えが行われた際は、必ず Pool 内の全サーバの起動を行ってください。また、旧 XenServer Pool Master マシンの復旧作業は、必ず現在の XenServer Pool Master が起動している状態で行ってください。上記を行わない場合は、XenServer Pool Master の切り替わりが自動で発生する場合があります。

[対処方法]

以下の対処を行ってください。

1. Pool 内のすべての XenServer を起動する。
2. 現在の XenServer Pool Master のコンソールから以下の xe コマンドを実行する。
`xe pool-recover-slaves`
xe コマンドの詳細については Citrix 社の製品マニュアルを参照してください。
3. SigmaSystemCenter のサブシステムウィンドウから XenServer Pool Master の編集を行い、XenServer Pool Master を現在の XenServer Pool Master のアドレスに変更する。

2.2.19. 復旧操作後に仮想マシンサーバが切断状態になる

[現象]

ssc コマンド "evaluate" やポリシーの設定するアクションの「VMS 操作 / 全 VM を移動 (Migration / Quick Migration, Failover)」、および「VMS 操作 / 全 VM を移動 (Failover)」が実行された場合、処理対象の仮想マシンサーバが切断状態になる場合があります。

[原因]

vCenter Server 環境では VMware ESX がダウンしている場合でも vCenter Server が正常と認識する場合があります。

VMware ESX がダウンしている状態では、仮想マシンの Migrate が失敗します。また、vCenter Server が VMware ESX を正常と認識している状態では、SigmaSystemCenter は仮想マシンの Failover を実行しません。そのため、仮想マシンの復旧処理を行うためには、仮想マシンの移動を実行する前に VMware ESX を切断する必要があります。

SigmaSystemCenter は、VMware ESX の接続確認を行い、接続できないとき vCenter Server が正常と認識している場合に VMware ESX の切断を実行します。

[対処方法]

切断状態になった ESX に対して下記の操作を行ってください。

1. タイトルバーの [仮想] をクリックし、[仮想] ビューに切り替えます。
2. [仮想] ツリーから対象 ESX のアイコンを選択し、[操作] メニューから [再接続] をクリックします。

2.2.20. 移動可能な仮想マシンサーバが見つからない

[原因 1]

仮想マシンが移動するために必要なキャパシティ値が不足している可能性があります。

[対処方法 1]

移動先仮想マシンサーバのキャパシティ値を確認してください。

[原因 2]

VMware 環境をご利用で Move に失敗した場合、移動先仮想マシンサーバのディスク空き容量が不足している可能性があります。

[対処方法 2]

移動先仮想マシンサーバのディスク空き容量を確認してください。

[原因 3]

VMware 環境をご利用で Migration に失敗した場合、vCenter Server で仮想マシンサーバの VMotion の設定が有効になっていない可能性があります。

[対処方法 3]

仮想マシンサーバの VMotion の設定 (VMotion Enabled) を確認してください。詳細については、VMware 社の製品マニュアルを参照してください。

[原因 4]

VMware 環境をご利用の場合、仮想マシンが移動できない構成になっている可能性があります。

[対処方法 4]

仮想マシンサーバの構成 (HW、DataCenter 構成、プール構成、ライセンス) を確認してください。

詳細については、VMware 社の製品マニュアルを参照してください。

2.2.21. ESX が破損し、関連付けられたテンプレートが使用できない

[詳細説明]

テンプレートに関連付けられた ESX が破損した場合、そのテンプレートは使用できなくなります。

[対処方法]

データストアがローカルディスクにある場合、データストアのバックアップや修復が必要となります。テンプレートが SAN や NFS など共有ファイル上にある場合は、以下の手順でテンプレートを修復できます。

1. vSphere Client で障害 ESX を削除します。
2. 別の ESX のデータストアブラウザに以前と同じ名前でテンプレートを登録します。

2.2.22. スタンドアロン ESXi 環境にて Failover した後、仮想マシンサーバから仮想マシンが移動されていないように見える

[現象]

スタンドアロン ESXi 環境にて Failover した後、障害が発生した仮想マシンサーバの原因を取り除き起動したら、移動済みの仮想マシンが、移動されていないように見える。

[原因]

障害が発生した仮想マシンサーバ上で動作していた仮想マシンが、別の仮想マシンサーバに移動されていることを障害が発生した仮想マシンサーバが認識していないためです。

[対処方法]

「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「8.8. スタンドアロン ESXi、スタンドアロン Hyper-V、KVM 環境での Failover 後の作業」を参照して、障害が発生した仮想マシンサーバの情報を更新してください。

2.2.23. 運用ログウィンドウに「SNMP Trap を受信できません」というメッセージが出力され、Out-of-Band Management 管理のイベントが検出されない

[現象]

運用ログウィンドウに「SNMP Trap を受信できません」というメッセージが出力され、Out-of-Band Management 管理のイベントが検出されない場合があります。

[原因]

SigmaSystemCenter をインストールした管理サーバにおいて SNMP Trap サービスが無効になっている。または、SNMP Trap サービスがインストールされていない可能性があります。

[対処方法]

1. SNMP サービス (もしくは、簡易ネットワークプロトコル (SNMP)) がインストールされていない場合、インストールします。

2. [スタート] メニューから [コントロールパネル] - [管理ツール] - [サービス] をクリックし、「サービス」ダイアログを開きます。
3. "SNMP Trap Service" をダブルクリックし、「SNMP Trap Service のプロパティ」ダイアログを開きます。
4. スタートアップの種類(E)の設定を "自動" にし、[開始(S)] をクリックします。
5. [OK] をクリックしてダイアログを閉じます。
6. 「サービス」ダイアログで "PVMService" を選択し、右クリックから [再起動(E)] を実行します。

2.2.24. 運用ログウィンドウに「SNMP Trap サービスが停止しました。」というメッセージが出力され、以降 Out-of-Band Management 管理のイベントが検出されなくなる

[現象]

運用ログウィンドウに「SNMP Trap サービスが停止しました。」というメッセージが出力され、以降 Out-of-Band Management 管理のイベントが検出されなくなる場合があります。

[原因]

"PVMService" が起動中に SNMP Trap サービスが停止した可能性があります。

[対処方法]

1. [スタート] メニューから [コントロールパネル] - [管理ツール] - [サービス] をクリックし、「サービス」ダイアログを開きます。
2. "SNMP Trap Service" をダブルクリックし、「SNMP Trap Service のプロパティ」ダイアログを開きます。
3. サービスの状態が "停止" となっていることを確認します。
4. スタートアップの種類(E)の設定を "自動" にし、[開始(S)] をクリックします。
5. [OK] をクリックしてダイアログを閉じます。
6. 「サービス」ダイアログで "PVMService" を選択し、右クリックから [再起動(E)] を実行します。

2.2.25. Out-of-Band Management の操作が失敗する

[現象]

Out-of-Band Management を行うための設定は正しくされているが、たまに操作が失敗することがある。

[原因]

- ◆ Out-of-Band Management の操作、および情報取得は、UDP を利用しているためパケットロスが発生し、操作が失敗することがあります。

- ◆ 対象マシンの電源操作時、システムの初期化処理が実行されます。タイミングによっては BMC が応答しない場合があります。

[対処方法]

操作の内部実装ではリトライを行い、その信頼性を高めておりますが、UDP の通信であるため、ネットワーク トラフィックによってはパケットロスが発生する場合があります。通信品質を確保するため、ネットワーク構成を見直してください。

- ◆ BMC への通信するための LAN は、業務用 LAN と物理的に切り離すようにしてください。
- ◆ なるべく管理対象マシンと SigmaSystemCenter 管理サーバの間のネットワークスイッチの数を減らすように設計してください。
- ◆ ネットワークスイッチ内部でのパケットフォワーディングなどを行わないようにしてください。

BMC がシステムの初期化処理によって応答しない場合には、しばらく時間をおいた後、再度操作を実行してください。

2.2.26. XenServer Pool Master の切り替え操作が実行された後、仮想マシンサーバがメンテナンスモードに遷移したまま解除されない

[現象]

XenServer Pool Master の切り替え操作が実行された後に、仮想マシンサーバが Xen 製品側のメンテナンスモードに遷移したまま解除されない場合があります。

[対処方法]

XenCenter を使用して XenServer Pool Master に接続し、対象の仮想マシンサーバのメンテナンスモードを解除してください。Xen 製品側のメンテナンスモードの解除の詳細手順については、Citrix 社の製品マニュアルを参照してください。

2.2.27. スタンドアロン ESXi で新規リソース割り当てが失敗する

[現象]

スタンドアロン ESXi 環境で、Differential Clone 用のテンプレートで新規リソース割り当てを行うと、仮想マシン作成操作が下記の内容のエラーで失敗する場合があります。

「原因 : Cannot complete the operation because the file or folder」

[原因]

以前使用していた仮想マシンのディスクがデータストア上に残っている可能性が考えられます。

[対処方法]

仮想マシンとして登録されていないことを確認した上で、vSphere Client のデータストアブラウザ、または ESXi 上から仮想マシンのディスク削除を行ってください。

2.2.28. Differential Clone / Disk Clone 用のテンプレートで作成されたレプリカ VM が使用できない

[現象]

Differential Clone / Disk Clone 用のテンプレートで作成されたレプリカ VM に対して起動操作を行って Sysprep が解除、もしくはレプリカ VM が破損したことにより、テンプレートを使用した新規リソース割り当てがうまくいかないことがあります。

[対処方法]

本手順を実行する前に、レプリカ VM の電源がオフであることを確認してください。

注: レプリカ VM が持っているスナップショット ":Frozen-Replica" を削除した場合は、本手順では復旧できません。再度、マスタ VM からテンプレートを再作成する必要があります。

VMware / Hyper-V / XenServer 6.0 以降の場合

1. タイトルバーの [仮想] をクリックし、[仮想] ビューに切り替えます。
2. [仮想] ツリーから対象のレプリカ VM を選択し、[設定] メニューから [スナップショット管理] をクリックします。
3. スナップショット一覧からスナップショット名が " :Frozen-Replica" をチェックして、[復元] を実行します。

2.2.29. 仮想画面で仮想マシンの情報を表示すると、仮想マシンサーバ (ESX / ESXi) の接続状態が接続不可と表示される

[現象]

vCenter Server では、仮想マシンサーバ (ESX / ESXi) が接続状態で、仮想マシンの基本情報を表示させると仮想マシンが存在する仮想マシンサーバ (ESX / ESXi) の接続状態が「接続不可」と表示されて、アイコンが赤色になる場合があります。

[原因]

仮想マシンコンソールのスクリーンショットの取得などの処理で、仮想マシンサーバ (ESX / ESXi) の root 権限パスワードが設定されていない場合に発生します。

[対処方法]

ESX の root 権限パスワードを設定してください。すべての ESX に対して共通の既定値として設定する場合は、「環境設定」ウィンドウの [仮想リソース] タブでパスワードを設定してください。

ESX ごとに設定する場合は、「サブシステム編集」ウィンドウで root 権限のアカウントとパスワードを設定してください。「サブシステム編集」ウィンドウは、[サブシステム一覧] グループボックスから編集するサブシステムの [編集] をクリックすると表示されます。

2.2.30. ESX プロビジョニング実行時に DataCenter への追加に失敗する

[現象]

VMware vCenter Server 4.0 以降でリソース割り当て、スケールアウトで ESX をインストールする OS イメージをグループ、モデル、ホストのいずれかのソフトウェアに登録して実行する場合に、リソース割り当て、スケールアウト操作が失敗する場合があります。

[原因]

VMware vCenter Server でホストの証明書が必要な設定になっている場合に、DataCenter に対して ESX の登録ができないため、本現象が発生する場合があります。

[対処方法]

vCenter Server に対して以下の設定を行ってください。

1. vSphere Client を起動し、[管理] — [vCenter Server 設定] を選択します。
2. SSL 設定を選択します。
3. [vCenter には検証済みの SSL 証明書が必要です。] チェックボックスをオフにします。

2.2.31. カテゴリ / グループの編集や移動を実行後、運用ログに警告が表示される

[現象]

カテゴリ / グループの編集や移動を実行後、運用ログに下記の警告が表示される場合があります。

「グループ (グループのフルパス) を編集できませんでした」

「グループ (グループのフルパス) を階層 (階層のフルパス) に移動できませんでした。」

[原因]

SystemProvisioning と DeploymentManager のグループの階層の同期に失敗したためです。詳細な原因については、運用ログのメッセージを確認してください。

[対処方法]

原因を取り除いた後、下記のコマンドを実行してください。ただし、原因が「指定されたグループ名が見つかりません。」の場合は、そのまま下記のコマンドを実行してください。

```
ssc dpm-location notify
```

2.2.32. マシン置換後に ESMPRO/ServerManager の登録情報が更新されない

[現象]

SigmaSystemCenter から「N+1 リカバリ」による切り替え、またはマシンの置換など「N+1 リカバリ」と同等の操作を行った際に運用ログに以下の警告メッセージが出力されます。

「マシン(xxx.xxx.xxx.xxx)を ESMPRO/ServerManager に自動登録できませんでした。
必要に応じて手動で登録して下さい。」

上記のメッセージに加えて、下記のいずれかの警告メッセージが運用ログに出力されます。

- ◆ 警告発生箇所: Agent 情報更新の要求
- ◆ 警告発生箇所: 自動発見の状況確認
- ◆ 登録後の初期設定に失敗しました。

上記ログが出力された場合、ESMPRO/ServerManager 内部の下記の登録情報が正しく更新されず、SigmaSystemCenter と ESMPRO/ServerManager の管理情報に不整合が発生している場合があります。

[対処方法]

SigmaSystemCenter と ESMPRO/ServerManager との管理情報の不整合を解消するために、ESMPRO/ServerManager のコンポーネント削除、再登録を行ってください。

ESMPRO/ServerManager でマネジメントコントローラ管理を行っている場合は、置換前後の物理マシンに対応する情報の削除、再登録も必要です。

1. コンポーネント削除

1. ESMPRO/ServerManager の WebGUI にログインします。
2. 所属グループの [グループ情報] タブの [コンポーネント一覧] を選択します。
3. 置換処理が実行されたブレードサーバ、および対応する BMC のコンポーネントの行の右端に表示されている [削除] をクリックします。

2. コンポーネントの再登録

1. ESMPRO/ServerManager の WebGUI にログインします。

2. [グループ情報] タブの [コンポーネントの追加] - [自動登録] を選択します。
3. IP アドレス範囲指定検索で、削除した対象コンポーネントの IP アドレスを含む範囲を指定します。
4. 必要に応じて各項目の設定を行い、[検索] をクリックします。

3. アクセス不能アラート検出設定

1. 登録したコンポーネントを選択します。
2. [設定] タブの [サーバ監視設定] を選択し、[編集] をクリックします。
3. [SNMP による監視] の [サービス無応答時にアラートを登録する] を "有効" に設定します。

注: ESMPRO/ServerAgentService を管理している場合、[SNMP による監視] は表示されません。この場合、[Ping による監視] の [サーバ無応答時にアラートを登録する] を "有効" に設定してください。

4. [アラートの抑制] の [リトライ回数] に値を設定します。

注: [リトライ回数] に設定する値は、SigmaSystemCenter のグループプロパティ設定の [死活監視] タブに設定されている [サーバダウン検出リトライ回数] の値を設定してください。

グループプロパティ設定の [死活監視] タブについては、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「5.5.14 [死活監視] タブを設定するには」を参照してください。

5. [適用] をクリックします。

注: 上記以外の ESMPRO/ServerManager の設定項目を変更していた場合、適宜手動で再設定を行ってください。

上記対処実施後、ESMPRO/ServerManager の WebGUI が正しく表示されない、コンポーネントを削除できない場合は、サポート窓口にお問い合わせください。

2.2.33. LDAP 認証しようとするログインできない

[現象 1]

以下のメッセージがウィンドウに表示される場合があります。

「LDAP 認証に失敗しました。[サーバは使用可能ではありません。]」

[原因 1]

設定ファイルに記載した LDAP サーバに誤りがある、または LDAP サーバに接続できない可能性があります。

[対処方法 1]

<SystemProvisioning のインストールディレクトリ>%conf に格納されている設定ファイル (LdapConfig.xml) を確認してください。

<Host>には LDAP サーバのホスト名、または IP アドレスを設定してください。

設定ファイルの設定が正しい場合は、LDAP サーバへのネットワーク接続を確認してください。

[現象 2]

以下のメッセージがウィンドウに表示される場合があります。

「LDAP 認証は無効です。」

[原因 2]

設定ファイルが存在しない、または設定内容が有効でない可能性があります。

[対処方法 2]

設定ファイル (LdapConfig.xml) が <SystemProvisioning のインストールディレクトリ>%conf に格納されていることを確認してください。

存在しない場合は、opt%ldap 配下からサンプルファイルを参考に作成してください。

存在する場合は、設定ファイルの<Enable>の設定を確認してください。

<Enable>の値が "1"、または "true" の場合は有効です。

[現象 3]

以下のメッセージがウィンドウに表示される場合があります。

「ログオン失敗: ユーザ名を認識できないか、またはパスワードが間違っています。」

[原因 3-1]

LDAP サーバにユーザが存在しない、またはユーザのパスワードに誤りがある可能性があります。

[対処方法 3-1]

LDAP サーバ管理者に連絡して、ユーザが登録されていることを確認してください。

ユーザが登録されている場合は、パスワードを確認してください。

ユーザが登録されていない場合は、ユーザを登録してください。

[原因 3-2]

LDAP サーバ上のユーザが無効になっている、または [ユーザは次回ログオン時にパスワード変更が必要] に設定されている可能性があります。

[対処方法 3-2]

LDAP サーバ管理者に連絡して、ユーザが有効になっていることを確認してください。

ユーザが無効の場合は、[アカウントを無効にする] のチェックをオフにしてください。

ユーザが有効の場合は、[ユーザは次回ログオン時にパスワード変更が必要] チェックをオフにしてください。

[現象 4]

以下のメッセージがウィンドウに表示される場合があります。

「LDAP 認証に失敗しました。[ログイン失敗: ユーザー名を認識できないか、またはパスワードが間違っています。]」

[原因 4]

LDAP サーバの種類が、OpenLDAP の場合に発生する可能性があります。

設定ファイルに記載した<UserDnPattern>が、LDAP サーバ上の構成と、異なっている可能性があります。

[対処方法 4]

LDAP サーバと、<SystemProvisioning のインストールディレクトリ>\¥conf に格納されている設定ファイル (LdapConfig.xml) を確認してください。

<UserDnPattern>の内容を、LDAP サーバ上のユーザの構成と同じ設定を行ってください。

設定ファイルの設定が正しい場合は、LDAP サーバの構成を確認してください。

2.2.34. DeploymentManager を経由した Linux マシンへの固有情報反映が遅くなる

[現象]

DeploymentManager を経由した Linux マシンへの固有情報反映が、SigmaSystemCenter 3.2 以前よりも 1～2 分程度遅くなる場合があります。

[原因]

DeploymentManager を経由した固有情報反映にて、IPv6 の DHCP による動的 IP アドレス設定をサポートしていますが、固有情報反映による IPv6 関連の設定に 1～2 分程度遅くなる場合があるためです。

[対処方法]

DeploymentManager を経由した固有情報反映の遅延を回避するためには、Linux マスタマシンで IPv6 を無効にしてください。

2.2.35. 管理サーバのセキュリティイベントログに「Anonymous Logon」が大量に出力される

[現象]

管理サーバのセキュリティイベントログに「Anonymous Logon」のメッセージが大量に出力されます。

[原因]

SigmaSystemCenter では、管理サーバ群の監視機能として、設定されている管理サーバの情報を定期的にチェックしています。その際に、本イベントログを記載するようになり、大量のイベントログが出力されます。

[対処方法]

SigmaSystemCenter の管理サーバ群の機能はご利用いただけなくなりますが、管理サーバ群の機能自身を無効にすることで、本事象を回避することが可能です。下記の手順を実行してください。

◆ 対象ファイル

<SystemProvisioning のインストールディレクトリ>\¥bin¥ PVMServiceProc.exe.config
(既定値: C:\¥Program Files (x86)\¥NEC¥PVM¥bin)

◆ 変更手順

変更を有効にするには、PVMService の再起動が必要となります。

SigmaSystemCenter での運用 (ジョブの実行など) を行っていないことを確認し、変更してください。

1. 上記の「◆ 対象ファイル」を修正する前に、ファイルのバックアップを行ってください。
2. 下記の「◆ ファイル変更箇所」を参照し、「★」印の行を削除してください。
3. [スタート] メニュー - [コントロールパネル] - [管理ツール] - [サービス] から、PVMService を再起動してください。
4. Web ブラウザを起動して、SigmaSystemCenter の Web コンソールにログインできることを確認してください。
5. セキュリティログのログ出力の状況を数分間見て、イベントログに「Anonymous Logon」のメッセージが記載されないことを確認してください。

◆ ファイル変更箇所

★印の行を削除してください。

```

:
:
<system.serviceModel>
  <services>
    <service name="UniversalConnectorServer"
      behaviorConfiguration="UniversalConnectorServiceConfig">
      <host>
        <baseAddresses>
★      <add
baseAddress="http://localhost:26150/UniversalConnectorServer" />
        <add
baseAddress="net.tcp://localhost:26102/UniversalConnectorServer" />
        </baseAddresses>
      </host>
★      <endpoint
★      bindingNamespace="Nec.SystemProvisioning.UniversalConnector"
★      contract="Nec.SystemProvisioning.UniversalConnector.IUniversalConnector
Server"
★      binding="wsHttpBinding"
★      address="" />
        <endpoint
          bindingNamespace="Nec.SystemProvisioning.UniversalConnector"
          contract="Nec.SystemProvisioning.UniversalConnector.IUniversalConnector
Server"
          binding="netTcpBinding"
          bindingConfiguration="NetTcpBinding_IUniversalConnectorServer"
          address="" />
        </service>
      </services>
      :
      :
    <behaviors>
      <serviceBehaviors>
        <behavior name="UniversalConnectorServiceConfig">
★      <serviceMetadata httpGetEnabled="true" />
        <serviceThrottling maxConcurrentSessions="2147483647"
maxConcurrentCalls="2147483647" />
        <dataContractSerializer maxItemsInObjectGraph="2147483647" />
        </behavior>
      </serviceBehaviors>
    </behaviors>
    :
    :

```

2.2.36. 大規模環境で ssc show machine を実行するとエラーが発生してマシン情報が表示されない

[現象]

大規模環境を構築した管理サーバで ssc show machine コマンドを実行すると、下記エラーメッセージが表示されて、マシンの情報を表示できません。

※大規模環境とは、ユーザの環境により異なりますが、管理対象マシンを 1,000 台以上管理していると発生する可能性があります。

以下のエラーメッセージが表示されます。

「受信メッセージの最大メッセージ サイズ クォータ (65536000) を超えました。
このクォータを増やすには、適切なバインド要素の MaxReceivedMessageSize プロパティを使用してください。」

[原因]

ssc コマンドは、発行したコマンド結果を受信する際に、受信サイズを ssc.exe.config というファイルで定義しています。この受信サイズが定義しているサイズ (65536000) を超えてしまうと発生します。

[対処方法]

ssc.exe.config ファイルに定義している受信サイズを変更することで、本現象を回避することができます。下記の手順を実行してください。

◆ 対象ファイル

<SystemProvisioning のインストールディレクトリ>%bin%\ssc.exe.config
(既定値: C:\Program Files (x86)\NEC\PVM\bin)

◆ 変更手順

1. 上記の「◆ 対象ファイル」を修正する前に、ファイルのバックアップを行ってください。
2. 下記の「◆ ファイル変更箇所」を参照し、「★」印の行を編集してください。

◆ ファイル変更箇所

★印の「maxBufferSize」の値 (65536000) を「2147483647」に変更してください。

```

:
:
<netTcpBinding>
  <binding name="NetTcpBinding_IUniversalConnectorServer"
closeTimeout="00:30:00"
    openTimeout="00:03:00" receiveTimeout="00:10:00"
sendTimeout="00:05:00"
    transactionFlow="false" transferMode="Buffered"
transactionProtocol="OleTransactions"
    hostNameComparisonMode="StrongWildcard"
listenBacklog="2147483647"
★    maxBufferPoolSize="524288" maxBufferSize="65536000"
maxConnections="10"
    maxReceivedMessageSize="65536000">
  <readerQuotas maxDepth="128" maxStringContentLength="8192000"
maxArrayLength="163840000"
    maxBytesPerRead="4096000" maxNameTableCharCount="163840000" />
  <reliableSession ordered="true" inactivityTimeout="00:10:00"
    enabled="false" />
  <security mode="Transport">
    <transport clientCredentialType="Windows"
protectionLevel="EncryptAndSign" />
    <message clientCredentialType="Windows" />
  </security>
</binding>
</netTcpBinding>
:
:

```

2.2.37. ストレージ制御でエラー、または警告を示す運用ログが出力される

[現象]

以下のストレージ制御を行った場合に、ストレージ関連のエラー、または警告を示す運用ログが出力されることがあります。

操作内容	運用ログに出力される内容
稼動 (置換・用途変更)	マシン (マシン名) は、ストレージ制御できません。
ストレージの割り当て	マシンにHBAが設定されていないため、アクセスコントロールはできません (マシン名)。 マシンにNICが設定されていないため、アクセスコントロールはできません (マシン名)。
ストレージの割り当て解除	マシンにHBAまたはNICが設定されていないため、volumeの割り当て解除ができませんでした (マシン名 / volume名, volume名...)。
ストレージ収集	稼動マシンにHBAまたはNICが設定されていません(マシン名, マシン名, マシン名...)。

操作内容	運用ログに出力される内容
sscコマンドでのストレージ割り当て時 / 割り当て解除 (assign diskvolume / release diskvolume)	指定したマシン名にHBAが存在しないため指定した操作は実行できません。

[原因]

ストレージ制御を行う対象のマシンに、制御対象のストレージへ接続可能な HBA (NFS の場合は NIC) が存在していないため、ストレージ制御に失敗した可能性があります。

[対処方法]

[リソース] ビューで対象マシンのストレージ (NFS の場合はネットワーク) プロパティを参照し、制御対象のストレージ装置へ接続可能な HBA (NFS の場合は NIC) が設定されていることを確認してください。また、既にマシンが稼動中の場合、リソース割り当て解除を行ってから再度実行してください。

また、[運用] ビューで運用グループ、またはホスト設定から [ストレージ] タブを参照し、HBA 番号やアドレスが正しく設定されていることを確認してください。

2.2.38. iStorage への操作が失敗する

[現象]

iStorage 操作時に、以下の原因により処理が失敗します。

管理方法	原因
iSM / Integration Base管理	iStorageManagerの処理が失敗しました:iStorageManagerのロック取得に失敗しました。Integration Base未起動の可能性があります。
SMI-Sサービス管理	[SMI-S] CIMサーバの処理でエラーが発生しました。(Other user is configuring now. [4])

[原因]

iStorageManager GUI で、対象装置が「構成変更中」の場合、対象装置がロックされています。

[対処方法]

iStorageManager GUI で、構成変更を終了し、装置を「監視:実行中」の状態にしてください。

2.2.39. 統合サービスを更新すると新規割り当てに失敗する

[現象]

Windows Server 2012 R2 の Hyper-V において、マスタ VM に Windows 8 (x64 OS)、もしくは Windows Server 2012 をインストールし、その統合サービスを Windows Server 2012 R2 Hyper-V の統合サービス (6.3.9600.16384) に更新します。その後、Differential Clone などのテンプレート作成後に新規割り当てを実行すると、作成された仮想マシンがエラーで起動できなくなります。(エラーコード/状態: 0xc0000098)

[原因]

ドライバストアの問題により、ドライババージョンの不整合が発生するためです。
詳しくは、以下の KB を参照してください。

<http://support.microsoft.com/kb/2923655/ja>

[対処方法]

マスタ VM に Windows Update を適用するか、下記のページから修正プログラムをダウンロードし、適用します。

<http://support.microsoft.com/kb/2822241>

2.2.40. [監視] ビューの「運用ログ」ウィンドウの表示が文字化けする

[現象]

OS が Windows の管理対象マシンに対して行ったソフトウェアの配布の結果が [監視] ビューの「運用ログ」ウィンドウ上で文字化けする場合がある。

[原因]

管理対象マシンの DPM クライアントのバージョンが、管理サーバのバージョンより古いバージョンになっている場合に発生します。

[対処方法]

「SigmaSystemCenter インストレーションガイド」の「3.7. Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへアップグレードインストールする」を参照して、DPM クライアントを管理サーバと同じバージョンにアップグレードしてください。

2.2.41. LDAP サーバとの同期が正しく行われない

[現象 1]

以下のメッセージがウィンドウに表示される場合があります。

「LDAP 認証に失敗しました。[サーバは使用可能ではありません。]」

[原因 1]

設定ファイルに記載した LDAP サーバに誤りがある、または LDAP サーバに接続できない可能性があります。

[対処方法 1]

<SystemProvisioning のインストールディレクトリ>%conf に格納されている設定ファイル (LdapConfig.xml) を確認してください。

<Host>には LDAP サーバのホスト名、または IP アドレスを設定してください。

設定ファイルの設定が正しい場合は、LDAP サーバへのネットワーク接続を確認してください。

[現象 2]

以下のメッセージがウィンドウに表示される場合があります。

「LDAP 認証は無効です。」

[原因 2]

設定ファイルが存在しない、または設定内容が有効でない可能性があります。

[対処方法 2]

設定ファイル (LdapConfig.xml) が<SystemProvisioning のインストールディレクトリ>%conf に格納されていることを確認してください。

存在しない場合は、opt%ldap 配下からサンプルファイルを参考に作成してください。

存在する場合は、設定ファイルの<Enable>の設定を確認してください。

<Enable>の値が "1"、または "true" の場合は有効です。

[現象 3]

LDAP サーバ上のグループに所属するユーザが、すべて反映されない。

[原因 3-1]

設定ファイルに記載した上限値<MaxLimit>を、同期対象となるグループとユーザの数が上回っている可能性があります。

[対処方法 3-1]

<SystemProvisioning のインストールディレクトリ>%conf に格納されている設定ファイル (LdapConfig.xml) を確認してください。

<MaxLimit>の値を変更してください。

同期対象となるグループに所属するユーザ数は、延べ数であることに注意してください。

例:

グループ A と B にユーザ C がそれぞれ所属していた場合、同期対象となる件数は、グループで 2 件、それぞれに所属しているユーザ C で 2 件となり、計 4 件として扱われます。

[原因 3-2]

同期対象となるグループと所属するユーザの数が、LDAP サーバから応答できる件数を超えている可能性があります。

[対処方法 3-2]

それぞれの LDAP サーバのマニュアルを参照し、設定を変更してください。

[現象 4]

LDAP サーバ上のグループに所属するユーザの内、同期によって反映されないものがある。

[原因 4]

LDAP サーバ上の同期対象となるグループと所属するユーザの位置 (DN) が異なる場合、LDAP サーバとの同期では反映されません。

[対処方法 4]

LDAP サーバ上のグループ、またはユーザの位置を同じ位置に変更してください。

2.2.42. スタンドアロンの Hyper-V ホストの収集がスキップされる

[現象]

SigmaSystemCenter でスタンドアロンの Hyper-V ホストを登録して管理する場合、Hyper-V ホストの収集が失敗して、以下のようなメッセージが表示されることがあります。

「アクションの状況:(〇〇%) : VM サーバ(xxx.xxx.xxx.xxx)の収集をスキップします。(VM サーバ(xxx.xxx.xxx.xxx)に接続できません。)」

[原因]

以下の条件を満たした場合、収集が失敗することがあります。

- ◆ 対象の Hyper-V ホストがドメインに所属している。
- ◆ DNS の逆引き登録をしていない。
- ◆ ホストは IP アドレスを用いてマシンを登録している。

- ◆ ローカルの管理者権限で管理している。
- ◆ DNS がクローズド環境で運用されている。

[対処方法 1]

1. DNS サーバに Hyper-V ホストサーバの IP を逆引き登録します。
2. サブシステム編集で、使用するアカウント名を以下のように変更します。
administrator → ホスト名¥administrator

[対処方法 2]

DNS に、Hyper-V ホスト名を登録したうえで、SigmaSystemCenter のサブシステム画面で、編集を行い、IP アドレスから、FQDN に変更します。

2.2.43. 使用済みの RDM ディスクが認識されなくなる

[現象]

仮想マシンのゲスト OS で、RDM ディスクにパーティションを作成した後、RDM ディスクを外すか、VM 削除する場合、RDM ディスクが Hyper-V ホストに認識されて、ドライブレターが自動的に付与されるため、SigmaSystemCenter の収集で、RDM ディスクのリストから削除されることがあります。

[原因]

Hyper-V ホストにて、ファイルシステムが存在するディスクが自動マウントされることにより発生します。

[対処方法]

管理者権限のあるコマンドプロンプトから、次のコマンドで Hyper-V ホストの自動マウント機能を無効にします。

```
diskpart.exe  
> automount disable
```

2.2.44. ポリシーによる Hyper-V ホストのシャットダウンが失敗する

[現象]

SigmaSystemCenter でクラスタの Hyper-V に、ポリシーの「VM サーバ停止 (予兆)」による Hyper-V ホストのシャットダウンが失敗します。

[原因]

SigmaSystemCenter から予兆や省電力などで、クラスタを構成する Hyper-V のホストをシャットダウンする場合、通常のシャットダウンとは違い、安全にシャットダウンできるかどうかの判断を行います。

この動作に関係なくノードのシャットダウンを行うには、Microsoft Failover Cluster のクォーラム設定の変更が必要です。

[対処方法]

設定の変更は、以下の手順で行います。

1. クラスタのノード上で、フェールオーバークラスターマネージャを起動します。
2. 左ペインからクラスタ名をクリックします。
3. 右ペインの [他のアクション] から、[クラスター クォーラム設定の構成] を選択します。
4. 「開始する前に」が表示されたら [次へ] をクリックします。
5. [クォーラム構成の詳細を設定する] を選択し、[次へ] をクリックします。
6. [ノードなし] を選択し、[次へ] をクリックします。
7. クラスターグループにあるディスクを選択し、[次へ] をクリックします。
8. [完了] をクリックします。

この構成は、警告が表示されますが、この警告の意味は、ディスクに問題が起きた場合にクラスタの動作が停止するという警告です。しかし、仮想マシンの動作は元のディスクに依存しているため、可用性が大きく失われることはありません。

2.3. 構成情報管理のトラブルシューティング

2.3.1. データベースに接続できない

[現象]

以下のメッセージがウィンドウに表示されることがあります。

「データベースへの接続ができません。接続先の設定を確認してください。」

[原因 1]

構成情報データベースのサービスが停止している可能性があります。

[対処方法 1]

Windows の管理ツール「サービス」を使用して、構成管理データに利用しているデータベースのインスタンス名に対応したサービスが動作していることを確認してください。SystemProvisioning をインストールしてからデータベースの移行を行っていない場合、管理サーバ上のサービス名は、「MSSQL\$SSCCMDB」です。

サービスの起動後に、SystemProvisioning を再起動してください。

[原因 2]

構成情報データベースの接続情報が変更された可能性があります。

[対処方法 2]

「構成情報管理」画面にて、構成情報データベースへの接続情報を確認してください。

画面表示されるマシン名、インスタンス名、認証モード、アカウント名、パスワードの各項目が正しいことを確認してください。

「構成情報管理」画面は、<SystemProvisioning のインストールディレクトリ>\bin 配下の PvmConfig.exe から起動します。

接続情報の設定後に、SystemProvisioning を再起動してください。

2.3.2. 管理サーバを起動した際に、構成情報の収集処理が Warning で終了する

[現象]

管理サーバを再起動した際に、運用ログに以下のメッセージを出力し、構成情報のストレージの収集処理が Warning で終了する。

「Nec.SystemProvisioning.Provider.NecStorage.RefreshAll の処理で警告が発生しました。」

(iStorageManager の処理が失敗しました: Integration Base が iStorageManager サービスと接続できません。～)」

[原因]

管理サーバを再起動して PVM サービスが起動されると、構成情報の収集が実行されます。OS 起動直後、iStorageManager Service が起動される前に収集が実行された場合、この現象が発生します。

[対処方法]

Warning の原因が、iStorageManager Service 未起動による収集の失敗である (ログに上記メッセージが表示されている) 場合、iStorageManager Service の起動完了後に手動で再度収集を実行してください。成功すれば問題ありません。

2.3.3. SQL Server のトランザクションログのサイズが大きくなる

[現象]

SQL Server のトランザクションログ (拡張子が LDF のファイル) のサイズが大きくなることによりディスク容量が圧迫され、SigmaSystemCenter の性能が劣化する。

[原因]

SigmaSystemCenter では、管理対象の情報、運用ログ、性能データ、イメージデータなどの様々なデータの追加・更新・削除処理が SQL Server に対して頻繁に行われますが、復旧モデルを Full (完全復旧モデル) にすると、Full (完全復旧モデル) の動作仕様により以下の問題が発生しやすくなります。

- ◆ 頻繁なデータ更新や大量データの書き込みによりトランザクションログのサイズが肥大化し、ディスク容量を圧迫する。

[参考]

SQL Server の各復旧モデルは以下の特徴があります。

- ◆ SIMPLE (単純復旧モデル)
SQL Server Express Edition の既定値です。必要なディスクスペースが少なくなるようにトランザクションログ領域が自動的に再利用されます。
- ◆ FULL (完全復旧モデル)
SQL Server Standard Edition の既定値です。定期的なバックアップ、またはトランザクションログの圧縮を行わない限り、ディスクスペースを圧迫するまでログファイルを採取します。

[対処方法]

次の手順でデータベースの不要領域の圧縮と復旧モデルの設定変更を実施してください。

1. [スタート] メニューから [コントロールパネル] - [管理ツール] - [サービス] から、以下の表の SigmaSystemCenter のサービスをすべて停止します。

管理対象の数が非常に多く、データベースの更新頻度が非常に多い環境でサービスを停止せずに手順 6 のログファイルの圧縮を行ったとき、データベースの更新の影響を受けて稀に圧縮が失敗する場合があります。確実にログファイルの圧縮を行うためには本手順を実施してください。

注: サービス停止により、SigmaSystemCenter の各機能が利用できなくなります。

- ・ SystemProvisioning
 - ・ 管理対象マシンに対する各種制御
 - ・ 管理対象マシンに対する監視や監視を契機として復旧処理の実行
- ・ SystemMonitor 性能監視
 - ・ 管理対象マシンの性能データ収集、閾値監視
- ・ DeploymentManager
 - ・ 管理対象マシンのバックアップ・リストア
 - ・ 管理対象マシンに対するソフトウェア配布

コンポーネント	サービス名
SystemProvisioning	PVMService
SystemMonitor性能監視	System Monitor Performance Monitoring Service
DeploymentManager	DeploymentManager API Service
	DeploymentManager Backup/Restore Management
	DeploymentManager Get Client Information
	DeploymentManager PXE Management
	DeploymentManager PXE Mtftp
	DeploymentManager Remote Update Service
	DeploymentManager Schedule Management
	DeploymentManager Transfer Management

2. データベースのログファイルのファイルサイズを確認します。

SigmaSystemCenter は、2 つの SQL Server のインスタンスを使用します。それぞれのインストールディレクトリ配下にあるファイルを確認してください。

注: SQL Server のインストールディレクトリは、SQL Server のバージョンによって異なります。

- ・ SQL Server 2008 R2
 - ・ SystemProvisioning / SystemMonitor 性能監視
C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL10_50.SSCEMDB\MSSQL\DATA
 - ・ DeploymentManager
C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL10_50.DPMDBI\MSSQL\DATA
- ・ SQL Server 2012
 - ・ SystemProvisioning / SystemMonitor 性能監視
C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL11.SSCEMDB\MSSQL\DATA
 - ・ DeploymentManager
C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL11.DPMDBI\MSSQL\DATA
- ・ SQL Server 2014
 - ・ SystemProvisioning / SystemMonitor 性能監視
C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL12.SSCEMDB\MSSQL\DATA
 - ・ DeploymentManager
C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL12.DPMDBI\MSSQL\DATA
- ・ SQL Server 2016
 - ・ SystemProvisioning / SystemMonitor 性能監視
C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL13.SSCEMDB\MSSQL\DATA
 - ・ DeploymentManager
C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL13.DPMDBI\MSSQL\DATA

確認するファイルは以下の通りです。

コンポーネント	インスタンス名	ファイル名
SystemProvisioning	SSCEMDB	pvmnf_log.LDF
SystemMonitor性能監視		RM_PerformanceDataBase2_log.ldf
DeploymentManager	DPMDBI	DPM_LOG.LDF

3. データベースのバックアップを行います。

下記の通り、C:¥temp にバックアップファイル backup_pvm.dat、backup_sysmon.dat、backup_dpm.datを作成します。インスタンス名を既定値より変更している場合、使用インスタンス名に指定を変更してください。既定値は、SystemProvisioning と SystemMonitor 性能監視は "SSCCMDB"、DeploymentManager は "DPMDBI" です。

バックアップファイルのサイズは、バックアップ対象のデータファイル（拡張子が MDF のファイル）と同程度のサイズとなります。

```
sqlcmd -E -S (local)¥SSCCMDB -d pvminf -Q "backup database
pvminf to disk = 'C:¥temp¥backup_pvm.dat' with init"
sqlcmd -E -S (local)¥SSCCMDB -d RM_PerformanceDataBase2
-Q "backup database RM_PerformanceDataBase2 to disk =
'C:¥temp¥backup_sysmon.dat' with init"
sqlcmd -E -S (local)¥DPMDBI -d DPM -Q "backup database DPM
to disk = 'C:¥temp¥backup_dpm.dat' with init"
```

4. データベースの復旧モデルを確認します。

次のコマンドで、使用しているデータベースの復旧モデルが表示されます。

```
sqlcmd -E -S (local)¥SSCCMDB -W -Q "SELECT
DATABASEPROPERTYEX('pvminf','Recovery')"
sqlcmd -E -S (local)¥SSCCMDB -W -Q "SELECT
DATABASEPROPERTYEX('RM_PerformanceDataBase2','Recovery
')"
sqlcmd -E -S (local)¥DPMDBI -W -Q "SELECT
DATABASEPROPERTYEX('DPM','Recovery')"
```

5. 手順 4 で復旧モデルが "FULL" と表示された場合、復旧モデルを "SIMPLE" に変更します。

```
sqlcmd -E -S (local)¥SSCCMDB -Q "alter database pvminf set
RECOVERY SIMPLE"
sqlcmd -E -S (local)¥SSCCMDB -Q "alter database
RM_PerformanceDataBase2 set RECOVERY SIMPLE"
sqlcmd -E -S (local)¥DPMDBI -Q "alter database DPM set
RECOVERY SIMPLE"
```

6. 次にトランザクションログファイルのサイズ縮小を行います。

```
sqlcmd -E -S (local)¥SSCCMDB -Q "use pvminf;DBCC
SHRINKFILE (pvminf_log)"
```

```
sqlcmd -E -S (local)\SSCCMDB -Q "use
RM_PerformanceDataBase2;DBCC SHRINKFILE
(RM_PerformanceDataBase2_log)"
sqlcmd -E -S (local)\DPMDBI -Q "use DPM;DBCC SHRINKFILE
(DPM_log)"
```

7. ログファイルのファイルサイズが、手順 2 で確認したサイズよりも小さくなっていることを確認します。確認対象のファイルは、手順 2 の表を確認してください。
8. 手順 1 で SigmaSystemCenter の各サービスを停止している場合はサービスを開始します。開始対象のサービスは手順 1 を参照してください。

2.3.4. Web コンソールの画面表示が遅くなり性能が劣化する

[現象]

Web コンソールの画面表示が遅くなり、性能が劣化する。

[原因]

SQL Server データベース エンジンでは、データベースにデータを挿入、更新、削除を繰り返していると、断片化という現象が起こり、データベースへのアクセスが遅くなる場合や SigmaSystemCenter の制御ができなくなる場合があります。

[対処方法]

断片化の確認、解消を実施し、データベースへのアクセス速度の回復と性能を維持してください。

◆ 断片化の確認手順

1. [スタート] メニューから [すべてのプログラム] - [アクセサリ] - [コマンド プロンプト] をクリックし、コマンドプロンプトを起動します。
2. 下記の ssc コマンドを実行してデータベースの断片化状態の一覧を確認します。

```
ssc maintenance cmdb -all -tbl
```

ssc コマンドを実行すると、下記のようにデータベースの断片化状態の一覧が表示されます。

[出力結果例]

```
[Cmdb Table Fragment]
Table Name          Fragmentation Average
-----
TBL_EventHistory    99.19
TBL_ManagementLogHistory 99.03
TBL_EventAction      98.99
      :              :
```

Fragmentation Average の値が断片化率 (%) となります。

断片化率が "100" に近いほど、断片化が発生していることになります。

断片化率が "80" を超えている場合は、断片化の解消手順を実行することを推奨します。

◆ 断片化の解消手順

1. [スタート] メニューから [コントロールパネル] - [管理ツール] - [サービス] から、"PVM Service" を停止します。
2. [スタート] メニューから [すべてのプログラム] - [アクセサリ] - [コマンド プロンプト] をクリックし、コマンドプロンプトを起動します。
3. 下記の ssc コマンドを実行し、データベース領域の断片化を解消します。

```
ssc maintenance cmdb -defrag 0
```

4. 「◆ 断片化の確認手順」を実行し、データベースの断片化状態の一覧を表示します。このとき、一覧の Fragmentation Average の値が、"80" より小さくなっていることを確認します。
5. [スタート] メニューから [コントロールパネル] - [管理ツール] - [サービス] から、"PVM Service" を開始します。

2.3.5. sqlcmd を実行するとアクセス権不足によるエラーが発生する

[現象 1]

以下の実行例のように、データベースにアクセスできないことを示すエラーが表示される。

```
「sqlcmd -E -S (local)¥SSCCMDB -d pvminf -Q "backup database pvminf to disk = 'C:¥temp¥backup_pvm.dat' with init"
```

メッセージ 916、レベル 14、状態 1、サーバー SSC 管理サーバ名¥SSCCMDB、行 1

現在のセキュリティ コンテキストでは、サーバー プリンシパル "SSC 管理サーバ名¥ユーザ名" はデータベース "PVMINF" にアクセスできません。

メッセージ 3013、レベル 16、状態 1、サーバー SSC 管理サーバ名¥SSCCMDB、行 1
BACKUP DATABASE が異常終了しています。」

または、

「メッセージ 262、レベル 14、状態 1、サーバー SSC 管理サーバ名¥SSCCMDB、行 1
BACKUP DATABASE 権限がデータベース 'PVMINF' で拒否されました。

メッセージ 3013、レベル 16、状態 1、サーバー SSC 管理サーバ名¥SSCCMDB、行 1
BACKUP DATABASE が異常終了しています。」

[原因 1]

sqlcmd を実行したユーザアカウントが SQL Server に登録されていません。または、実行しようとしているデータベースへの操作の権限が sqlcmd を実行したユーザアカウントに付与されていません。

[対処方法 1-1]

SSC 管理サーバに SSCCMDB インスタンスをインストールしたユーザアカウントでログインします。

[対処方法 1-2]

SQL Server の管理者権限を持つユーザアカウントを使用して、SQL Server に対してユーザアカウントやロールの設定を行います。SQL Server の管理者権限は、デフォルトでは、SSCCMDB インスタンスをインストールしたユーザアカウントに対して与えられます。

1. SSC 管理サーバに SSCCMDB インスタンスをインストールしたユーザアカウントでログインします。
2. 使用するユーザアカウントを SQL Server に登録し、十分な実行権を設定します。下記の例では、最上位の権限の「sysadmin」を設定しています。

<SQL Server 2012 / 2014 / 2016 の場合>

```
sqlcmd -E -S (local)¥SSCCMDB
```

```
1> CREATE LOGIN [SSC 管理サーバ名¥ユーザ名] FROM WINDOWS
```

```
2> GO
```

```
1> ALTER SERVER ROLE [sysadmin] ADD MEMBER [SSC 管理サーバ名¥ユーザ名]
```

```
2> GO
```

<SQL Server 2008 R2 の場合>

```
sqlcmd -E -S (local)¥SSCCMDB
```

```
1> exec master..sp_addsrvrolemember @loginame = N'SSC 管理サーバ名¥アカウント', @rolename = N'sysadmin'
```

```
2> GO
```

[現象 2]

以下の実行例のように、バックアップファイルの出力先フォルダにフォルダ作成の権限がないことを示すエラーが表示される。

```
「sqlcmd -E -S (local)¥SSCCMDB -d pvminf -Q "backup database pvminf to disk = 'C:¥temp¥backup_pvm.dat' with init"
```

メッセージ 3201、レベル 16、状態 1、サーバー SSC 管理サーバ名¥SSCCMDB、行 1
バックアップ デバイス 'C:¥temp¥backup_pvm.dat' を開けません。オペレーティング システム エラー 5(アクセスが拒否されました。)

メッセージ 3013、レベル 16、状態 1、サーバー SSC 管理サーバ名¥SSCCMDB、行 1
BACKUP DATABASE が異常終了しています。」

[原因 2]

Sqlcmd を実行したユーザアカウントに、バックアップファイルの出力先フォルダにフォルダ作成の権限がありません。

[対処方法 2]

1. sqlcmd を実行したユーザアカウントに対して、バックアップファイルの出力先フォルダにファイル作成の権限を追加します。
2. 再度 sqlcmd を実行します。

付録

• 付録 A	改版履歴.....	161
• 付録 B	ライセンス情報	163

付録 A 改版履歴

- ◆ 第 2 版 (2016.11): Update1 での機能強化に関する記載を追加して改版

Windows Server 2016 サポートによる記載追加

1章 「1.2.4 仮想マシンの設定について」

VMware 連携機能強化による記載の追加、および修正

1章 「1.2.1 システム構成について」

「1.2.2 仮想環境構築について (関連製品の設定)」

「1.2.7 仮想マシンの操作について」

「1.2.16 その他の注意事項」

Windows Server 2016 Hyper-V サポートによる記載追加

1章 「1.2.4 仮想マシンの設定について」

バックアップ/リストア機能の強化による記載の追加、修正

1章 「1.1.7 SystemProvisioningでリストアシナリオを実行する場合について」

- ◆ 第 1 版 (2016.4): 新規作成

付録 B ライセンス情報

本製品には、一部、オープンソースソフトウェアが含まれています。当該ソフトウェアのライセンス条件の詳細につきましては、以下に同梱されているファイルを参照してください。また、GPL / LGPL に基づきソースコードを開示しています。当該オープンソースソフトウェアの複製、改変、頒布を希望される方は、お問い合わせください。

<SigmaSystemCenter インストール DVD>¥doc¥OSS

- 本製品には、Microsoft Corporation が無償で配布している Microsoft SQL Server Express を含んでいます。使用許諾に同意したうえで利用してください。著作権、所有権の詳細につきましては、以下の LICENSE ファイルを参照してください。

<Microsoft SQL Server Express をインストールしたフォルダ>¥License Terms

- Some icons used in this program are based on Silk Icons released by Mark James under a Creative Commons Attribution 2.5 License. Visit <http://www.famfamfam.com/lab/icons/silk/> for more details.

- This product includes software developed by Routrek Networks, Inc.

- This product includes NM Library from NetApp, Inc. Copyright 2005 - 2010 NetApp, Inc. All rights reserved.

